

WebSAM vDC Automation v7.0

Standard Edition セットアップガイド

第 1 版
2020 年 4 月

日本電気株式会社

免責事項

本書の内容はすべて日本電気株式会社が所有する著作権に保護されています。

本書の内容の一部または全部を無断で転載および複製することは禁止されています。

本書の内容は将来予告なしに変更することがあります。

日本電気株式会社は、本書の技術的もしくは編集上の間違い、欠落について、一切責任を負いません。

日本電気株式会社は、本書の内容に関し、その正確性、有用性、確実性その他いかなる保証もいたしません。

商標

- SigmaSystemCenter、WebSAM、Netvisor、iStorage、ESMPRO、EXPRESSBUILDER、EXPRESSSCOPE、SIGMABLADE、UNIVERGE、および、ProgrammableFlow は日本電気株式会社の登録商標です。
- VMware は、米国およびその他の地域における VMware, Inc. の登録商標または商標です。
- Microsoft、Windows、Windows Server、Windows Vista、Internet Explorer、SQL Server、Hyper-V および Azure は米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
- Linux は Linus Torvalds 氏の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
- Red Hat は、Red Hat, Inc.の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
- Intel、Itanium は、Intel 社の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
- Apache、Apache Tomcat、Tomcat は、Apache Software Foundation の登録商標または商標です。
- Oracle、Solaris、Java、WebLogic は、Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の米国およびその他の国における登録商標です。
- SAP は、ドイツおよびその他世界各国における SAP AG の商標または登録商標です。
- Fortinet、FortiGate、FortiClient および FortiGuard は Fortinet, Inc. の登録商標です。その他このガイド内に記載されているフォーティネット製品はフォーティネットの商標です。
- A10 Networks の AX シリーズ、Thunder シリーズは、A10 Networks, Inc.の登録商標です。
- Catalyst、IOS、Cisco IOS、Cisco、Cisco Systems、および Cisco ロゴは米国およびその他の国における Cisco Systems,Inc.の商標または登録商標です。
- F5、F5 Networks、F5 のロゴ、および本文中に記載されている製品名は、米国および他の国における F5 Networks, Inc の商標または登録商標です。
- PostgreSQL は、PostgreSQL の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

-
- Amazon、AWS、Amazon Elastic Compute Cloud は、Amazon.com, Inc.の米国および各国での商標または登録商標です。
 - OpenStack のワードマーク及びロゴは、OpenStack Foundation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
 - MySQL は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

その他、本書に記載のシステム名、会社名、製品名は、各社の登録商標もしくは商標です。

なお、® マーク、™ マークは本書に明記しておりません。

輸出する際の注意事項

本製品（ソフトウェアを含む）は、外国為替及び外国貿易法で規定される規制貨物（または役務）に該当することがあります。 その場合、日本国外へ輸出する場合には日本国政府の輸出許可が必要です。 なお、輸出許可申請手続きにあたり資料等が必要な場合には、お買い上げの販売店またはお近くの当社営業拠点にご相談ください。

はじめに

対象読者と目的

本書は、vDC Automation Standard Edition のインストールおよびアンインストールを行う システム管理者を対象読者とし、その方法について説明します。

本書の読み方

本書では、vDC Automation Standard Edition のインストール手順を説明します。

本書の表記規則

本書では、注意すべき事項、および関連情報を以下のように表記します。

注

機能、操作、設定に関する注意事項、警告事項および補足事項です。

ヒント

追加情報または参照先の情報の場所を表します。

表記一覧

本書では以下の表記方法を使用します。

表記	使用方法	例
[] 角かっこ	画面に表示される項目 (テキストボックス チェックボックス タブなど) の前後	[マシン名] テキストボックスに マシン名を入力します [すべて] チェックボックス
『 』 かぎかっこ	画面名 (ダイアログボックス ウィンドウなど)、マニュアル名の前後	『設定』 ウィンドウ 『インストレーションガイド』
コマンドライン中の [] 角かっこ	かっこ内の値の指定が省略可能であることを示します	add [/a] Gr1
モノスペースフォント (courier new)	コマンドライン システムからの出力 (メッセージ プロンプトなど)	以下のコマンドを実行してください replace Gr1
モノスペースフォント斜体 (courier new) <> 山かっこ	ユーザが有効な値に置き換えて入力する項目 値の中にスペースが含まれる場合は " (二重引用符) で値を囲んでください	add <i>GroupName</i> InstallPath= " <i>Install Path</i> " <インストール DVD>

目次

第 1 章 vDC Automation Standard Edition のセットアップの概要.....	1
1.1 vDC Automation Standard Edition 統合インストーラ.....	2
1.1.1 vDC Automation Standard Edition のインストール方法.....	2
1.1.2 vDC Automation Standard Edition 統合インストーラのインストールモード.....	2
1.1.3 vDC Automation Standard Edition 統合インストーラの Ansible playbook.....	3
1.2 vDC Automation の DVD 構成.....	3
第 2 章 機能を選択してインストールを実行する.....	4
2.1 インストールする機能の種別.....	5
2.1.1 vDC Automation Standard Edition のサーバ構成図.....	5
2.1.2 各機能の役割.....	6
2.2 事前にインストールが必要なソフトウェア.....	7
2.2.1 事前にインストールするソフトウェア一覧.....	7
2.2.2 構築自動化コマンド.....	8
2.2.2.1 構築コマンドの構成.....	9
2.2.2.2 構築自動化コマンドの使用条件.....	9
2.2.2.3 構築自動化コマンド用設定ファイルの編集.....	10
2.2.2.4 構築自動化コマンド(前処理)の実行.....	12
2.2.2.5 構築自動化コマンド(前処理)の結果確認.....	12
2.2.2.6 SQL Server 構築自動化コマンドの実行.....	13
2.2.2.7 SQL Server 構築自動化コマンドの結果確認.....	14
2.2.2.8 PostgreSQL 構築自動化コマンドの実行.....	14
2.2.2.9 PostgreSQL 構築自動化コマンドの結果確認.....	15
2.2.2.10 管理サーバのインストール.....	15
2.2.2.11 構築自動化コマンド(後処理)の実行.....	16
2.2.2.12 構築自動化コマンド(後処理)の結果確認.....	16
2.2.3 インターネットインフォメーションサービス(IIS)をインストールする.....	16
2.2.4 .Net Framework 3.5 Service Pack1 をインストールする.....	17
2.2.5 .NET Framework 4.7.2 をインストールする.....	18
2.2.6 Visual C++ 2013(x86), 2017(x86) 再頒布可能パッケージをインストールする.....	18
2.2.7 Visual C++ 2013(x86/x64), 2017(x64) 再頒布可能パッケージをインストールする.....	19
2.2.8 Visual C++ 2015(x64) 再頒布可能パッケージをインストールする.....	20
2.2.9 SQL Server をインストールする.....	20
2.2.10 PostgreSQL をインストールする.....	25
2.2.11 MySQL をインストールする.....	27
2.2.12 JRE をインストールする.....	27
2.2.13 LicenseManager をインストールする.....	27
2.3 管理サーバをインストールする.....	28
2.3.1 管理サーバに導入するコンポーネント.....	29
2.3.2 事前にインストールが必要なソフトウェア.....	29
2.3.3 DHCP サーバの構築.....	30
2.3.4 Windows ファイアウォールの設定.....	31
2.3.5 ESM/ServerManager ユーザグループ設定に関する注意.....	31

2.3.6 vDC Automation Standard Edition 管理サーバのインストールに関する注意	31
2.3.7 インストールを実行する前の注意	32
2.3.8 管理サーバのインストール	32
2.3.9 JobCenter MG/SV のインストール	38
2.3.10 JobCenter CL/Web のインストール	40
2.4 管理サーバ監視端末をインストールする	40
2.4.1 管理サーバ監視端末に導入するコンポーネント	40
2.4.2 インストールを実行する前の注意	41
2.4.3 管理サーバ監視端末のインストール	41
2.4.4 JobCenter CL/Win のインストール	44
2.5 VM 監視サーバをインストールする	45
2.5.1 VM 監視サーバに導入するコンポーネント	45
2.5.2 Windows ファイアウォールの設定	45
2.5.3 インストールを実行する前の注意	46
2.5.4 VM 監視サーバのインストール	46
2.6 VM 監視サーバ監視端末をインストールする	49
2.6.1 VM 監視サーバ監視端末に導入するコンポーネント	49
2.6.2 インストールを実行する前の注意	50
2.6.3 VM 監視サーバ監視端末のインストール	50
2.7 スタック管理サーバをインストールする	53
2.7.1 スタック管理サーバに導入するコンポーネント	53
2.7.2 事前にインストールが必要なソフトウェア	54
2.7.3 ファイアウォールの設定	54
2.7.4 スタック管理サーバのインストール	54
2.8 管理対象マシンをインストールする	54
2.8.1 VMware ESXi 仮想基盤	55
2.8.2 Hyper-V 仮想基盤	55
2.8.3 KVM 仮想基盤	55
2.9 管理対象マシン (Windows) をインストールする	55
2.9.1 事前にインストールが必要なソフトウェア	55
2.9.2 インストールを実行する前の注意	56
2.9.3 管理対象マシン (Windows) のインストール	56
2.10 管理対象マシン (Linux) をインストールする	60
2.10.1 事前にインストールが必要なソフトウェア	60
2.10.2 インストールを実行する前の注意	60
2.10.3 管理対象マシン (Linux) のインストール	60
2.11 管理サーバの登録と設定	65
2.11.1 SigmaSystemCenter 機能へのライセンス登録	66
2.11.2 SystemManager G 機能へのライセンス登録	66
2.11.3 SystemManager G 機能へのコードワード登録	67
2.11.4 vDC Automation Standard Edition ポータルの設定	68
2.11.5 SigmaSystemCenter との接続の設定	68
2.11.6 Service Governor WebAPI Base Option との接続の設定	69
2.11.7 JobCenter との接続の設定	69
2.11.8 SystemManager G との接続の設定	70

2.11.9 Tomcat の SSL/TLS 設定	70
2.11.10 SystemManager G 機能の初期設定	71
2.11.11 監視設定の事前インポート	72
2.12 VM 監視サーバの登録と設定	75
2.12.1 SystemManager G へのライセンス登録	75
2.12.2 SystemManager G 機能へのコードワード登録	76
2.12.3 SystemManager G 機能の初期設定	76
2.12.4 監視設定の事前インポート	77
2.13 スタック管理サーバの登録と設定	77
2.13.1 vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオ プシヨン 機能へのライセンス登録	77
2.13.2 SigmaSystemCenter との接続の設定	77
2.13.3 SystemManager G との接続の設定	77
2.13.4 OpenStack の SSL/TLS 設定	78
2.14 管理対象マシンの設定	78
2.14.1 管理対象マシンの VM テンプレートの作成	78
2.15 サイレントインストールコマンド(Windows)	79
2.15.1 サイレントインストールコマンドの構成	79
2.15.2 サイレントインストールコマンドの使用条件	80
2.15.3 サイレントインストール設定ファイルの編集	80
2.15.4 サイレントインストールコマンドの実行	80
2.15.5 サイレントインストールコマンドの結果確認	82
2.16 サイレントインストールコマンド(Linux)	83
2.16.1 サイレントインストールコマンドの構成	83
2.16.2 サイレントインストールコマンドの使用条件	84
2.16.3 サイレントインストール設定ファイルの編集	84
2.16.4 サイレントインストールコマンドの実行	84
2.16.5 サイレントインストールコマンドの結果確認	85
第 3 章 インストール後の基本設定	87
3.1 リソース管理機能	88
3.1.1 SigmaSystemCenter に関連製品を登録する	88
3.1.1.1 仮想化基盤を SigmaSystemCenter に登録するには	88
3.1.1.2 ストレージ機器を SigmaSystemCenter に登録するには	89
3.1.1.3 vDC Automation Standard Edition のコンポーネントを SigmaSystemCenter に登録するには	91
3.1.2 SigmaSystemCenter の環境設定を行う	91
3.1.3 VM サーバのハードウェアに関する設定を行う	92
3.1.3.1 VM サーバを SigmaSystemCenter に登録する	92
3.1.3.2 VM サーバを OOB Management で管理するための設定を行う	92
3.1.3.3 VM サーバのマシンプロパティを設定する	93
3.1.4 リソースプールを作成する	94
3.1.4.1 VM サーバのカテゴリを作成する	94
3.1.4.2 VM サーバの運用グループを作成する	95
3.1.4.3 VM サーバの運用グループを設定する	95
3.1.4.4 リソースプールを定義する	97
3.1.4.5 サブリソースプールを定義する	97

3.1.5 VM サーバリソースを登録する	98
3.1.6 論理ネットワークの登録について	99
3.1.7 ストレージリソースを登録する	99
3.1.7.1 ディスクボリュームを割り当てる	99
3.1.7.2 ストレージのタグを設定する	102
3.1.8 リソース管理機能の利用について	102
3.2 監視機能	102
3.2.1 監視マネージャーの設定	102
3.2.2 DeploymentManager の設定	103
3.2.3 vDC Automation Standard Edition ポータルの設定	104
3.2.4 監視機能の利用について	105
第 4 章 アンインストールを実行する	106
4.1 アンインストール実行前の注意	107
4.2 管理サーバをアンインストールする	107
4.3 管理サーバのカスタムオペレーション機能をアンインストールする	112
4.4 管理サーバ監視端末をアンインストールする	112
4.5 管理サーバ監視端末のカスタムオペレーション機能をアンインストールする	114
4.6 VM 監視サーバをアンインストールする	115
4.7 VM 監視サーバ監視端末をアンインストールする	115
4.8 スタック管理サーバをアンインストールする	118
4.9 管理対象マシンをアンインストールする(Windows)	118
4.10 管理対象マシンのアンインストール(Linux)	119
第 5 章 トラブルシューティング	122
5.1 SigmaSystemCenter のトラブルシューティング	123
5.1.1 ESMPRO/ServerManager アンインストール後のメッセージについて	123
5.2 インストーラのトラブルシューティング	123
5.2.1 管理サーバのインストールで再起動を要求される	123
5.2.2 管理サーバのインストールでデータベースへの接続に失敗する	125
5.2.3 インストール時にエラーが発生する	127
5.2.4 障害情報を採取する	128
5.3 SystemManager G 機能のトラブルシューティング	129
5.3.1 監視端末が起動できない	129
5.3.2 障害情報を採取する	129
付録 A 改版履歴	131

表目次

表 2-1	機能の選択	21
表 2-2	作成するインスタンス名	21
表 2-3	SQL Server のサービスのログオンユーザ	22
表 2-4	SQL Server ネットワーク構成	23
表 2-5	固定サーバーロールメンバーの追加	23

第 1 章

vDC Automation Standard Edition のセッ トアップの概要

本章では、vDC Automation Standard Edition のインストールを行う vDC Automation Standard Edition 統合インストーラについて説明します。

目次

1.1 vDC Automation Standard Edition 統合インストーラ	2
1.2 vDC Automation の DVD 構成	3

1.1 vDC Automation Standard Edition 統合インストーラ

vDC Automation Standard Edition は、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラによりインストールができます。

vDC Automation Standard Edition 統合インストーラは、管理サーバ、管理サーバ監視端末、VM 監視サーバ、VM 監視サーバ監視端末、管理対象マシンの製品コンポーネントをインストールすることができます。

注

- UNC パス、もしくはネットワークドライブを割り当てたドライブ上で、インストーラは実行できません。DVD ドライブ上のインストーラを実行してください。

1.1.1 vDC Automation Standard Edition のインストール方法

vDC Automation Standard Edition は、以下の方法でインストールすることができます。

	新規インストール	バージョンアップ	事前にインストールが必要なソフトウェア
vDC Automation Standard Edition 統合インストーラ ^{*1}	対応	対応	手動 ^{*4}
サイレントインストールコマンド ^{*2}	対応	未対応	手動 ^{*4}
Ansible playbook ^{*3}	対応	対応	自動

^{*1} vDC Automation Standard Edition 統合インストーラについては、「[1.1.2 vDC Automation Standard Edition 統合インストーラのインストールモード \(2 ページ\)](#)」を参照してください。

^{*2} サイレントインストールコマンドについては、「[2.15 サイレントインストールコマンド \(Windows\) \(79 ページ\)](#)」および「[2.16 サイレントインストールコマンド\(Linux\) \(83 ページ\)](#)」を参照してください。

^{*3} Ansible playbook については、「[1.1.3 vDC Automation Standard Edition 統合インストーラの Ansible playbook \(3 ページ\)](#)」を参照してください。

^{*4} 構築自動化コマンドを使用すると、事前インストールが必要なソフトウェアやデータベースのインストールおよびデータベースやサービスの各種設定を一括で行うことができます。構築自動化コマンドについては、「[2.2.2 構築自動化コマンド \(8 ページ\)](#)」を参照してください。

1.1.2 vDC Automation Standard Edition 統合インストーラのインストールモード

vDC Automation Standard Edition 統合インストーラは、2 つのインストールモードを兼ね備えています。

- 標準モード

vDC Automation Standard Edition 機能を構成する製品コンポーネントを一括でインストールするモードです。

機能を選択してインストールします。

- カスタムモード

vDC Automation Standard Edition を構成する製品のインストーラを起動するモードです。

vDC Automation Standard Edition 機能を構成する製品コンポーネントをバージョンアップする場合に利用します。

また、必要に応じて製品コンポーネントの機能追加、メンテナンス、および vDC Automation Standard Edition のサーバ構成を変更する場合などに利用します。

注

vDC Automation Standard Edition のバージョンアップの詳細は、各製品マニュアルを参照してください。

1.1.3 vDC Automation Standard Edition 統合インストーラの Ansible playbook

vDC Automation Standard Edition のインストールとバージョンアップを行う playbook 群を提供します。playbook の使用方法については、以下の README を参照してください。

インストール DVD:script\vDCA_7-0-0-0_playbook

1.2 vDC Automation の DVD 構成

vDC Automation Standard Edition 統合インストーラは、次の通り vDCA/NWA インストール DVD に収録されています。

vDCA/NWA インストール DVD	
└ install	
└ Windows	
└ vDCAInst_SE.exe	vDC Automation Standard Edition 統合インストーラ(Windows 版)
└ Linux	
└ vDCAInst_SE.sh	vDC Automation Standard Edition 統合インストーラ(Linux 版)
└ script	
└ AutoSetup	構築自動化コマンド
└ SilentInstall	
└ Windows	サイレントインストールコマンド(Windows 版)
└ Linux	サイレントインストールコマンド(Linux 版)
└ vDCA-7-0-0-0-playbook	Ansible playbook

第2章

機能を選択してインストールを実行する

本章では、vDC Automation Standard Edition の機能種別に応じたインストール手順について説明します。vDC Automation Standard Edition 統合インストーラによるインストールの前に必要な Windows Server での設定、事前にインストールするツール、および、統合インストーラによる製品コンポーネントのインストールについて説明します。

目次

2.1 インストールする機能の種別	5
2.2 事前にインストールが必要なソフトウェア	7
2.3 管理サーバをインストールする	28
2.4 管理サーバ監視端末をインストールする	40
2.5 VM 監視サーバをインストールする	45
2.6 VM 監視サーバ監視端末をインストールする	49
2.7 スタック管理サーバをインストールする	53
2.8 管理対象マシンをインストールする	54
2.9 管理対象マシン (Windows) をインストールする	55
2.10 管理対象マシン (Linux) をインストールする	60
2.11 管理サーバの登録と設定	65
2.12 VM 監視サーバの登録と設定	75
2.13 スタック管理サーバの登録と設定	77
2.14 管理対象マシンの設定	78
2.15 サイレントインストールコマンド(Windows)	79
2.16 サイレントインストールコマンド(Linux)	83

2.1 インストールする機能の種別

vDC Automation Standard Edition を構成する機能の種別、構成について説明します。

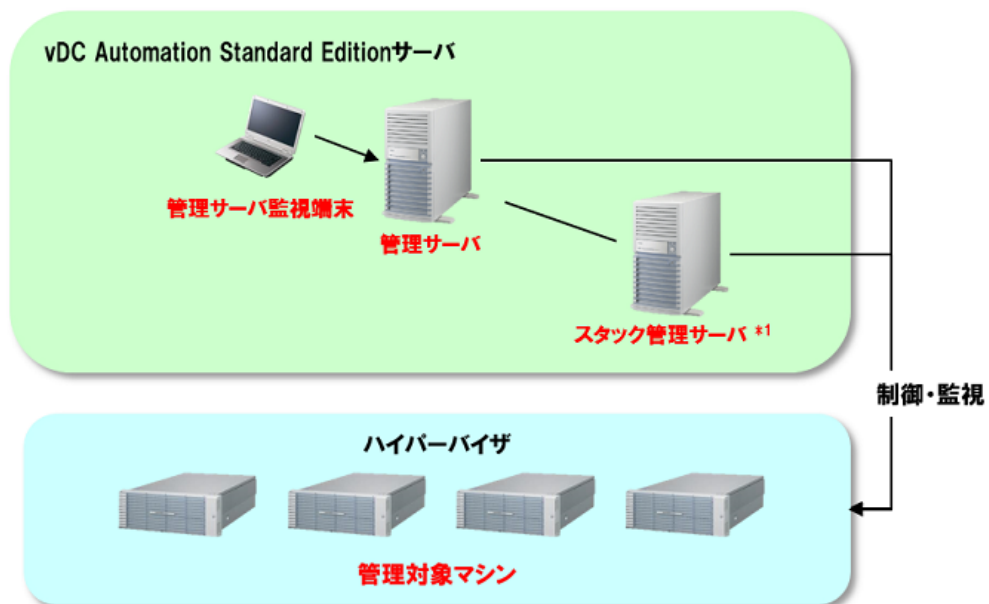
2.1.1 vDC Automation Standard Edition のサーバ構成図

以下は、本書のインストール手順で対象とする機能の種別です。

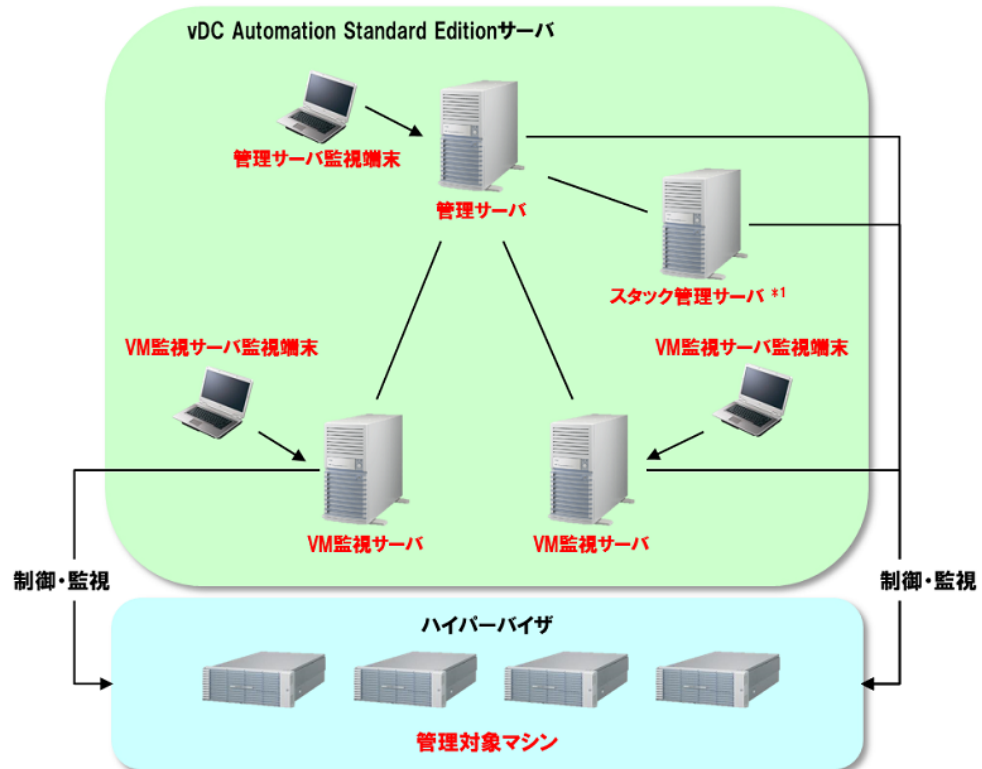
- 管理サーバ
- 管理サーバ監視端末
- VM 監視サーバ
- VM 監視サーバ監視端末
- スタック管理サーバ
- 管理対象マシン
 - 仮想基盤
 - 仮想マシン(VM)、仮想テンプレート

vDC Automation Standard Edition のサーバ構成例を以下に示します。

- 最小構成例



- 負荷分散構成例



*1 スタック管理サーバは、vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプションを使用する構成の場合のみ必要です。

注

- vDC Automation Standard Edition ポータルについては、『vDC Automation Standard Edition ポータル利用者マニュアル (インストール編)』、『vDC Automation Standard Edition ポータル利用者マニュアル (リソース管理編)』および『vDC Automation Standard Edition ポータル利用者マニュアル (監視編)』を参照してください。なお、vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプションを使用する場合には、『vDC Automation Standard Edition ポータル利用者マニュアル (リソース管理編) トポロジテンプレートオーケストレータオプション』および『vDC Automation Standard Edition ポータル利用者マニュアル (監視編) トポロジテンプレートオーケストレータオプション』を参照してください。
- vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプションについては、『vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプション利用ガイド』を参照してください。
- カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用する構成では、管理サーバで JobCenter を利用します。JobCenter については、『JobCenter インストールガイド』、『JobCenter 基本操作ガイド』、『JobCenter 環境構築ガイド』および『JobCenter Web 機能利用の手引き』を参照してください。

2.1.2 各機能の役割

各機能の役割は以下の通りです。

機能	役割
管理サーバ	vDC Automation Standard Edition 内の全リソースを一元管理・監視します。 vDC Automation Standard Edition ポータルなどの外部機能とのシングルポイントゲートウェイ機能を提供します。 管理対象マシンに対して、特定の vDC Automation ワークフローが実行可能なカスタムオペレーション機能を提供します。
管理サーバ監視端末	管理サーバが管理するリソースを監視・制御する機能を提供します。
VM 監視サーバ	仮想マシンを監視・制御機能を提供します。仮想マシン監視における、管理サーバの負荷低減の役割を担います。
VM 監視サーバ監視端末	VM 監視サーバが管理するリソースを監視・制御する機能を提供します。
管理対象マシン	管理対象の仮想マシンにインストールし、監視・制御する機能を提供します。
スタック管理サーバ	トポロジテンプレートに定義したシステム構成情報をもとに複数リソースの一括払い出し、そのリソースのグループを「スタック」という名前で管理する機能を提供します。

注

- 各機能のシステム要件は『vDC Automation ファーストステップガイド』の『第6章 動作環境／システム要件』および『vDC Automation Standard Edition ポータル利用者マニュアル（インストール編）』の『第1章 動作環境』を確認してください。
- スタック管理サーバのシステム要件については、『vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプション利用ガイド』の『第1章 動作環境』を確認してください。
- カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用する場合、JobCenter のシステム要件については、『JobCenter リリースメモ』の『3. 動作環境』を確認してください。

2.2 事前にインストールが必要なソフトウェア

vDC Automation Standard Edition 統合インストーラによるインストール前に必要なソフトウェアについて説明します。

2.2.1 事前にインストールするソフトウェア一覧

vDC Automation Standard Edition では、管理サーバのインストールを開始する前に、以下のソフトウェアのインストールが必要です。

構築自動化コマンドにより、一部のソフトウェアを自動でインストールすることができます。

構築自動化コマンドについては、「[2.2.2 構築自動化コマンド（8 ページ）](#)」を参照してください。

	管理サーバ	構築自動化コマンド
インターネットインフォメーションサービス (IIS)	必須	対応
.NET Framework 3.5 Service Pack 1	必須*1	対応

	管理サーバ	構築自動化コマンド
.NET Framework 4.7.2	必須	対応
Visual C++ 2013(x86), 2017(x86) 再頒布可能パッケージ	必須	対応
Visual C++ 2013(x86/x64), 2017(x64) 再頒布可能パッケージ	必須	対応
SQL Server/クライアントツール	必須*2*3	一部対応*4
PostgreSQL/psqlODBC/pgAdmin	必須*2	一部対応*5

*1 SQL Server 2014 を使用する場合に必要です。

*2 DBMS として SQL Server または PostgreSQL のどちらかを選択することができます。

*3 DBMS を別サーバ化するには、DB サーバに SQL Server をインストールし、管理サーバをインストールするマシンに SQL Server クライアントツールをインストールします。DB サーバの必須ソフトウェアに関しては『vDC Automation ファーストステップガイド』の『6.10 DB サーバ』を参照ください。DBMS を別サーバ化しない場合には SQL Server クライアントツールのインストールは不要です。

*4 DBMS を別サーバにする構成および SQL Server クライアントツールのインストールには対応していません。

*5 DBMS を別サーバにする構成および pgAdmin のインストールには対応していません。

スタック管理サーバのインストールを開始する前に、以下のソフトウェアのインストールが必要です。

	スタック管理サーバ	構築自動化コマンド
MySQL	必須	未対応

カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用する場合、管理サーバにインストールを開始する前に、以下のソフトウェアのインストールが必要です。

	管理サーバ	構築自動化コマンド
Visual C++ 2015(x64) 再頒布可能パッケージ	必須	未対応
Java SE Runtime Environment(JRE) 7 以降	必須	未対応
LicenseManager	必須	未対応

なお、VM 監視サーバ、監視端末（管理サーバ、VM 監視サーバ）については、いずれも事前にインストールが必要なソフトウェアはありません。

2.2.2 構築自動化コマンド

構築自動化コマンドを使用すると、従来、個々に行う必要のあったデータベースやサービスの各種設定を一括で行うことができます。これにより、vDC Automation Standard Edition 管理サーバ構築時の作業負担を軽減することができます。

次項以降では、構築自動化コマンドで管理サーバインストール時に事前インストールが必要となるソフトウェアをインストールする手順を説明します。

2.2.2.1 構築コマンドの構成

構築自動化コマンドの構成は以下の通りです。

インストール DVD:script\AutoSetup\SE

ファイル名	概要
PreInstall.ps1	構築自動化コマンド(前処理)
PreInstall_SQLServer.ps1	SQL Server 構築自動化コマンド
PreInstall_PostgreSQL.ps1	PostgreSQL 構築自動化コマンド
PostInstall.ps1	構築自動化コマンド(後処理)
Common.ps1	構築自動化コマンド(共通処理)
AutoSetup.ini	構築自動化コマンド用設定ファイル

インストール DVD:script\AutoSetup\SE\SQLServer

ファイル名	概要
Configuration_2012	SQL Server インストール用設定ファイル(SQL Server 2012 用)
Configuration_2014	SQL Server インストール用設定ファイル(SQL Server 2014 用)
Configuration_2016	SQL Server インストール用設定ファイル(SQL Server 2016 用)
Configuration_2017	SQL Server インストール用設定ファイル(SQL Server 2017 用)
Configuration_2019	SQL Server インストール用設定ファイル(SQL Server 2019 用)
Configuration_Common	SQL Server インストール用設定ファイル(各バージョン共通)

注

構築自動化コマンド用設定ファイルの文字コードは Shift-JIS、改行文字は CR+LF で指定してください。

2.2.2.2 構築自動化コマンドの使用条件

構築自動化コマンドを使用するには、以下の条件を満たしている必要があります。

- 構築自動化コマンドは、Administrator 権限を持つユーザで実行してください。
- 構築自動化コマンドを構成するファイルは、インストールメディアに格納されている構成と同一構成で配置してください。
- PowerShell の実行が Windows のシステムで無効になっている場合、実行ポリシーを変更してください。実行ポリシーの変更は、PowerShell を Administrator 権限で起動し、以下のコマンドレットを実行してください。

```
PS > Get-ExecutionPolicy
PS > Set-ExecutionPolicy Unrestricted
```

構築コマンド実行後、実行ポリシーを元の設定に戻す場合、Get-ExecutionPolicy 実行時に表示された値で Set-ExecutionPolicy を実行してください。

- SQL Server 2012 または 2014 をインストールする場合、.NET Framework 3.5 SP1 をインストールする必要があります。

.NET Framework 3.5 SP1 をインストールする場合、<Windows インストールメディア>:\sources\sxs を指定する必要がありますが、ドライブが一つしかなく、ネットワークも利用できない環境の場合、ドライブには統合インストーラのメディアをマウントするため、Windows インストールメディアをマウントすることができません。このため、構築自動化コマンド実行前の事前準備として、<Windows インストールメディア>:\sources\sxs を任意のローカルディスクにコピーしておく必要があります。

- Windows Server 2012R2 で Update(KB2919355) がインストールされていない場合、.NET Framework 4.7.2 のインストールがエラーになります。このため、構築自動化コマンド実行前の事前準備として、Update(KB2919355) をインストールしておく必要があります。

2.2.2.3 構築自動化コマンド用設定ファイルの編集

- 「2.2.2.1 構築コマンドの構成 (9 ページ)」に記載した構築自動化コマンドを任意の場所にコピーします。
- 構築自動化コマンド用設定ファイルの各項目を環境に合わせて変更します。

定義する値の両端をダブルクォート「"」で囲ってください

変数名	説明	Preinstall.ps 1	Preinstall_S QLServer.ps 1	Preinstall_P ostgreSQL.p s1	Postinstall.p s1
VDCA_SXS_ SOURCE_PA TH	Windows インストールメディア(sources\sxs)をコピーしたディレクトリを指定します。	必須*1	任意	任意	任意
VDCA_SSC_ PATH	vDC Automation Standard Edition メディアの ssc へのパスを指定します。	必須	任意	必須	任意
VDCA_SSC_ DBTYPE	SigmaSystemCenter が使用するデータベースの種別を指定します。 指定可能な値は、SQL Server, PostgreSQL です。	任意	必須	必須	任意
VDCA_PORT AL_DBTYPE	ポータルが使用するデータベースの種別の種別を指定します。 指定可能な値は、SQL Server, PostgreSQL です。	任意	必須	必須	必須
VDCA_PORT AL_PATH	データベース設定バッチファイルへのパスを指定します。	任意	任意	任意	必須*2
VDCA_SQL_ EXE_PATH	SQL Server インストーラ(フルパス)を指定します。	任意	必須	任意	任意
VDCA_SQL_ EDITION	SQL Server の Edition を指定します。	任意	必須	任意	任意

変数名	説明	Preinstall.ps 1	Preinstall_S QLServer.ps 1	Preinstall_P ostgreSQL.p s1	Postinstall.p s1
	指定可能な値は、Express, Enterprise, Standard です。				
VDCA_SQL_VERSION	SQL Server のバージョンを指定します。 指定可能な値は、2019, 2017, 2016, 2014, 2012 です。	必須	必須	任意	必須
VDCA_SQL_SAPWD	SQL Server sa アカウントのパスワードを指定します。	任意	必須	任意	任意
VDCA_SQL_PID	SQL Server のエディション用のプロダクトキーを指定します。	任意	必須*3	任意	任意
VDCA_POSTGRESQL_EXE_PATH	PostgreSQL のインストーラ(フルパス)を指定します。	任意	任意	必須	任意
VDCA_POSTGRESQL_INSTALL_PATH	PostgreSQL のインストールパス(フルパス)を指定します。	任意	任意	必須	任意
VDCA_POSTGRESQL_DATA_PATH	PostgreSQL の data ディレクトリのパス(フルパス)を指定します。	任意	任意	必須	任意
VDCA_POSTGRESQL_PASSWORD	PostgreSQL の管理者パスワードを指定します。	任意	任意	必須*4	任意
VDCA_POSTGRESQL_PORT	PostgreSQL の管理ポートを指定します。	任意	任意	必須	任意
VDCA_PSQL_ODBC_PATH	PostgreSQL 用の psqLODBC ドライバのインストーラ(フルパス)を指定します。	任意	任意	任意*5	任意
VDCA_IIS_WEB_SITE	IIS に登録されたバインド対象の Web サイト名を指定します。	任意	任意	任意	必須*6

*1 SQL Server 2012 または 2014 をインストールする場合、必須です。

*2 インストール DVD 上のパスを指定する場合、<インストール DVD>:\fw\Windows\Product\Portal です。

*3 SQL Server Enterprise エディションまたは Standard エディションをインストールする場合、必須です。

*4 30 バイト以内で指定してください。使用できない文字は以下になります。

" \$ % & ' + , / : ; < = > \ ^ ` { |

*5 vDC Automation Standard Edition メディアに同梱の psqLODBC ドライバを使用する場合、指定は不要です。

*6 IIS に登録されたバインド対象の Web サイト名に使用できない文字は以下になります。

\ / ? . , ; : @ & = + \$, | " < >

2.2.2.4 構築自動化コマンド(前処理)の実行

注

構築自動化コマンド(前処理)は、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラで管理サーバのコンポーネントをインストールする前に実行してください。

構築自動化コマンド(前処理)は、以下の設定を行います。

- ・「[2.2.3 インターネットインフォメーションサービス\(IIS\)をインストールする \(16 ページ\)](#)」
- ・「[2.2.4 .Net Framework 3.5 Service Pack1 をインストールする \(17 ページ\)](#)」
- ・「[2.2.5 .NET Framework 4.7.2 をインストールする \(18 ページ\)](#)」
- ・「[2.2.6 Visual C++ 2013\(x86\), 2017\(x86\) 再頒布可能パッケージ をインストールする \(18 ページ\)](#)」
- ・「[2.2.7 Visual C++ 2013\(x86/x64\), 2017\(x64\) 再頒布可能パッケージ をインストールする \(19 ページ\)](#)」

注

「Visual Studio 2015、2017、および 2019 用 Microsoft Visual C++ 再頒布可能パッケージ」がインストールされた環境では、構築自動化コマンド(前処理)が失敗する場合があります。本セットアップガイドの上記節の記載に従い、手動で設定を行ってください。また、同環境で構築自動化コマンド(前処理)が失敗してしまった場合は、「[2.2.7 Visual C++ 2013\(x86/x64\), 2017\(x64\) 再頒布可能パッケージをインストールする \(19 ページ\)](#)」のみ手動で設定を行ってください。

PowerShell を Administrator 権限で起動し、構築自動化コマンド(前処理)を実行します。

[構文]

```
PS > PreInstall.ps1
```

[引数/オプション]

なし

2.2.2.5 構築自動化コマンド(前処理)の結果確認

正常終了した場合、戻り値は 0 で、以下のメッセージが表示されます。

```
PreInstall は正常終了しました。
```

システムの再起動が必要な場合、戻り値は 2 で、以下のメッセージが表示されます。 システム再起動後、構築自動化コマンド(前処理)を再実行してください。

.NET Framework の設定を有効にするにはシステムを再起動する必要があります。
システム再起動後、本コマンドを再実行してください。

または

設定を有効にするにはシステムを再起動する必要があります。
システム再起動後、本コマンドを再実行してください。

異常終了した場合、戻り値は 1 で、以下のメッセージが表示されます。

PreInstall は異常終了しました。

構築自動化コマンド(前処理)のログは以下に出力されます。

C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\AutoSetup\log\YYMMDDhhmmss

YYMMDDhhmmss はコマンド実行時刻です。

2.2.2.6 SQL Server 構築自動化コマンドの実行

注

SQL Server 構築自動化コマンドは、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラで管理サーバのコンポーネントをインストールする前に実行してください。

SQL Server 構築自動化コマンドは、以下の設定を行います。

- 「2.2.9 SQL Server をインストールする (20 ページ)」の SQL Server のインストール
- 「2.2.9 SQL Server をインストールする (20 ページ)」の SQL Server のサービスのログオンユーザの設定
- 「2.2.9 SQL Server をインストールする (20 ページ)」の SQL Server のネットワーク構成の設定
- 「2.2.9 SQL Server をインストールする (20 ページ)」の SQL Server の固定サーバーロールメンバーの追加
- 「2.2.9 SQL Server をインストールする (20 ページ)」の SQL Server Browser サービスのスタートアップの種類の変更

PowerShell を Administrator 権限で起動し、SQL Server 構築自動化コマンドを実行します。

[構文]

PS > PreInstall_SQLServer.ps1

[引数/オプション]

なし

2.2.2.7 SQL Server 構築自動化コマンドの結果確認

正常終了した場合、戻り値は 0 で、以下のメッセージが表示されます。

PreInstall_SQLServer は正常終了しました。

システムの再起動が必要な場合、戻り値は 2 で、以下のメッセージが表示されます。 システム再起動後、SQL Server 構築自動化コマンドを再実行してください。

設定を有効にするにはシステムを再起動する必要があります。
システム再起動後、本コマンドを再実行してください。

異常終了した場合、戻り値は 1 で、以下のメッセージが表示されます。

PreInstall_SQLServer は異常終了しました。

SQL Server 構築自動化コマンドのログは以下に出力されます。

C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\AutoSetup\log\YYMMDDhhmmss

YYMMDDhhmmss はコマンド実行時刻です。

SQL Server インストーラのログは以下に出力されます。

C:\Program Files\Microsoft SQL Server\XXX\Setup Bootstrap\Log

XXX は SQL Server のバージョンによって異なります。

SQL Server バージョン	ディレクトリ
2012	110
2014	120
2016	130
2017	140
2019	150

2.2.2.8 PostgreSQL 構築自動化コマンドの実行

注

PostgreSQL 構築自動化コマンドは、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラで管理サーバのコンポーネントをインストールする前に実行してください。

注

本バージョンの PostgreSQL 構築自動化コマンドがサポートする PostgreSQL のバージョンは 11 のみです。

9.6.x の PostgreSQL をインストールする場合、「[2.2.10 PostgreSQL をインストールする \(25 ページ\)](#)」を参照してください。

PostgreSQL 構築自動化コマンドは、以下の設定を行います。

- ・「[2.2.10 PostgreSQL をインストールする \(25 ページ\)](#)」の PostgreSQL のインストール
- ・「[2.2.10 PostgreSQL をインストールする \(25 ページ\)](#)」の psqloDBC のインストール

PowerShell を Administrator 権限で起動し、PostgreSQL 構築自動化コマンドを実行します。

[構文]

```
PS > PreInstall_PostgreSQL.ps1
```

[引数/オプション]

なし

2.2.2.9 PostgreSQL 構築自動化コマンドの結果確認

正常終了した場合、戻り値は 0 で、以下のメッセージが表示されます。

```
PreInstall_PostgreSQL は正常終了しました。
```

システムの再起動が必要な場合、戻り値は 2 で、以下のメッセージが表示されます。 システム再起動後、PostgreSQL 構築自動化コマンドを再実行してください。

```
設定を有効にするにはシステムを再起動する必要があります。  
システム再起動後、本コマンドを再実行してください。
```

異常終了した場合、戻り値は 1 で、以下のメッセージが表示されます。

```
PreInstall_PostgreSQL は異常終了しました。
```

PostgreSQL 構築自動化コマンドのログは以下に出力されます。

C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\AutoSetup\log\YYMMDDhhmmss

YYMMDDhhmmss はコマンド実行時刻です。

2.2.2.10 管理サーバのインストール

管理サーバをインストールします。

「[2.3.8 管理サーバのインストール \(32 ページ\)](#)」 または 「[2.15 サイレントインストールコマンド\(Windows\) \(79 ページ\)](#)」 の手順を参照して、インストールしてください。

インストール後、サーバを再起動してください。

2.2.2.11 構築自動化コマンド(後処理)の実行

注

構築自動化コマンド(後処理)は、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラで管理サーバのコンポーネントをインストールし、システムを再起動した後に実行してください。

構築自動化コマンド(後処理)は、以下の設定を行います。

- 『vDC Automation Standard Edition ポータル利用者マニュアル (インストール編)』の『2.2 SQL の接続設定』
- 『vDC Automation Standard Edition ポータル利用者マニュアル (インストール編)』の『4.1.2 IIS の証明書作成とバインド設定』

PowerShell を Administrator 権限で起動し、構築自動化コマンド(後処理)を実行します。

[構文]

```
PS > PostInstall.ps1
```

[引数/オプション]

なし

2.2.2.12 構築自動化コマンド(後処理)の結果確認

正常終了した場合、戻り値は 0 で、以下のメッセージが表示されます。

```
PostInstall は正常終了しました。
```

IIS に登録されたバインド対象の Web サイトの 26105 ポートにサイトバインドが定義済みの場合、戻り値は 0 で、以下のメッセージが表示されます。

```
PostInstall は正常終了しました(IIS の証明書作成とバインド設定はスキップしました)。
```

異常終了した場合、戻り値は 1 で、以下のメッセージが表示されます。

```
PostInstall は異常終了しました。
```

構築自動化コマンド(後処理)のログは以下に出力されます。

C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\AutoSetup\log\YYMMDDhhmmss

YYMMDDhhmmss はコマンド実行時刻です。

2.2.3 インターネットインフォメーションサービス(IIS)をインストールする

構築自動化コマンド(前処理)が正常終了している場合、本手順は不要です。

構築自動化コマンドについては、「[2.2.2 構築自動化コマンド \(8 ページ\)](#)」を参照してください。

1. [スタート]メニューより[管理ツール]-[サーバー マネージャー]の[役割と機能の追加]ウィザードより、[Web サーバ(IIS)]をインストールします。
2. 「サーバの役割の選択」画面で以下のチェックボックスをオンにし、インストールを行ってください。
 - [Web サーバー] - [HTTP 共通機能] - [静的なコンテンツ]
 - [Web サーバー] - [アプリケーション開発] - [ASP.NET 4.5] (Windows Server 2012、Windows Server 2012 R2 の場合)
 - [Web サーバー] - [アプリケーション開発] - [ASP.NET 4.6] (Windows Server 2016 の場合)
 - [Web サーバー] - [アプリケーション開発] - [ASP.NET 4.7] (Windows Server 2019 の場合)
 - [管理ツール] - [IIS 管理コンソール]

2.2.4 .Net Framework 3.5 Service Pack1 をインストールする

注

SQL Server 2016 以降を使用する場合、本作業は不要です。

構築自動化コマンド(前処理)が正常終了している場合、本手順は不要です。

構築自動化コマンドについては、「[2.2.2 構築自動化コマンド \(8 ページ\)](#)」を参照してください。

.Net Framework 3.5 Service Pack1 をインストールしてください。

以下は PowerShell コマンドからインストールする場合の例になります。

1. Windows Server 2012/2012 R2/2016/2019 インストールメディアを DVD ドライブに挿入します。
2. [スタート] メニューから[Windows PowerShell] - [Windows PowerShell] のショートカットを右クリックして、[管理者として実行] をクリックします。
3. 以下のコマンドを実行します。(インストールメディアを挿入した DVD ドライブが E ドライブの場合)

```
PS > Install-WindowsFeature Net-Framework-Core -source E:\sources\sxs
```

2.2.5 .NET Framework 4.7.2 をインストールする

注

Windows Server 2012 R2 の場合、本手順の実行前に Update (KB2919355)をインストールしておく必要があります。Update (KB2919355)をインストールしていない場合、.NET Framework 4.7.2 のインストールがエラーになります。

以下の手順で、Update (KB2919355) が適用されているか確認してください。

Windows Server 2012 R2 の正確なバージョンを確認するために、Msinfo32.exe を実行します。Windows Server 2012 R2 Update がインストールされている場合、ハードウェア アブストラクションレイヤーの値は 6.3.9600.17031 です。

6.3.9600.17031 未満の場合は、Update (KB2919355) をインストールしてください。

<https://www.microsoft.com/ja-jp/download/details.aspx?id=42334>

Windows Server 2016 以降の場合は既定でインストールされていますので、本手順は不要です。

構築自動化コマンド(前処理)が正常終了している場合、本手順は不要です。

構築自動化コマンドについては、「[2.2.2 構築自動化コマンド \(8 ページ\)](#)」を参照してください。

1. コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行してインストーラを起動し、ウィザードに従ってインストールします。

```
> <インストール DVD>:\ssc\dotNet Framework472\NDP472-KB4054530-x86-x64-AllOS-ENU.exe
```

.NET Framework 4.7.2 メンテナンス画面が表示された場合、インストールは不要です。

キャンセルを選択し、次の手順を実施してください。

2. コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行してインストーラを起動し、ウィザードに従ってインストールします。

```
> <インストール DVD>:\ssc\dotNet Framework472\ja\ndp472-kb4054530-x86-x64-allos-jpn.exe
```

.NET Framework 4.7.2 メンテナンス画面が表示された場合、インストールは不要です。

キャンセルを選択してください。

2.2.6 Visual C++ 2013(x86), 2017(x86) 再頒布可能パッケージ をインストールする

構築自動化コマンド(前処理)が正常終了している場合、本手順は不要です。

構築自動化コマンドについては、「[2.2.2 構築自動化コマンド \(8 ページ\)](#)」を参照してください。

Microsoft Visual C++ 2013(x86), 2017(x86) 再頒布可能パッケージを以下の手順でインストールして下さい。

1. コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行してインストーラを起動し、ウィザードに従ってインストールします。

```
> <インストール DVD>:\ssc\DPM\Setup\VCRTL\vcredist_x86_2013.exe
```

2. コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行してインストーラを起動し、ウィザードに従ってインストールします。

```
> <インストール DVD>:\ssc\DPM\Setup\VCRTL\vcredist_x86_2017.exe
```

注

「Visual Studio 2015、2017、および 2019 用 Microsoft Visual C++ 再頒布可能パッケージ」がインストールされている環境では、インストールは不要です。

2.2.7 Visual C++ 2013(x86/x64), 2017(x64) 再頒布可能パッケージをインストールする

注

Windows Server 2012 R2 以前の場合、本手順の実行前に Update (KB2999226)をインストールしておく必要があります。

インストールされていない場合は、次の Microsoft 公開情報を参照し、KB2999226 を適用して下さい。

<https://support.microsoft.com/ja-jp/help/2999226/>

構築自動化コマンド(前処理)が正常終了している場合、本手順は不要です。

構築自動化コマンドについては、「[2.2.2 構築自動化コマンド \(8 ページ\)](#)」を参照してください。

Microsoft Visual C++ 2013(x86/x64), 2017(x64) 再頒布可能パッケージを以下の手順でインストールして下さい。

1. コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行します。

```
> <インストール DVD>:\fw\tools\SysMgrG\WebConsole\Microsoft\Install_RequiredPackages.bat
```

2.2.8 Visual C++ 2015(x64) 再頒布可能パッケージ をインストールする

注

Windows Server 2012 R2 の場合、本手順の実行前に Update (KB2919442 および KB2919355)をインストールしておく必要があります。Update (KB2919442 および KB2919355)をインストールしていない場合、Microsoft Visual C++ 2015 再頒布可能パッケージのインストールがエラーになります。

Windows Update、または次の Microsoft 公開情報を参照し、KB2919442, KB2919355 を適用して下さい。

<https://support.microsoft.com/ja-jp/help/2919355/>

カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用する場合、管理サーバで Microsoft Visual C++ 2015(x64) 再頒布可能パッケージ を利用します。

Microsoft Visual C++ 2015(x64) 再頒布可能パッケージを以下の手順でインストールして下さい。

1. JobCenter のインストール DVD をドライブに挿入します。

コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行してインストーラを起動し、ウィザードに従ってインストールします。

```
> <インストール DVD>:PACKAGE\JB\WINDOWS\MGSV\x64\bin\vc_redist.x64.exe
```

2.2.9 SQL Server をインストールする

vDC Automation Standard Edition ポータルまたは SigmaSystemCenter が、DBMS に SQL Server を使用する場合、SQL Server をインストールします。

SQL Server の製品種別として、Express Edition、Standard Edition、Enterprise Edition を利用できますが、Express Edition を利用した場合は、クラスタ環境を構築することができません (Express Edition から Standard Edition または Enterprise Edition へのアップグレードが必要です)。以下では SQL Server Enterprise Edition のインストール方法について示します。

DBMS を別サーバ化する場合には、DBMS サーバマシンに以下の手順で SQL Server をインストールします。管理サーバをインストールするマシンには SQL Server クライアントツールをインストールする必要があります。DBMS を別サーバ化しない場合には SQL Server クライアントツールのインストールは不要です。

- SQL Server のインストール

SQL Server 構築自動化コマンドが正常終了している場合、本手順は不要です。

構築自動化コマンドについては、「[2.2.2 構築自動化コマンド \(8 ページ\)](#)」を参照してください。

本手順内の「作成するインスタンス名」の表を参照し、サーバ毎に作成するインスタンス名を確認します。管理サーバの場合、インスタンス毎に計3回、本インストール作業を実施してください。

1. Setup.exe を実行して SQL Server のインストーラを起動します。
2. [SQL Server インストールセンター]画面で、[インストール]の[SQL Server の新規スタンドアロン インストールを実行するか、既存のインストールに機能を追加します]をクリックします。
3. [プロダクトキー]画面で、プロダクトキーを入力して、[次へ (N)]をクリックします。
4. [ライセンス条項]画面で、[ライセンス条項に同意します。(A)]チェックボックスにチェックを入れ、[次へ(N)>]をクリックします。
5. [製品の更新プログラム]画面で、更新プログラムの検索が始まります。[次へ(N)>]をクリックします。
6. [インストールルール]画面で、[次へ(N)>]をクリックします。
7. [セットアップロール]画面で、[次へ(N)>]をクリックします。
8. [機能の選択]画面で、適切な機能を選択して、[次へ(N)>]をクリックします。下記の「機能の選択」を参考に、作成するインスタンスに沿った機能を選択してください。

表 2-1 機能の選択

選択する機能	インスタンス名		
	FWCMDB	SSCCMDB	DPMDBI
データベースエンジンサービス	選択する	選択する	選択する
SQL Server レプリケーション	選択しない	選択しない	選択する

9. [インスタンスの構成]画面で、[名前付きインスタンス(A):]ラジオボタンを選択し、テキストボックスに適切なインスタンス名を入力し、[次へ(N)>]をクリックします。下記の「作成するインスタンス名」を参考に入力してください。

表 2-2 作成するインスタンス名

マシンの種別	作成するインスタンス名		
	FWCMDB*1	SSCCMDB	DPMDBI
管理サーバ	作成する	作成する	作成する

*1 DBMS を別サーバにインストールする場合、FWCMDB インスタンスは、DBMS をインストールしたサーバ上に一つだけ作成してください。管理サーバ上に作成する必要はありません。

10. [サーバーの構成]画面で、[次へ(N)>]をクリックします。
11. [データベースエンジンの構成]画面で、以下を設定します。

- a. 認証モードで[混合モード(M) (SQL Server 認証と Windows 認証)]ラジオボタンを選択し、[パスワードの入力(E):]および[パスワードの確認入力(O):]テキストボックスにパスワードを入力します。
 - b. SQL Server 管理者の指定で、[現在のユーザの追加(C)]を押下します。
12. [次へ(N)>]をクリックします。
 13. [インストールの準備完了]画面で、[インストール(I)]をクリックします。
 14. インストールが完了すると「完了」画面が表示されます。[閉じる]をクリックします。SQL Server インストールセンターを閉じます。
 15. SQL Server インストール後に再起動が要求される場合があります。その場合、コンピュータの再起動をしてください。
- SQL Server のサービスのログオンユーザの設定

SQL Server 構築自動化コマンドが正常終了している場合、本手順は不要です。

構築自動化コマンドについては、「[2.2.2 構築自動化コマンド \(8 ページ\)](#)」を参照してください。

下記の「SQL Server のサービスのログオンユーザ」を参照し、必要なインスタンスについて設定を行います。

表 2-3 SQL Server のサービスのログオンユーザ

	インスタンス名		
	FWCMDB	SSCCMDB	DPMDBI
ログオンユーザ	Local System	NT Service\MSSQL \$SSCCMDB (既定値)	NT Service\MSSQL \$DPMDBI (既定値)

1. SQL Server 構成マネージャーを起動します。
 2. 左ペインの[SQL Server のサービス]をクリックして右ペインに表示される[SQL Server(インスタンス名)]をダブルクリックします。
「SQL Server (インスタンス名)のプロパティ」画面が表示されます。
 3. [ログオン]タブで[ビルトイン アカウント(B):]ラジオボタンを選択し、ドロップダウンリストで適切なユーザを選択し、[OK]をクリックします。
 4. 表示されたメッセージで[はい]をクリックします。
 5. [再起動(R)]をクリックし、再起動処理が完了したら[OK]をクリックし、SQL Server 構成マネージャーを終了します。
- SQL Server のネットワーク構成の設定

SQL Server 構築自動化コマンドが正常終了している場合、本手順は不要です。

構築自動化コマンドについては、「[2.2.2 構築自動化コマンド \(8 ページ\)](#)」を参照してください。

下記の「SQL Server ネットワーク構成」を参照し、必要なインスタンスについて設定を行います。

表 2-4 SQL Server ネットワーク構成

プロトコル名	インスタンス名		
	FWCMDB	SSCCMDB	DPMDBI
共有メモリ	—*1	有効	有効
名前付きパイプ	有効	—*1	—*1
TCP/IP	有効	—*1	—*1

*1 —(ハイフン)については、有効/無効どちらでも構いません。デフォルト値のままとしてください。

1. SQL Server 構成マネージャを起動します。
2. 左ペインの[SQL Server ネットワークの構成]をクリックして表示される[インスタンス名のプロトコル]を選択し、右ペインに表示される適切なプロトコルの状態を変更します。

上記の作業が完了したら、以下の手順でそれぞれのインスタンスを再起動します。

1. 左ペインの[SQL Server のサービス]を選択して右ペインに表示される[SQL Server(インスタンス名)]をダブルクリックします。

「SQL Server(インスタンス名)のプロパティ」画面が表示されます。

2. [再起動(R)]をクリックし、再起動処理が完了したら[OK]をクリックし、SQL Server 構成マネージャを終了します。

- SQL Server の固定サーバーロールメンバーの追加

SQL Server 構築自動化コマンドが正常終了している場合、本手順は不要です。

構築自動化コマンドについては、「[2.2.2 構築自動化コマンド \(8 ページ\)](#)」を参照してください。

下記の SQL Server の「固定サーバーロールメンバーの追加」を参照し、必要なインスタンスについて設定を行います。

表 2-5 固定サーバーロールメンバーの追加

	インスタンス名		
	FWCMDB	SSCCMDB	DPMDBI
固定サーバーロールメンバーの追加	追加しない	追加する	追加する

1. コマンドプロンプトを開きます。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
> sqlcmd.exe -E -S ".\インスタンス名"
```



```
1> alter server role [sysadmin] add member [NT AUTHORITY\SYSTEM]
2> go
1> exit
```

3. 上記の作業が完了したら、以下の手順でそれぞれのインスタンスを再起動します。

- a. 左ペインの[SQL Server のサービス]を選択して右ペインに表示される[SQL Server(インスタンス名)]をダブルクリックします。

「SQL Server(インスタンス名)のプロパティ」画面が表示されます。

- b. [再起動(R)]をクリックし、再起動処理が完了したら[OK]をクリックし、SQL Server 構成マネージャーを終了します。

- vDC Automation Standard Edition ポータル と SQL Server の接続設定

構築自動化コマンド(後処理)が正常終了している場合、本手順は不要です。

構築自動化コマンドについては、「[2.2.2 構築自動化コマンド \(8 ページ\)](#)」を参照してください。

『vDC Automation Standard Edition ポータル利用者マニュアル (インストール編)』の『2.2 SQL の接続設定』を参照して、設定を行ってください。

- SQL Server Browser サービスのスタートアップの種類の変更

SQL Server 構築自動化コマンドが正常終了している場合、本手順は不要です。

構築自動化コマンドについては、「[2.2.2 構築自動化コマンド \(8 ページ\)](#)」を参照してください。

SQL Server Browser サービスのスタートアップの種類を自動に設定し、サービスを起動します。

1. 「コントロールパネル」→「管理ツール」→「サービス」を起動して、「SQL Server Browser」サービスのスタートアップの種類が「自動」になっていない場合、「自動」に変更してください。
2. 「SQL Server Browser」サービスが起動していない場合は、サービスを起動してください。

- SQL Server クライアントツールのインストール

ここでは Express Edition でのインストール方法について記載します。

1. SQLManagementStudio_x64_JPN.exe を実行してインストーラを起動します。
2. [SQL Server の新規スタンドアロン インストールを実行するか、既存のインストールに機能を追加します]をクリックします。
3. [セットアップサポートルール]画面では、ルールチェック完了後自動的に次の画面に切り替わります。
4. [ライセンス条項]画面で、[ライセンス条項に同意します。(A)]チェックボックスにチェックを入れ、[次へ(N)>]をクリックします。

5. [製品の更新プログラム]画面で、更新プログラムの検索が完了後、[次へ(N)>]をクリックします。
6. [セットアップファイルのインストール]画面では **SQL Server** セットアップのインストールが完了後、自動的に次の画面に切り替わります。
7. [セットアップサポートルール]画面では、ルールチェック完了後自動的に次の画面に切り替わります。
8. [機能の選択]画面で[管理ツール - 基本]にチェックを入れ、[次へ(N)>]をクリックします。

既に **SQL Server** クライアントツールが当該サーバにインストール済みの場合は、「管理ツール - 基本」がグレイアウトされチェック済みの状態となっておりますので、その場合は、**SQL Server** クライアントツールのインストールは必要ありません。インストールを取り消してください。
9. [インストール ルール]、[必要なディスク領域]画面では、自動的に次の画面に切り替わります。
10. [エラー レポート]画面で、[次へ(N)>]をクリックします。
11. [インストール構成ルール]画面では、ルールチェック完了後自動的に次の画面に切り替わります。
12. [インストールの進行状況]画面では管理ツールのインストール完了後、[完了]画面が表示されます。[閉じる]をクリックします。
13. **SQL Server** インストールセンターを閉じます。

2.2.10 PostgreSQL をインストールする

vDC Automation Standard Edition ポータルまたは SigmaSystemCenter が、DBMS に PostgreSQL を使用する場合、PostgreSQL をインストールします。

本バージョンの vDC Automation Standard Edition がサポートする PostgreSQL のバージョンは 9.6.x と 11.x です。

- PostgreSQL のインストール

注

vDC Automation Standard Edition で使用する PostgreSQL のロケールは「C」を選択してください。

vDC Automation Standard Edition で使用する PostgreSQL の管理者パスワードに使用できる文字は、半角英数字、および以下の文字を除く半角記号です。

" \$ % & ' + , / : ; < = > \ ^ ` { |

- SigmaSystemCenter が、PostgreSQL を使用する場合

PostgreSQL のインストール手順については、以下のマニュアルを参照してください。

PostgreSQL 構築自動化コマンドが正常終了している場合、本手順は不要です。

注

PostgreSQL 構築自動化コマンドを使用した後、管理サーバをインストールする場合、[リソース管理機能設定 - PostgreSQL のユーザ名] に「postgres」を指定してください。

構築自動化コマンドについては、「[2.2.2 構築自動化コマンド \(8 ページ\)](#)」を参照してください。

- * 『SigmaSystemCenter インストレーションガイド 付録 A PostgreSQL のインストール/アンインストール』

『PostgreSQL のインストール』

- SigmaSystemCenter が、PostgreSQL を使用しない場合

- * 管理サーバと同一マシン上にデータベースを構築する

PostgreSQL 構築自動化コマンドが正常終了している場合、本手順は不要です。

構築自動化コマンドについては、「[2.2.2 構築自動化コマンド \(8 ページ\)](#)」を参照してください。

1. 管理サーバに、管理者権限を持つユーザでログオンします。
2. 以下の URL から、PostgreSQL をダウンロードしインストールします。

<https://www.postgresql.org/download/>

3. システム環境変数 PATH に、PostgreSQL のインストールフォルダ\bin を登録します。

- * 管理サーバとは別のマシンにデータベースを構築する

1. データベースサーバに、管理者権限を持つユーザでログオンします。
2. 以下の URL から、PostgreSQL をダウンロードしインストールします。

<https://www.postgresql.org/download/>

3. PostgreSQL インストールフォルダ\data 配下の pg_hba.conf に、以下の行を追加します。

```
host all all 管理サーバ IP アドレス/32 md5
```

4. システム環境変数 PATH に、PostgreSQL のインストールフォルダ\bin を登録します。
5. [セキュリティが強化された Windows ファイアウォール] で、以下の受信の規則を追加します。

[ポータル設定 - PostgreSQL のポート番号] で指定するポート番号 既定値は 5432

6. 管理サーバに、管理者権限を持つユーザでログオンします。
7. 以下の URL から、最新バージョンの pgAdmin をダウンロードしインストールします。

<https://www.postgresql.org/ftp/pgadmin/>

8. システム環境変数 PATH に、pgAdmin のインストールフォルダ\runtime を登録します。

- **psqlODBC のインストール**

1. 管理サーバに、管理者権限を持つユーザでログオンします。
2. 以下の URL から psqlODBC ドライバ(x64 版) をダウンロードし、インストールします。

<https://www.postgresql.org/ftp/odbc/versions/>

2.2.11 MySQL をインストールする

vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプションを使用する構成では、スタック管理サーバで MySQL を利用します。

MySQL の製品種別として、Standard Edition または Enterprise Edition を利用できます。

『vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプション 利用ガイド』を参照し、MySQL のインストールを行ってください。

2.2.12 JRE をインストールする

カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用する場合、JobCenter CL/Web インストーラ内部で Java を使用してセットアップを行います。

『JobCenter Web 機能利用の手引き』の『2.1.1. インストール前の事前準備』を参照し、JRE のインストールを行ってください。

2.2.13 LicenseManager をインストールする

カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用する場合、管理サーバで LicenseManager を利用します。

『JobCenter インストールガイド』の『2.2.4. Windows 版 (通常インストール)』を参照し、LicenseManager のインストールを行ってください。

LicenseManager のインストールが終了したあとで、JobCenter をセットアップする前にライセンス解除のためのコードワードの登録が必要です。

『JobCenter インストールガイド』の『2.3. コードワードを登録する』を参照し、コードワードの登録を行ってください。

2.3 管理サーバをインストールする

次項以降では、vDC Automation Standard Edition 管理サーバにコンポーネントをインストールする手順を説明します。

カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用する場合、管理サーバに JobCenter をインストールする必要があります。

なお、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラを利用してコンポーネントをインストールする前に、以下に示す準備が必要です。

- 事前にインストールが必要なソフトウェア ([「2.3.2 事前にインストールが必要なソフトウェア \(29 ページ\)」](#))
- DHCP サーバの構築
- Windows ファイアウォールの設定
- ESM/ServerManager ユーザグループ設定に関する注意
- vDC Automation Standard Edition 管理サーバのインストールに関する注意

注

管理サーバをアップグレードする場合またはインストール中断の状態で再度インストールを実行する場合は、事前に以下の順番でサービスを停止して行ってください。

また、インストール後は手動にてサービスを起動してください。

- WebSAM UMF Operations Manager_102

注

SigmaSystemCenter マネージャがインストールされている環境に管理サーバを新規インストールする場合は、事前に SigmaSystemCenter マネージャのバージョンを 3.9 にしてください。

注

WebSAM SystemManager G マネージャがインストールされている環境に管理サーバを新規インストールする場合は、事前に WebSAM SystemManager G 9.0 にバージョンアップしてください。

注

WebSAM SystemManager マネージャがインストールされている環境に管理サーバを新規インストールする場合は、事前に WebSAM SystemManager G 9.0 にバージョンアップしてください。バージョンアップは、カスタムモードから WebSAM SystemManager マネージャと同じサービスに WebSAM SystemManager G を追加することで行います。

2.3.1 管理サーバに導入するコンポーネント

管理サーバのシステム要件については、『vDC Automation ファーストステップガイド』の『第6章 動作環境／システム要件』および『vDC Automation Standard Edition ポータル利用者マニュアル（インストール編）』の『第1章 動作環境』を参照してください。

カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用する場合、JobCenter のシステム要件については『JobCenter リリースメモ』の『3. 動作環境』を参照してください。

管理サーバに導入するコンポーネントは以下の通りです。

- WebSAM SystemManager G Manager
- Application Server^{*1*2}
- WebSAM vDC Automation Service Governor WebAPI Base Option
- WebSAM vDC Automation Portal
- WebSAM SigmaSystemCenter
- JobCenter MG/SV^{*3}
- JobCenter CL/Web^{*3}

^{*1} Java 8u232、Tomcat 8.5.51 がインストールされます。

^{*2} Tomcat のログは定期的に消去されないかぎり、ファイルが蓄積していき、ログフォルダが肥大化します。定期的に手動で削除してください。

Tomcat のログファイルは以下に出力されます。

<インストールフォルダ>\FW\Tomcat\logs

注

<インストールフォルダ>は、管理サーバのインストール先です。

デフォルトの場合は「C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\MoM」です。

^{*3} カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用する場合に必要です。

2.3.2 事前にインストールが必要なソフトウェア

管理サーバのコンポーネントのインストールを開始する前に、以下のソフトウェアのインストールが必要です。

- .NET Framework 3.5 Service Pack 1^{*1}
- .NET Framework 4.7.2
- Visual C++ 2013(x86), 2017(x86) 再頒布可能パッケージ
- Visual C++ 2013(x86/x64), 2017(x64) 再頒布可能パッケージ
- Visual C++ 2015(x64) 再頒布可能パッケージ^{*2}
- SQL Server^{*3*4}

- SQL Server クライアントツール^{*3*4}
- PostgreSQL ^{*5*6}
- pgAdmin ^{*5*6}
- インターネットインフォメーションサービス (IIS)
- LicenseManager^{*2}

*1 SQL Server 2014 を使用する場合に必要です。

*2 カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用する場合に必要です。

*3 WebSAM vDC Automation Portal および WebSAM SigmaSystemCenter で SQL Server を使用する場合に必要です。

*4 SQL Server を別サーバ化する場合には、DBMS サーバに SQL Server をインストールし、管理サーバをインストールするマシンに SQL Server クライアントツールをインストールします。DBMS を別サーバ化しない場合には SQL Server クライアントツールのインストールは不要です。

*5 WebSAM vDC Automation Portal および WebSAM SigmaSystemCenter で PostgreSQL を使用する場合に必要です。

*6 PostgreSQL を別サーバ化する場合には、DBMS サーバに PostgreSQL をインストールし、管理サーバをインストールするマシンに pgAdmin をインストールします。DBMS を別サーバ化しない場合には pgAdmin のインストールは不要です。

「2.2 事前にインストールが必要なソフトウェア (7 ページ)」 の手順を参照して、インストールしてください。

2.3.3 DHCP サーバの構築

仮想基盤サーバとして HYPER-V、KVM を利用時、vDC Automation Standard Edition と同一のネットワーク内に DHCP サーバが必要です。

vDC Automation Standard Edition をインストールする前に DHCP サーバを準備してください。

DHCP サーバは管理サーバと同一のマシン上に設置することが可能です。同一ネットワークセグメント内に複数の DHCP サーバが存在しても問題ありません。

DHCP サーバには、使用予定の全ての IP サブネットに対する、ゲートウェイ、IP プール、ルーティングを設定して下さい。

ヒント

DHCP サーバの設定方法、および注意事項については、『DeploymentManager ファーストステップガイド』の『2.2.1 ネットワーク環境について』、および『DeploymentManager インストレーションガイド』の『1.2.2 DHCP サーバの設定をする』を参照してください。

注

- DHCP サーバを設定しない場合、DeploymentManager のバックアップ/リストア、ディスク複製 OS インストール、OS クリアインストール、VM プロビジョニングを利用した機能が制限されます。
-

2.3.4 Windows ファイアウォールの設定

管理サーバにおいて Windows ファイアウォールの機能が有効な場合、管理サーバが利用するポートを開く必要があります。いくつかのポートはインストール時に自動的に登録されますが、手動で登録が必要な項目もあります。

詳細は、以下のマニュアルを参照してください。

- 『vDC Automation Standard Edition ポータル利用者マニュアル（インストール編）』
『5.1 待ち受けポート番号の接続許可』
- 『vDC Automation Service Governor WebAPI Base Option インストレーションガイド』
『3.7 使用するポート番号について』
- 『SigmaSystemCenter マニュアル』
- 『SystemManager G マニュアル』

2.3.5 ESMPRO/ServerManager ユーザグループ設定に関する注意

セキュリティ上の理由から、ESMPRO/ServerManager で Windows GUI を使用するユーザは「ESMPRO ユーザグループ」と呼ばれるグループに属していなければなりません。

「ESMPRO ユーザグループ」は ESMPRO/ServerManager のインストール時に決定されます。既定では Administrators グループが指定されます。

2.3.6 vDC Automation Standard Edition 管理サーバのインストールに関する注意

- vDC Automation Standard Edition 管理サーバの OS のネットワーク接続の IP アドレスは、DHCP による自動取得ではなく、固定 IP アドレスに設定されていることを確認してください。
- OS の種類によっては、エフェメラルポートの影響で DeploymentManager が使用するポートと、他のサービスやアプリケーションで使用するポートが競合し DeploymentManager のサービスが起動できない場合があります。エフェメラルポートの確認方法と対処方法について『DeploymentManager ファーストステップガイド』の『2.2 システム構成に関する注意事項』を参照してください。

- その他の注意については、『DeploymentManager インストールガイド』の『2.1 DPM サーバをインストールする』および『DeploymentManager ファーストステップガイド』の『2.2 システム構成に関する注意事項』を参照してください。

2.3.7 インストールを実行する前の注意

インストールを開始する前に、必ず使用しているアプリケーションおよび Web ブラウザをすべて終了してください。

Application Experience (AeLookupSvc) サービスのスタートアップの種類が [無効] に設定されている場合、エラーコード 65 にてインストールが失敗する場合があります。本エラーが発生する場合は、一旦 Application Experience (AeLookupSvc) サービスのスタートアップの種類を [手動] に変更し、インストールの後に、再度、Application Experience (AeLookupSvc) サービスのスタートアップの種類を [無効] に変更してください。

2.3.8 管理サーバのインストール

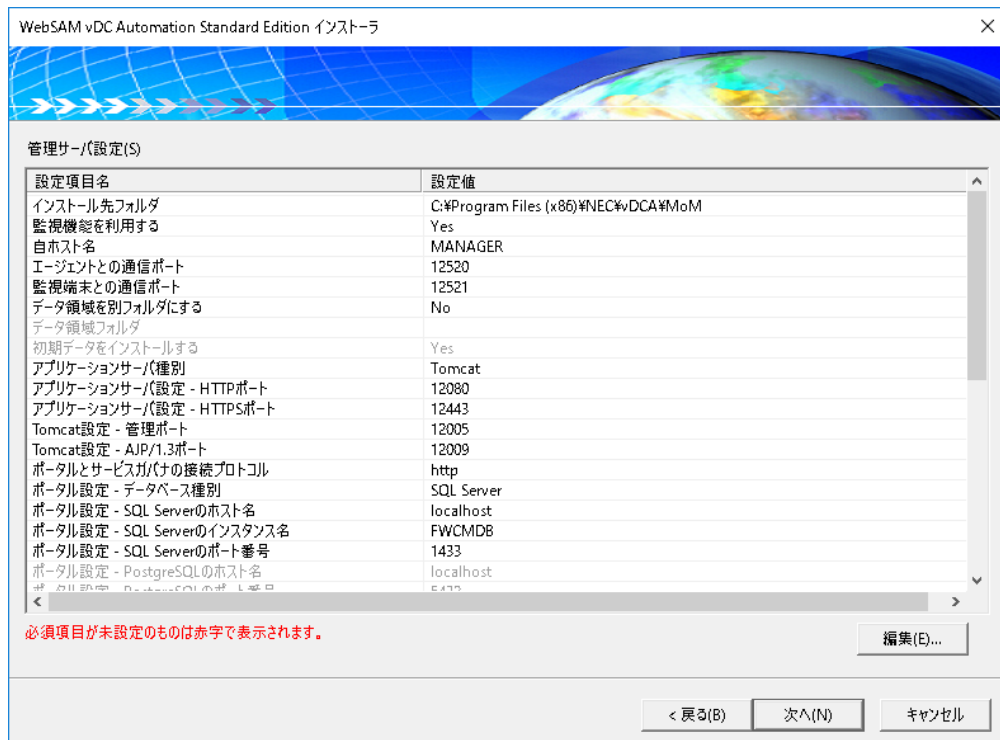
1. vDCA/NWA インストール DVD を DVD ドライブに挿入します。
2. コマンドプロンプト、またはエクスプローラから以下のコマンドを実行し、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラを起動します。

```
> <インストール DVD>:\install\Windows\vDCAInst_SE.exe
```

3. インストーラが起動します。
4. [標準(T)]を選択し、[次へ(N)]をクリックします。
「インストール機能選択」画面が表示されます。
5. [管理サーバ]チェックボックスにチェックを入れます。

管理サーバをインストールするマシンには、[VM 監視サーバ]および[管理対象マシン]以外の機能がインストールできます。その他の機能もインストールする場合は、チェックボックスにチェックを入れます。

6. [次へ(N)>]をクリックします。
[管理サーバ設定(S)]画面が表示されます。



7. 以下の項目は[ポータル設定 - データベース種別]で[PostgreSQL]を選択している場合に必須項目となります。設定項目名を選択して[編集(E)]をクリックして表示される画面で設定してください。

- [ポータル設定 - PostgreSQL の管理者パスワード] (例 : Password)

8. 以下の項目は SystemManager G WebConsole Option がインストールされていない場合に必須項目となります。設定項目名を選択して[編集(E)]をクリックして表示される画面で設定してください。

- [WebConsoleOption 設定 - データベースの管理者パスワード] (例 : Password)

9. 以下の項目は SigmaSystemCenter マネージャがインストールされておらず、[リソース管理機能設定 - データベース種別]で[PostgreSQL]を選択している場合に必須項目となります。設定項目名を選択して[編集(E)]をクリックして表示される画面で設定してください。

- [リソース管理機能設定 - PostgreSQL のパスワード] (例 : Password)

10. 以下の項目は SigmaSystemCenter マネージャがインストールされていない場合に必須項目となります。設定項目名を選択して[編集(E)]をクリックして表示される画面で設定してください。

- [ESMPRO/ServerManager 設定 - アドミニストレータ名] (例 : Administrator)
- [ESMPRO/ServerManager 設定 - パスワード] (例 : Password)

11. 必要に応じて各設定項目を設定します。設定項目をクリックして[編集(E)]をクリックするか、または、設定項目をダブルクリックします。

選択した設定項目の設定画面が開きます。

設定項目名	設定値
インストール先フォルダ	インストール先フォルダを指定します。 既定値は C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\MoM となります。 フォルダのパスは 55 文字以内で指定します。*1
監視機能を利用する	監視機能を利用するかを指定します。利用する場合、以下のコンポーネントがインストールされます。 • WebSAM SystemManager G Manager • WebSAM vDC Automation Service Governor WebAPI Base Option • SystemManager G WebConsole Option 既定値は Yes です。*7
自ホスト名	管理サーバのコンピュータ名を指定します。 既定値は省略形のマシン名（例：MANAGER）となります。 *2*7
エージェントとの通信ポート	エージェントからの接続に利用する、マネージャ側のポート番号を指定します。 既定値は 12520 です。*7
監視端末との通信ポート	管理サーバ監視端末からの接続に利用する、マネージャ側のポート番号を指定します。 既定値は 12521 です。*7
データ領域を別フォルダにする	No（既定値）を指定します。*3*7
データ領域フォルダ	「データ領域を別フォルダにする」で Yes を選択した場合に指定することができます。*3*7
初期データをインストールする	「データ領域を別フォルダにする」で Yes を選択した場合に指定することができます。*3*7 既定値は Yes です。
アプリケーションサーバ種別	アプリケーションサーバの種別を指定します。 本バージョンでは「Tomcat」のみ指定可能です。*8
アプリケーションサーバ設定 - HTTP ポート	アプリケーションサーバの HTTP ポート番号を指定します。 既定値は 12080 です。*8
アプリケーションサーバ設定 - HTTPS ポート	アプリケーションサーバの HTTPS ポート番号を指定します。 既定値は 12443 です。*4*8
Tomcat 設定 - 管理ポート	Tomcat の管理ポート番号を指定します。 既定値は 12005 です。*8
Tomcat 設定 - AJP/1.3 ポート	Tomcat の AJP/1.3 ポート番号を指定します。 既定値は 12009 です。*8
ポータルとサービスガバナの接続プロトコル	ポータルとサービスガバナの接続プロトコルを指定します。 「http」か「https」が指定可能です。 既定値は http です。*8
ポータル設定 - データベース種別	WebSAM vDC Automation Portal が使用するデータベースの種別を指定します。

設定項目名	設定値
	既定値は SQL Server です。*9
ポータル設定 - SQL Server のホスト名	SQL Server をインストールしたマシンのホスト名を指定します。 既定値は localhost です。*9*10
ポータル設定 - SQL Server のインスタンス名	SQL Server のインスタンス名を指定します。 「2.2.9 SQL Server をインストールする (20 ページ)」で作成したインスタンス名を指定します。 既定値は FWCMDDB です。*9*10
ポータル設定 - SQL Server のポート番号	SQL Server のポート番号を指定します。 既定値は 1433 です。*9*10
ポータル設定 - PostgreSQL のホスト名	PostgreSQL をインストールしたマシンのホスト名を指定します。 既定値は localhost です。*9*11
ポータル設定 - PostgreSQL のポート番号	PostgreSQL のポート番号を指定します。 既定値は 5432 です。*9*11
ポータル設定 - PostgreSQL の管理者名	PostgreSQL の管理者名を指定します。 既定値は postgres です。*9*11
ポータル設定 - PostgreSQL の管理者パスワード	PostgreSQL の管理者パスワードを指定します。*11
WebConsoleOption 設定 - ホスト名	WebConsoleOption のホスト名を指定します。 既定値は localhost です。*12*13
WebConsoleOption 設定 - データディレクトリ	WebConsoleOption のデータディレクトリを指定します。 既定値は C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\MoM\WebConsoleOption\data です。*12
WebConsoleOption 設定 - API Gateway のホスト名	WebConsoleOption の API Gateway のホスト名を指定します。 既定値は localhost です。*12
WebConsoleOption 設定 - API Gateway のポート番号	WebConsoleOption の API Gateway のポート番号を指定します。 既定値は 22522 です。*12
WebConsoleOption 設定 - データベースのホスト名	WebConsoleOption のデータベースのホスト名を指定します。 既定値は localhost です。*12
WebConsoleOption 設定 - データベースのポート番号	WebConsoleOption のデータベースのポート番号を指定します。 既定値は 5432 です。*12
WebConsoleOption 設定 - データベースの管理者パスワード	WebConsoleOption のデータベースの管理者パスワードを指定します。*12
リソース管理機能を利用する	リソース管理機能を利用するかを指定します。利用する場合、以下のコンポーネントがインストールされます。 • WebSAM SigmaSystemCenter 既定値は Yes です。*5
リソース管理機能設定 - データベース種別	WebSAM SigmaSystemCenter が使用するデータベースの種別を指定します。

設定項目名	設定値
	既定値は SQL Server です。*5
リソース管理機能設定 - PostgreSQL サーバの IP アドレス	PostgreSQL をインストールしたマシンの IP アドレスを指定します。 既定値は 127.0.0.1 です。*14
リソース管理機能設定 - PostgreSQL のポート番号	PostgreSQL のポート番号を指定します。 既定値は 5432 です。*14
リソース管理機能設定 - PostgreSQL のユーザ名	PostgreSQL のユーザ名を指定します。 既定値は postgres です。*14
リソース管理機能設定 - PostgreSQL のパスワード	PostgreSQL のパスワードを指定します。*14
ESMPRO/ServerManager 設定 - アドミニストレータ名	ESMPRO/ServerManager のアドミニストレータの名前を指定します。*5
ESMPRO/ServerManager 設定 - パスワード	ESMPRO/ServerManager のパスワードを指定します。*5
DeploymentManager 設定 - 管理サーバ IP アドレス	DPM サーバの IP アドレスを指定します。*5*6

*1 インストール先フォルダ/データ領域フォルダは、大文字と小文字も同じ文字として扱うので注意してください。インストール先フォルダ/データ領域フォルダに使用できない文字は以下になります。

\\/:*?"<>|;,&^

なお、\ は区切り文字としては使用できます。

*2 「自ホスト名」は、接続する他マシンから名前解決できることを確認してください。完全修飾ドメイン名(例：manager.domain.net.jp)や、IP アドレスを指定することを推奨します。クラスタ構成の場合は、フローティング IP アドレス、もしくは、仮想ホスト名を指定します。

*3 クラスタ構成を取る場合は Yes を指定しますが、本書ではクラスタ構成については対象外としますので、No を指定します。

*4 vCenter Server 5.5 は、12443 のポートを利用しております。同一サーバ内に vCenter Server 5.5 をインストールする場合は、WebAPI(https)に影響がありますので、ポート番号を変更してください。

*5 SigmaSystemCenter マネージャがインストールされていない場合に指定することができます。

*6 入力を省略した場合、管理サーバに搭載されているすべての LAN ボードを DPM サーバで使用します。

*7 WebSAM SystemManager G マネージャ がインストールされていない場合に指定することができます。

*8 Application Server がインストールされていない場合に指定することができます。

*9 WebSAM vDC Automation Portal がインストールされていない場合に指定することができます。

*10 [ポータル設定 - データベース種別]で「SQL Server」を選択した場合に指定することができます。

*11 [ポータル設定 - データベース種別]で「PostgreSQL」を選択した場合に指定することができます。

*12 SystemManager G WebConsole Option がインストールされていない場合に指定することができます。

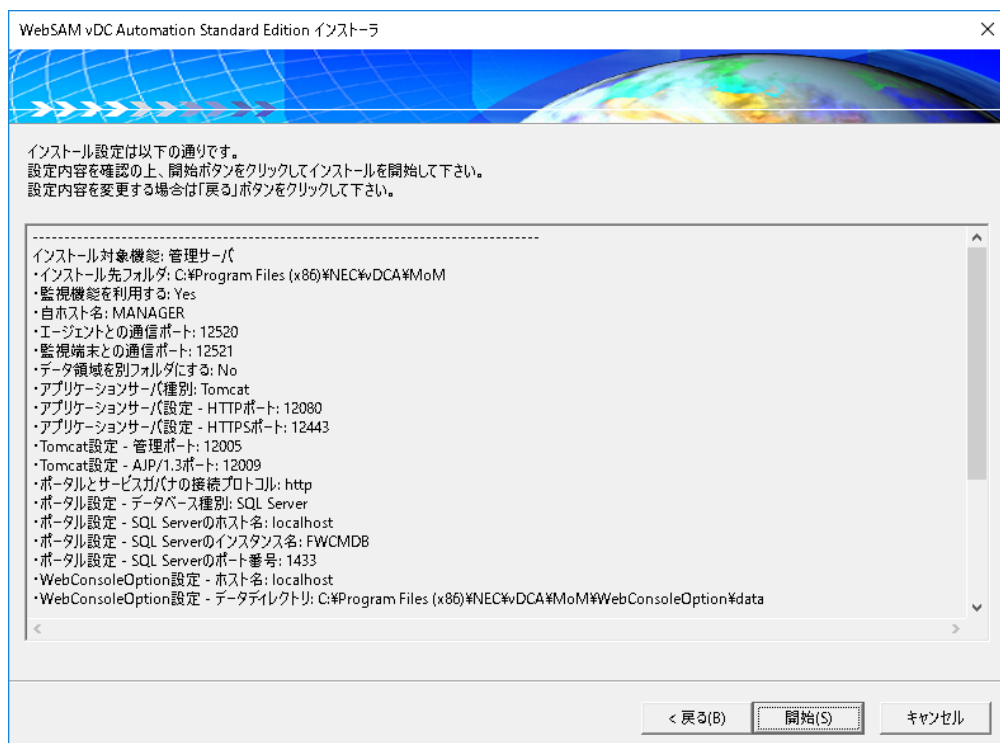
- *1 WebSAM SystemManager G マネージャ と SystemManager G WebConsole Option との接続設定については、『WebSAM SystemManager G 9.0 WebConsole Option インストールガイド』の『3.4 マネージャから WebConsole Option への接続設定』を参照してください。
- *1 SigmaSystemCenter マネージャがインストールされておらず、[リソース管理機能設定 - データベース種別]で「PostgreSQL」を選択した場合に指定することができます。

12. [次へ(N)>]をクリックします。

[ポータル設定 - データベース種別] または [リソース管理機能設定 - データベース種別] で「PostgreSQL」を選択している場合、データベースへの接続確認を実施し、データベースに接続可能な場合はインストール設定の確認画面が表示されます。

注

- データベースに接続できない場合は、次へ進めません。設定を見直してください。
対処方法については、『5.2.2 管理サーバのインストールでデータベースへの接続に失敗する (125 ページ)』を参照してください。
- その他の機能も同時にインストールする指定をした場合は、[次へ(N)>]をクリックした後、それぞれの設定画面が表示されます。それぞれの設定画面については、各機能のインストール手順を参照してください。



13. 内容を確認し、[開始(S)]をクリックします。

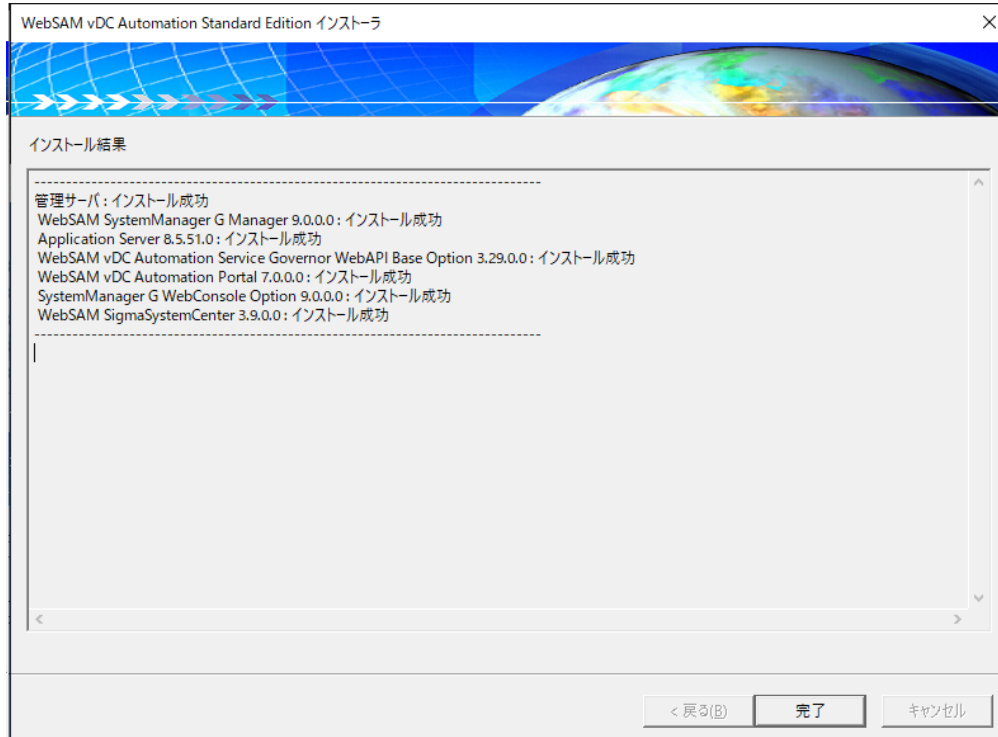
14. 表示される確認のメッセージで[はい(Y)]をクリックします。

インストールが始まります。

15. インストールが完了すると、「インストール終了」画面が表示され、インストール結果が表示されます。

SigmaSystemCenter マネージャがインストール済みの場合、SigmaSystemCenter マネージャのインストール結果は「スキップ」と表示されます。

WebSAM SystemManager G マネージャがインストール済みの場合、WebSAM SystemManager G マネージャのインストール結果は「スキップ」と表示されます。



16. [完了]をクリックします。
17. 再起動のメッセージが表示された場合は、[OK]をクリックします。
18. サーバを再起動します。
19. ライセンス登録、および、管理サーバの設定を実施します。ライセンスの登録は、管理サーバ監視端末のインストール後に行います。[「2.4 管理サーバ監視端末をインストールする \(40 ページ\)」](#)を参照してください。管理サーバの設定は、[「2.11 管理サーバの登録と設定 \(65 ページ\)」](#)を参照してください。

2.3.9 JobCenter MG/SV のインストール

本項の手順は、カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用する場合にのみ必要です。

JobCenter 連携を利用する構成では、管理サーバで JobCenter をインストールします。

JobCenter MG/SV のインストール手順については、『JobCenter インストールガイド』の『2.4.4. Windows 版(通常インストール)』を参照してください。

- JobCenter のインストールは、管理サーバのインストール後に行います。[「2.3.8 管理サーバのインストール \(32 ページ\)」](#)を参照してください。

設定項目名	設定値
作成済みの設定ファイルを読み込む	作成済みの設定ファイルを読み込みます。 初めてインストールを行う場合や、設定ファイルを保存していない場合は使用できません。 本書ではチェックを入れずに[次へ(N)>]ボタンをクリックします。
言語	インストールする言語を設定します。 本書では日本語を指定してください。
インストールパス	インストール先フォルダを指定します。 既定値は C:\JobCenter\SV となります。
定義情報の引き継ぎ	古いバージョンのユーザ定義情報を含んでいるディレクトリを指定するか、再インストール時に再インストール前と同じディレクトリを指定した場合に、定義情報を削除するかどうかを設定します。 本書では「いいえ(N)」を選択し、定義情報を削除してください。
プログラムフォルダ名	スタートメニューのプログラムに追加するフォルダを設定します。 既定値は JobCenter\SV となります。
JobCenter 管理者	JobCenter 管理者権限を持つアカウントを設定します。 既定値は Administrator です。
ドメイン名	JobCenter の管理者ユーザにドメインユーザを指定する場合に、ドメイン名を設定します。 既定値は所属しているドメイン名です。
ユーザタイプ	ドメイン環境にインストールする場合に JobCenter の管理者にドメインユーザ、ローカルユーザのどちらを使用するのかを設定します。 既定値はローカルユーザです。
JobCenter グループ	JobCenter を使用するユーザが所属するグループを設定する。 既定値は JobCenter です。
IP アドレス	手動設定を選択した場合にローカルの JobCenter で使用する IP アドレスを設定します。 IPv4 アドレス、IPv6 アドレスそれぞれ 5 つまで指定することが可能です。*1
NQS ポート	ジョブの制御（単位ジョブリクエストの転送、結果取得）を行う際、使用するプロトコルです。 既定値は 607 です。*1
JNWENGINE ポート	ホスト/サイト内部のプロセス間通信で使用するプロトコルです。 既定値は 609 です。*1
JCCOMBASE ポート	CL/Win から JobCenter を操作する際に使用するプロトコルです。 既定値は 611 です。*1
JCEVENT ポート	JobCenter のイベント送受信部品による連携機能が使用するプロトコルです。 既定値は 10012 です。*1

設定項目名	設定値
JCDBS ポート	ホスト/サイト内部のプロセス間通信で使用するプロトコルです。 既定値は 23131 です。*1
ファイアウォール例外設定	Windows のファイアウォールの例外設定を自動で行うかどうかを設定します。 既定値は行う(自動で行う)です。
マシン ID	マシン連携を行いマシン間で一意となるようなマシン ID を設定します。 本書では 1 を指定してください。
文字コード	JobCenter で使用する文字コードを設定します。 本書では「非 UNICOD モード」を選択してください

*1 JobCenter のネットワーク環境の構築については、『JobCenter 環境構築ガイド』の『第2章 ネットワーク環境構築』を参照してください。

2.3.10 JobCenter CL/Web のインストール

本項の手順は、カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用する場合にのみ必要です。

JobCenter 連携を利用する構成では、管理サーバで JobCenter をインストールします。

JobCenter CL/Web のインストール手順については、『JobCenter Web 機能利用の手引き』の『2.1.3. CL/Web サーバのインストール』参照してください。

- JobCenter のインストールは、管理サーバのインストール後に行います。 [「2.3.8 管理サーバのインストール \(32 ページ\)」](#)を参照してください。

2.4 管理サーバ監視端末をインストールする

次項以降では、vDC Automation Standard Edition 管理サーバ監視端末のコンポーネントをインストールする手順を説明します。

カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用する場合、管理サーバ監視端末に JobCenter をインストールする必要があります。 [「2.4.4 JobCenter CL/Win のインストール \(44 ページ\)」](#)を参照して、JobCenter をインストールしてください。

2.4.1 管理サーバ監視端末に導入するコンポーネント

管理サーバ監視端末に導入するコンポーネントは以下の通りです。

- WebSAM SystemManager G View
- JobCenter CL/Win^{*1}

*1 カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用する場合に必要です。

2.4.2 インストールを実行する前の注意

インストールを開始する前に、必ず使用しているアプリケーションおよび Web ブラウザをすべて終了してください。

Application Experience (AeLookupSvc) サービスのスタートアップの種類が [無効] に設定されている場合、エラーコード 65 にてインストールが失敗する場合があります。本エラーが発生する場合は、一旦 Application Experience (AeLookupSvc) サービスのスタートアップの種類を [手動] に変更し、インストールの後に、再度、Application Experience (AeLookupSvc) サービスのスタートアップの種類を [無効] に変更してください。

2.4.3 管理サーバ監視端末のインストール

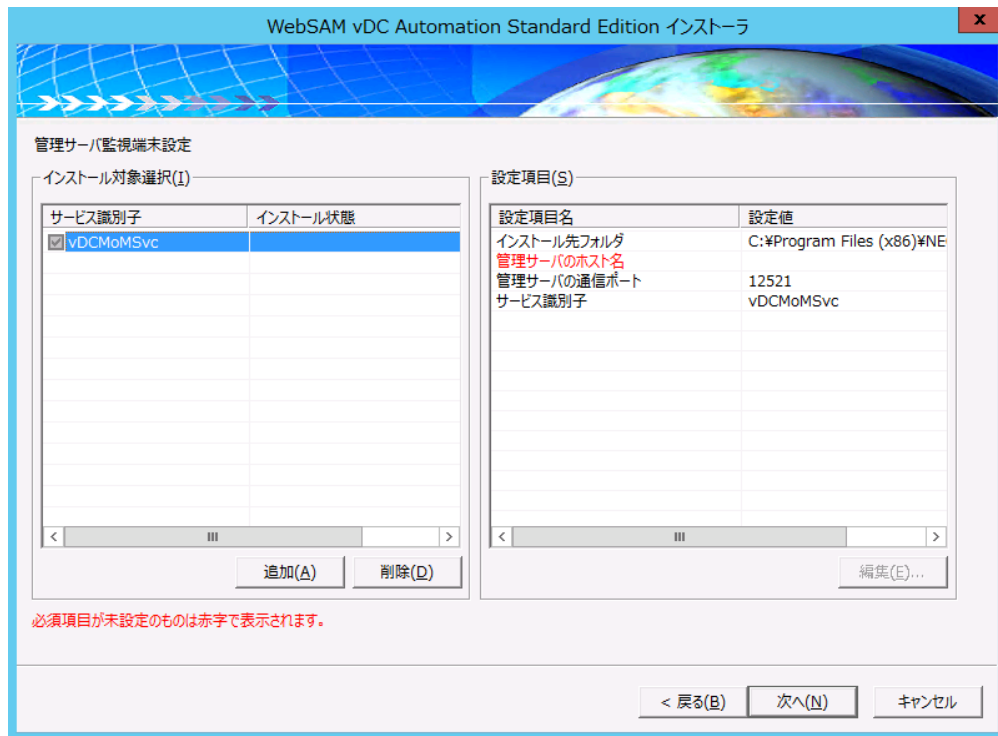
1. vDCA/NWA インストール DVD を DVD ドライブに挿入します。
2. コマンドプロンプト、またはエクスプローラから以下のコマンドを実行し、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラを起動します。

```
> <インストール DVD>:\install\Windows\vDCAInst_SE.exe
```

3. インストーラが起動します。
4. [標準(T)]を選択し、[次へ(N)]をクリックします。
「インストール機能選択」画面が表示されます。
5. [管理サーバ監視端末]チェックボックスにチェックを入れます。

管理サーバ監視端末をインストールするマシンには、[管理対象マシン]以外の機能がインストールできます。その他の機能もインストールする場合は、チェックボックスにチェックを入れます。

6. [次へ(N)>]をクリックします。
[管理サーバ監視端末設定]画面が表示されます。



7. 必須項目をを選択して[編集(E)]をクリックして表示される画面で値を設定します。設定する値については次の手順の表を参照してください。

[追加(A)]ボタンをクリックして管理サーバ監視端末を複数インストールすることができます。新規追加した管理サーバ監視端末を一覧から削除する場合は、[削除(D)]ボタンをクリックします。

8. 必要に応じて各設定項目を設定します。設定項目をクリックして[編集(E)]をクリックするか、または、設定項目をダブルクリックします。管理サーバ監視端末を複数インストールする場合は、それぞれのインストール対象に設定項目を設定してください。

選択した設定項目の設定画面が開きます。

設定項目名	設定値
インストール先フォルダ	インストール先フォルダを指定します。 既定値は C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\MoMView となります。 フォルダのパスは 55 文字以内で指定します。*1
管理サーバのホスト名	管理サーバの IP アドレスまたはホスト名を指定します。*2
管理サーバの通信ポート	管理サーバの構成で[監視端末との通信ポート]に指定したポート番号を指定します。 既定値は 12521 です。
サービス識別子	複数インストールした監視端末を区別する識別子です。*3

*1 インストール先フォルダ/データ領域フォルダは、大文字と小文字も同じ文字として扱うので注意してください。インストール先フォルダ/データ領域フォルダに使用できない文字は以下になります。

\\: * ? " < > | ; , & ^

なお、\ は区切り文字としては使用できます。

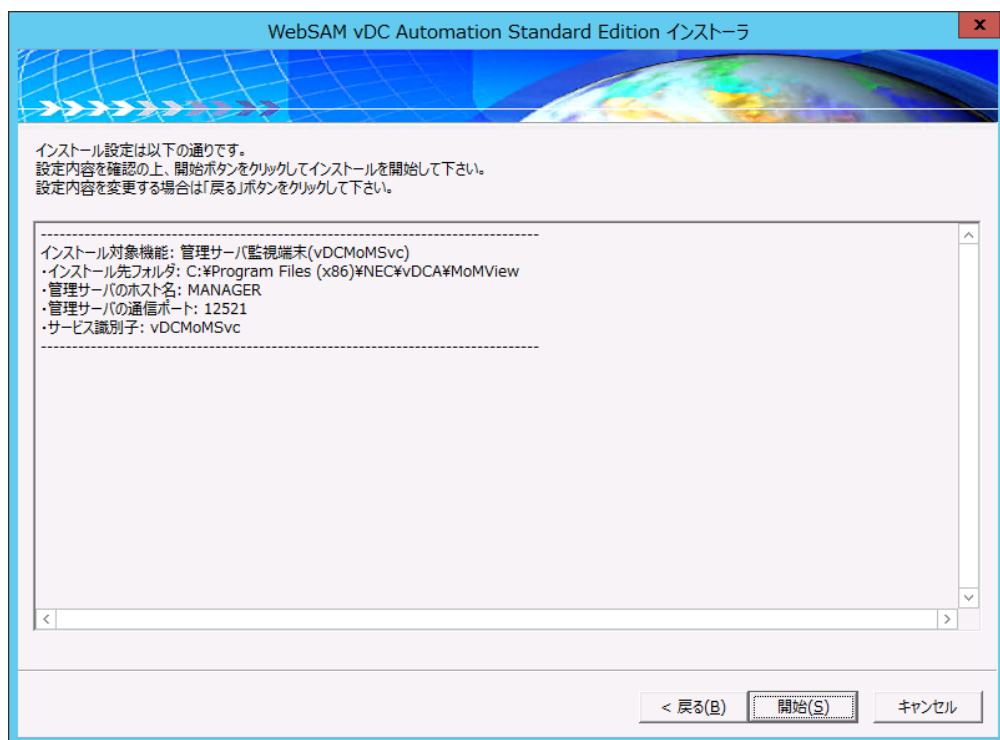
- *2 ホスト名で指定する場合は、名前解決できることを確認してください。
- *3 サービス識別子は、大文字と小文字も同じ文字として扱うので注意してください。
サービス識別子に使用できない文字は以下になります。
△!"#\$%&'()*+,-./:;<=>?@[`\'^`{}~ ※△は半角スペース

9. [次へ(N)>]をクリックします。

インストール設定の確認画面が表示されます。

注

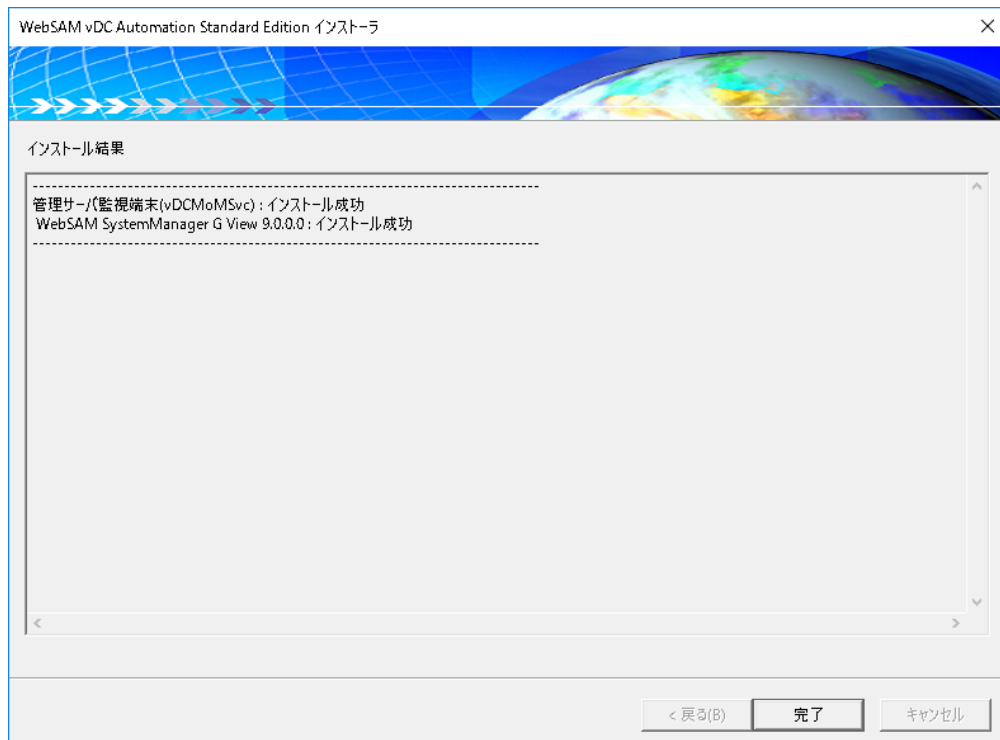
その他の機能も同時にインストールする指定をした場合は、[次へ(N)>]をクリックした後、それぞれの設定画面が表示されます。それぞれの設定画面については、各機能のインストール手順を参照してください。



10. 内容を確認し、[開始(S)]をクリックします。

11. 表示される確認のメッセージで[はい(Y)]をクリックします。

インストールが始まります。インストールが完了すると、「インストール終了」画面が表示され、インストール結果が表示されます。



12. [完了]をクリックします。

2.4.4 JobCenter CL/Win のインストール

本項の手順は、カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用する場合にのみ必要です。

JobCenter 連携を利用する構成では、管理サーバ監視端末で JobCenter をインストールします。

JobCenter CL/Win のインストール手順については、『JobCenter インストールガイド』の『2.5.1. 通常インストール』を参照してください。

設定項目名	設定値
言語	インストールする言語を設定します。 本書では日本語を指定してください。
インストールパス	インストール先フォルダを指定します。 既定値は C:\JobCenter\CLXX.YY となります。
プログラムフォルダ名	スタートメニューのプログラムに追加するフォルダを設定します。 既定値は JobCenter\CL XX.YY となります。
操作モード	JobCenter CL/Win を利用する際に、どのモードで利用するかを設定します。 本書では通常モードを指定してください。
ショートカットパス	JobCenter CL/Win の起動直後にどのウィンドウを利用するかを設定します。 本書では管理者/エンドユーザ用を指定してください。
ポート設定	JobCenter MG/SV と通信するためのプロトコルを設定します。

設定項目名	設定値
	既定値は標準です。*1
JCCOMBASE ポート	JobCenter MG/SV と通信するためのプロトコルを設定します。 既定値は 611 です。*1

*1 JobCenter のネットワーク環境の構築については、『JobCenter 環境構築ガイド』の『第2章 ネットワーク環境構築』を参照してください。

2.5 VM 監視サーバをインストールする

次項以降では、vDC Automation Standard Edition VM 監視サーバにコンポーネントをインストールする手順を説明します。

注

VM 監視サーバをインストール中断の状態で再度インストールを実行する場合は、事前に以下の順番でサービスを停止して行ってください。

またインストール後は手動にてサービスを起動してください。

- WebSAM UMF Operations Manager_103

注

WebSAM SystemManager G マネージャがインストールされている環境に VM 監視サーバを新規インストールする場合は、事前に WebSAM SystemManager G 9.0 にバージョンアップしてください。

注

WebSAM SystemManager マネージャがインストールされている環境に VM 監視サーバを新規インストールする場合は、事前に WebSAM SystemManager G 9.0 にバージョンアップしてください。バージョンアップは、カスタムモードから WebSAM SystemManager マネージャと同じサービスに WebSAM SystemManager G を追加することで行います。

2.5.1 VM 監視サーバに導入するコンポーネント

VM 監視サーバのシステム要件については、『vDC Automation ファーストステップガイド』の『第6章 動作環境／システム要件』を参照してください。

VM 監視サーバに導入するコンポーネントは以下の通りです。

- WebSAM SystemManager G Manager

2.5.2 Windows ファイアウォールの設定

VM 監視サーバにおいて Windows ファイアウォールの機能が有効な場合、VM 監視サーバが利用するポートを開く必要があります。いくつかのポートはインストール時に自動的に登録されますが、手動で登録が必要な項目もあります。

詳細は、以下のマニュアルを参照してください。

- 『SystemManager G マニュアル』

2.5.3 インストールを実行する前の注意

インストールを開始する前に、必ず使用しているアプリケーションおよび Web ブラウザをすべて終了してください。

Application Experience (AeLookupSvc) サービスのスタートアップの種類が [無効] に設定されている場合、エラーコード 65 にてインストールが失敗する場合があります。本エラーが発生する場合は、一旦 Application Experience (AeLookupSvc) サービスのスタートアップの種類を [手動] に変更し、インストールの後に、再度、Application Experience (AeLookupSvc) サービスのスタートアップの種類を [無効] に変更してください。

2.5.4 VM 監視サーバのインストール

1. vDCA/NWA インストール DVD を DVD ドライブに挿入します。
2. コマンドプロンプト、またはエクスプローラから以下のコマンドを実行し、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラを起動します。

```
> <インストール DVD>:\install\Windows\vDCAInst_SE.exe
```

3. インストーラが起動します。
4. [標準(T)]を選択し、[次へ(N)]をクリックします。
「インストール機能選択」画面が表示されます。
5. [VM 監視サーバ]チェックボックスにチェックを入れます。

VM 監視サーバをインストールするマシンには、[管理サーバ]および[管理対象マシン]以外の機能がインストールできます。その他の機能もインストールする場合は、チェックボックスにチェックを入れます。

6. [次へ(N)>]をクリックします。
[VM 監視サーバ設定(S)]画面が表示されます。

[illegible]

7. 必須項目を選択して[編集(E)]をクリックし値を設定します。設定する値については次の手順の表を参照してください。
8. 必要に応じて各設定項目を設定します。設定項目をクリックして[編集(E)]をクリックするか、または、設定項目をダブルクリックします。

選択した設定項目の設定画面が開きます。

設定項目名	設定値
インストール先フォルダ	インストール先フォルダを指定します。 既定値は C:\Program Files (x86)\NEC\VDCA\RM となります。 フォルダのパスは 55 文字以内で指定します。 *1
自ホスト名	VM 監視サーバのコンピュータ名を指定します。 既定値は省略形のマシン名（例：MANAGER）となります。 *2*4
エージェントとの通信ポート	管理対象マシンからの接続に利用する、マネージャ側のポート番号を指定します。 既定値は 12520 です。 *4
監視端末との通信ポート	VM 監視サーバ監視端末からの接続に利用する、マネージャ側のポート番号を指定します。 既定値は 12521 です。 *4
データ領域を別フォルダにする	No（既定値）を指定します。 *3*4
データ領域フォルダ	「データ領域を別フォルダにする」で Yes を選択した場合に指定することができます。 *3*4
初期データをインストールする	「データ領域を別フォルダにする」で Yes を選択した場合に指定することができます。 *3*4 既定値は Yes です。

設定項目名	設定値
WebConsoleOption 設定 - ホスト名	WebConsoleOption への接続に利用する、WebConsoleOption マネージャ側のホスト名を指定します。*2*5 未指定時は WebConsoleOption への接続設定を行いません。

*1 インストール先フォルダ/データ領域フォルダは、大文字と小文字も同じ文字として扱うので注意してください。インストール先フォルダ/データ領域フォルダに使用できない文字は以下になります。

\\/:*?"<>|;,&^

なお、\は区切り文字としては使用できます。

*2 「自ホスト名」と「WebConsoleOption 設定 - ホスト名」は、接続する他マシンから名前解決できることを確認してください。完全修飾ドメイン名(例: manager.domain.net.jp)や、IP アドレスを指定することを推奨します。クラスタ構成の場合は、フローティング IP アドレス、もしくは、仮想ホスト名を指定します。インストール後、「自ホスト名」は変更できません。変更したい場合は、再インストールする必要があります。

*3 クラスタ構成を取る場合は Yes を指定しますが、本書ではクラスタ構成については対象外としますので、No を指定します。

*4 WebSAM SystemManager G マネージャ がインストールされていない場合に指定することができます。

*5 WebSAM SystemManager G マネージャ と SystemManager G WebConsole Option との接続設定については、『WebSAM SystemManager G 9.0 WebConsole Option インストールガイド』の『3.4 マネージャから WebConsole Option への接続設定』を参照してください。

9. [次へ(N)>]をクリックします。

インストール設定の確認画面が表示されます。



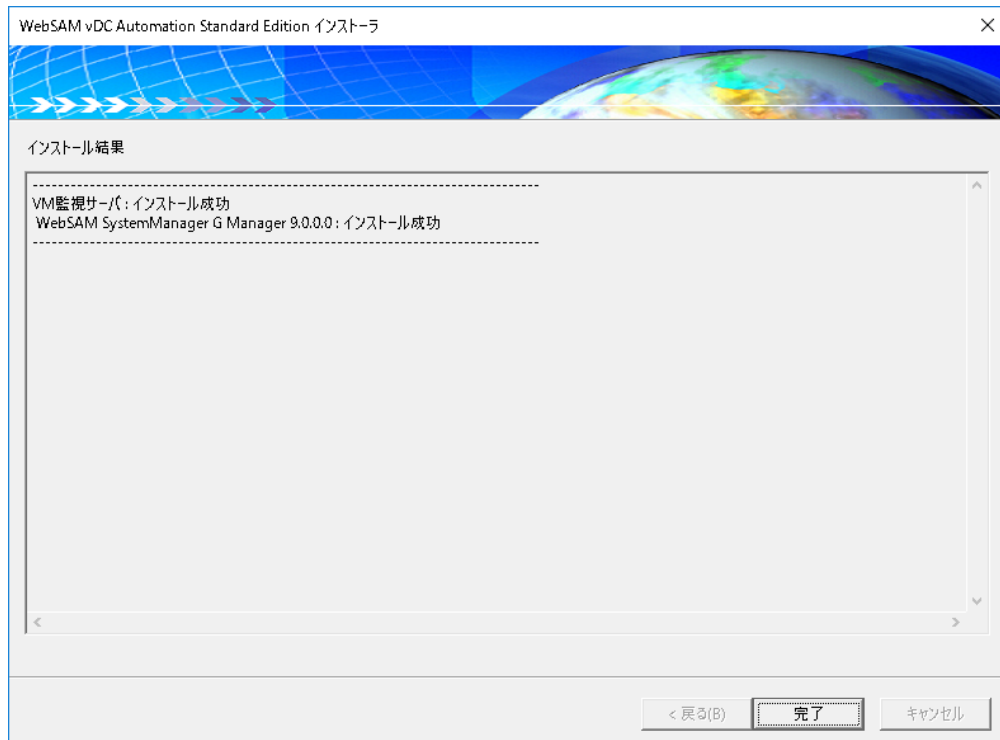
10. 内容を確認し、[開始(S)]をクリックします。

11. 表示される確認のメッセージで[はい(Y)]をクリックします。

インストールが始まります。

12. インストールが完了すると、「インストール終了」画面が表示され、インストール結果が表示されます。

WebSAM SystemManager G マネージャがインストール済みの場合、WebSAM SystemManager G マネージャのインストール結果は「スキップ」と表示されます。



13. [完了]をクリックします。
14. サーバを再起動します。
15. ライセンス登録、および、VM 監視サーバの設定を実施します。ライセンスの登録は、VM 監視サーバ監視端末のインストール後に行います。「[2.6 VM 監視サーバ監視端末をインストールする \(49 ページ\)](#)」を参照してください。管理サーバの設定は、「[2.12 VM 監視サーバの登録と設定 \(75 ページ\)](#)」を参照してください。

2.6 VM 監視サーバ監視端末をインストールする

次項以降では、vDC Automation Standard Edition VM 監視サーバ監視端末にコンポーネントをインストールする手順を説明します。

2.6.1 VM 監視サーバ監視端末に導入するコンポーネント

VM 監視サーバ監視端末に導入するコンポーネントは以下の通りです。

- WebSAM SystemManager G View

2.6.2 インストールを実行する前の注意

インストールを開始する前に、必ず使用しているアプリケーションおよび Web ブラウザをすべて終了してください。

Application Experience (AeLookupSvc) サービスのスタートアップの種類が [無効] に設定されている場合、エラーコード 65 にてインストールが失敗する場合があります。本エラーが発生する場合は、一旦 Application Experience (AeLookupSvc) サービスのスタートアップの種類を [手動] に変更し、インストールの後に、再度、Application Experience (AeLookupSvc) サービスのスタートアップの種類を [無効] に変更してください。

2.6.3 VM 監視サーバ監視端末のインストール

1. vDCA/NWA インストール DVD を DVD ドライブに挿入します。
2. コマンドプロンプト、またはエクスプローラから以下のコマンドを実行し、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラを起動します。

```
> <インストール DVD>:\install\Windows\vDCAInst_SE.exe
```

3. インストーラが起動します。
4. [標準(T)]を選択し、[次へ(N)]をクリックします。
「インストール機能選択」画面が表示されます。
5. [VM 監視サーバ監視端末]チェックボックスにチェックを入れます。
VM 監視サーバ監視端末をインストールするマシンには、[管理対象マシン]以外の機能がインストールできます。その他の機能もインストールする場合は、チェックボックスにチェックを入れます。
6. [次へ(N)>]をクリックします。
[VM 監視サーバ監視端末設定(S)]画面が表示されます。



7. 必須項目を選択して[編集(E)]をクリックし値を設定します。設定する値については次の手順の表を参照してください。

[追加(A)]ボタンをクリックして VM 監視サーバ監視端末を複数インストールすることができます。新規追加した VM 監視サーバ監視端末を一覧から削除する場合は、[削除(D)]ボタンをクリックします。

8. 必要に応じて各設定項目を設定します。設定項目をクリックして[編集(E)]をクリックするか、または、設定項目をダブルクリックします。

選択した設定項目の設定画面が開きます。

設定項目名	設定値
インストール先フォルダ	インストール先フォルダを指定します。 既定値は C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\RMView となります。 フォルダのパスは 55 文字以内で指定します。*1
VM 監視サーバのホスト名	VM 監視サーバの IP アドレスまたはホスト名を指定します。*2
VM 監視サーバ通信ポート	VM 監視サーバの構成で[監視端末との通信ポート]に指定したポート番号を指定します。 既定値は 12521 です。
サービス識別子	複数インストールした監視端末を区別する識別子です。

*1 インストール先フォルダ/データ領域フォルダは、大文字と小文字も同じ文字として扱うので注意してください。インストール先フォルダ/データ領域フォルダに使用できない文字は以下になります。

\\/:*?"<>|;, & ^

なお、\は区切り文字としては使用できます。

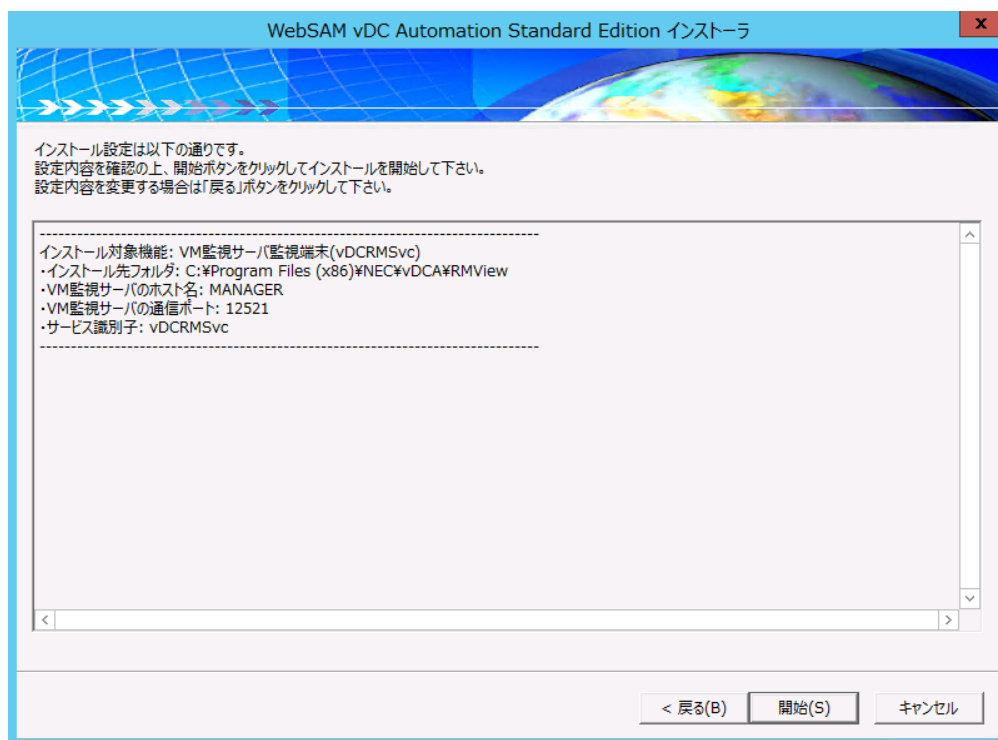
- *2 ホスト名で指定する場合は、名前解決できることを確認してください。
- *3 サービス識別子は、大文字と小文字も同じ文字として扱うので注意してください。
サービス識別子に使用できない文字は以下になります。
△!"#\$%&'()*+,-./:;<=>?@[`\'^`{}~※△は半角スペース

9. [次へ(N)>]をクリックします。

インストール設定の確認画面が表示されます。

注

その他の機能も同時にインストールする指定をした場合は、[次へ(N)>]をクリックした後、それぞれの設定画面が表示されます。それぞれの設定画面については、各機能のインストール手順を参照してください。

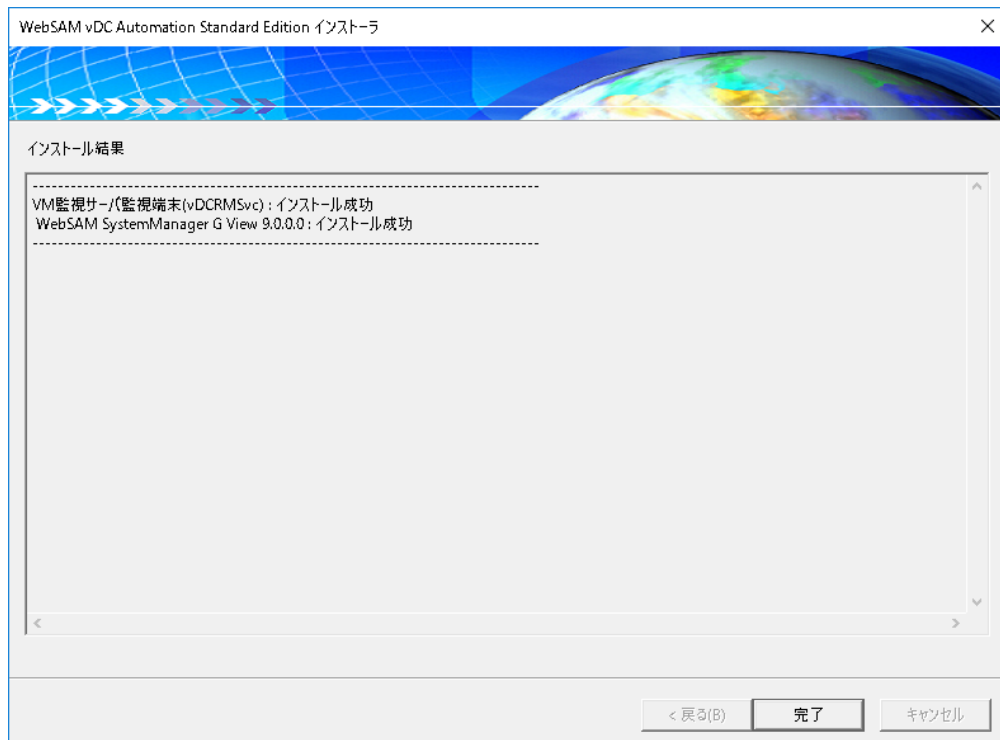


10. 内容を確認し、[開始(S)]をクリックします。

11. 表示される確認のメッセージで[はい(Y)]をクリックします。

インストールが始まります。

12. インストールが完了すると、「インストール終了」画面が表示され、インストール結果が表示されます。



13. [完了]をクリックします。

2.7 スタック管理サーバをインストールする

次項以降では、スタック管理サーバにコンポーネントをインストールする手順を説明します。

なお、本節の手順は vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプションを使用する構成の場合のみ必要です。

コンポーネントをインストールする前に、以下に示す準備を実施してください。

- 事前にインストールが必要なソフトウェア「[2.2 事前にインストールが必要なソフトウェア \(7 ページ\)](#)」
- ファイアウォールの設定

2.7.1 スタック管理サーバに導入するコンポーネント

スタック管理サーバのシステム要件については『vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプション 利用ガイド』の『第1章 動作環境』を参照してください。

スタック管理サーバに導入するコンポーネントは以下の通りです。

- SSC リソースプラグイン

2.7.2 事前にインストールが必要なソフトウェア

スタック管理サーバのコンポーネントのインストールを開始する前に、以下のソフトウェアのインストールが必要です。

- MySQL
- OpenStack
 - Identity Service (keystone)
 - Orchestration Service (heat)
- RabbitMQ

『vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプション 利用ガイド』の『2.1 事前に準備が必要なソフトウェアのインストール』を参照し、インストールを行ってください。

2.7.3 ファイアウォールの設定

スタック管理サーバにおいてファイアウォール機能が有効な場合、管理サーバが利用するポートを開く必要があります。事前にインストールが必要なソフトウェアのインストールを以下のマニュアルにて記載する支援スクリプトを使用して行った場合には、自動的に開放されます。

詳細は『vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプション 利用ガイド』の『第2章インストール』を参照してください。

2.7.4 スタック管理サーバのインストール

スタック管理サーバのインストール手順については、『vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプション 利用ガイド』の『2.2 SSC リソースプラグインのインストール』参照してください。

2.8 管理対象マシンをインストールする

次項以降では、管理対象マシンにコンポーネントをインストールする手順を説明します。それぞれの仮想基盤において導入するコンポーネントについて説明します。

注

- 以降の表にてオプションと記載されているコンポーネントは、vDC Automation Standard Edition の利用する機能範囲において、必須ではありません。固有の機能を利用したい場合は、インストールしてください。
- DPM クライアント、SystemManager G エージェントは、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラで管理対象マシンをインストールすることにより利用できます。

2.8.1 VMware ESXi 仮想基盤

VMware ESXi 仮想基盤を利用する場合は、以下のコンポーネントをインストールします。

管理対象マシン	ESMPRO/ServerAgent	DPM クライアント	SystemManager G エージェント
VMware ESXi 仮想基盤	不要	不要	不要
Windows 管理対象マシン (仮想マシン)	オプション	必要	必要
Linux 管理対象マシン (仮想マシン)	オプション	必要	必要

2.8.2 Hyper-V 仮想基盤

Hyper-V 仮想基盤を利用する場合は、以下のコンポーネントをインストールします。

管理対象マシン	ESMPRO/ServerAgent	DPM クライアント	SystemManager G エージェント
Hyper-V 仮想基盤	オプション	オプション	不要
Windows 管理対象マシン (仮想マシン)	オプション	必要	必要

2.8.3 KVM 仮想基盤

KVM 仮想基盤を利用する場合は、以下のコンポーネントをインストールします。

管理対象マシン	ESMPRO/ServerAgent	DPM クライアント	SystemManager G エージェント
KVM 仮想基盤	必要	必要	不要
Linux 管理対象マシン (仮想マシン)	オプション	必要	必要

2.9 管理対象マシン（Windows）をインストールする

2.9.1 事前にインストールが必要なソフトウェア

管理対象マシンのコンポーネントのインストールを開始する前に、必要に応じて、以下のソフトウェアのインストールが必要です。

- ESMPRO/ServerAgent

「[2.2 事前にインストールが必要なソフトウェア（7 ページ）](#)」の手順を参照して、インストールしてください。

2.9.2 インストールを実行する前の注意

インストールを開始する前に、必ず使用しているアプリケーションおよび Web ブラウザをすべて終了してください。

Application Experience (AeLookupSvc) サービスのスタートアップの種類が [無効] に設定されている場合、エラーコード 65 にてインストールが失敗する場合があります。本エラーが発生する場合は、一旦 Application Experience (AeLookupSvc) サービスのスタートアップの種類を [手動] に変更し、インストールの後に、再度、Application Experience (AeLookupSvc) サービスのスタートアップの種類を [無効] に変更してください。

2.9.3 管理対象マシン（Windows）のインストール

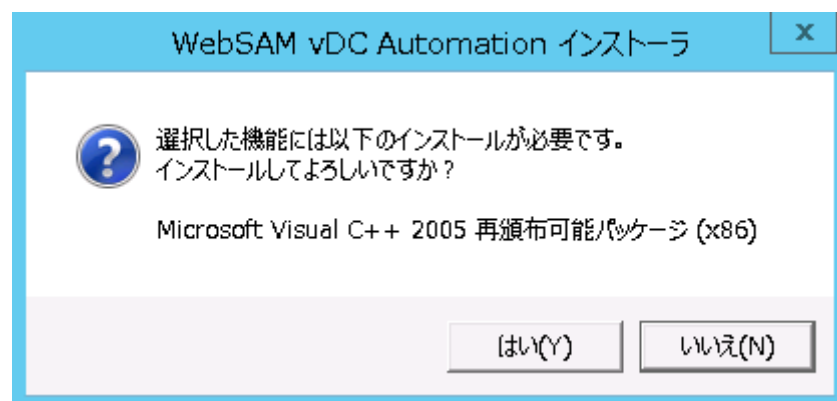
1. vDCA/NWA インストール DVD を DVD ドライブに挿入します。
2. コマンドプロンプト、またはエクスプローラから以下のコマンドを実行し、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラを起動します。

```
> <インストール DVD>:\install\Windows\vDCAInst_SE.exe
```

3. インストーラが起動します。
4. [標準(T)]を選択し、[次へ(N)]をクリックします。
「インストール機能選択」画面が表示されます。
5. [管理対象マシン]チェックボックスにチェックを入れます。
6. [次へ(N)>]をクリックします。

[管理対象マシン設定(S)]画面が表示されます。

実行する環境によっては「Microsoft Visual C++ 2005 SP1 再頒布可能パッケージ(x86)」のインストールが必要な場合があります。画面に従って「Microsoft Visual C++ 2005 SP1 再頒布可能パッケージ(x86)」をインストールしてください。



設定項目名	設定値
インストール先フォルダ	C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\Agent
テンプレート/イメージ	Yes
自ホスト名	Yes
マネージャのホスト名	12520
マネージャとの通信ポート	25570
エージェント内部通信ポート	No
テナントID	Yes
新規インストール時にサービスを起動する	No
DeploymentManagerクライアントをインストールする	Yes
DeploymentManager設定 - 管理サーバIPアドレス	

必須項目が未設定のものは赤字で表示されます。

編集(E)...

< 戻る(B) 次へ(N) キャンセル

7. 必須項目を選択して[編集(E)]をクリックし値を設定します。設定する値については次の手順の表を参照してください。
8. 必要に応じて各設定項目を設定します。設定項目をクリックして[編集(E)]をクリックするか、または、設定項目をダブルクリックします。

選択した設定項目の設定画面が開きます。

設定項目名	設定値
インストール先フォルダ	インストール先フォルダを指定します。 既定値は C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\Agent となります。 フォルダのパスは 55 文字以内で指定します。*1
テンプレート/イメージ	管理対象マシンのマシン種別を指定します。 既定値は Yes です。仮想マシンテンプレートを作成する場合は Yes を指定します。
自ホスト名	管理対象マシンのコンピュータ名を指定します。 既定値は省略形のマシン名（例：AGENT）となります。 *2*3 新規インストール時に「テンプレート/イメージ」で No を選択した場合、末尾に _UUID が自動的に設定されます。 UUID の値は「インストール設定確認」画面で確認できます。
マネージャのホスト名	上位マネージャの IP アドレスまたはホスト名を指定します。 *2*3
マネージャとの通信ポート	管理サーバの構成で[エージェントとの通信ポート]、VM 監視サーバの構成で[エージェントとの通信ポート]に指定したポート番号を指定します。 既定値は 12520 です。

設定項目名	設定値
エージェント内部通信用ポート	エージェント内部通信用のポート番号を指定します。 既定値は 25570 です。
テナント ID	管理対象マシンを所属させるテナントのテナント ID を指定します*3
新規インストール時にサービスを起動する	新規インストール後に、SystemManager G エージェントのサービス (WebSAM UMF Operations Agent_104) を起動するかどうかを指定します。 「テンプレート/イメージ」で No を選択した場合の既定値は Yes です。*3*4
DeploymentManager クライアントをインストールする	DeploymentManager クライアントをインストールするかどうかを指定します。 既定値は Yes (インストールする) です。
DeploymentManager 設定 - 管理サーバ IP アドレス	DeploymentManager 管理サーバの IP アドレス (xxx.xxx.xxx.xxx 形式) を指定します。*5*6

*1 インストール先フォルダ/データ領域フォルダは、大文字と小文字も同じ文字として扱うので注意してください。インストール先フォルダ/データ領域フォルダに使用できない文字は以下になります。

\\: * ? " < > | ; , & ^

なお、\ は区切り文字としては使用できます。

*2 「自ホスト名」と「マネージャのホスト名」は、接続する他マシンから名前解決できることを確認してください。完全修飾ドメイン名(例: manager.domain.net.jp)や、IP アドレスを指定することを推奨します。

*3 「テンプレート/イメージ」で No を選択した場合に指定することができます。

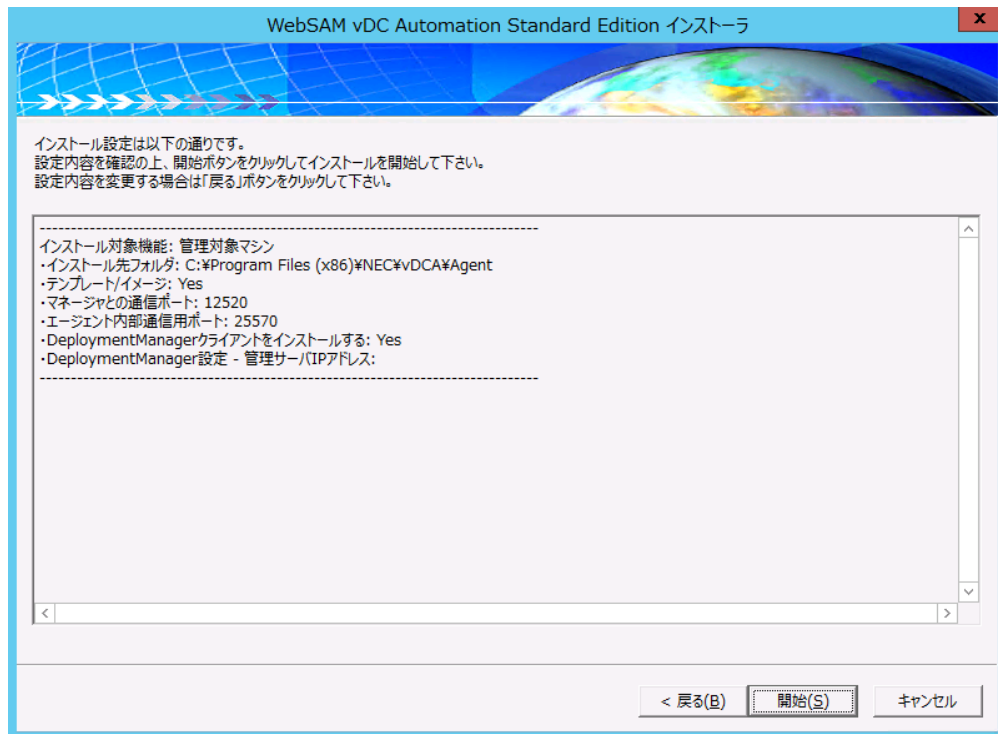
*4 上書きインストールの際は、本設定は有効になりません。上書きインストール実行前のサービス状態を維持します。

*5 入力を省略した場合、インストール完了後、自動的に管理サーバを検索します。

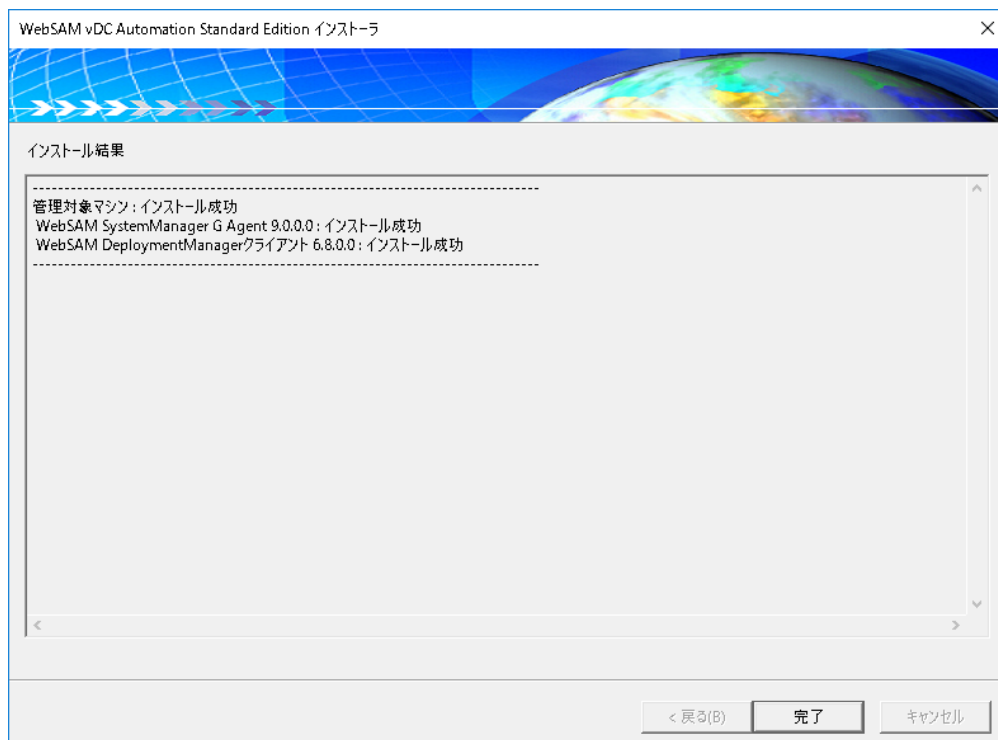
*6 「DeploymentManager クライアントをインストールする」で Yes を選択した場合に指定することができます。

9. [次へ(N)>]をクリックします。

「インストール設定確認」画面が表示されます。



10. 内容を確認し、[開始(S)]をクリックします。
11. 表示される確認のメッセージで[はい(Y)]をクリックします。
インストールが始まります。
12. インストールが完了すると、「インストール終了」画面が表示され、インストール結果が表示されます。



13. [完了]をクリックします。

14. 管理対象マシンの設定を実施します。管理対象マシンの設定は、「[2.14 管理対象マシンの設定 \(78 ページ\)](#)」を参照してください。

2.10 管理対象マシン (Linux) をインストールする

2.10.1 事前にインストールが必要なソフトウェア

管理対象マシンのコンポーネントのインストールを開始する前に、必要に応じて、以下のソフトウェアのインストールが必要です。

- ESMPRO/ServerAgent

「[2.2 事前にインストールが必要なソフトウェア \(7 ページ\)](#)」の手順を参照して、インストールしてください。

注

『vDC Automation ファーストステップガイド』の『付録 C. 管理対象ゲスト OS にインストールするパッケージ』を参照し、必須パッケージおよびライブラリをインストールしてください。必須パッケージがインストールされていない場合は、正常に動作しません。

2.10.2 インストールを実行する前の注意

実行する環境によっては、vDCA/NWA インストール DVD 上のファイルに実行権限がないため、実行できない場合があります。

このような場合、以下に示すコマンドを実行して vDCA/NWA インストール DVD の fw/Linux ディレクトリ、Install/Linux ディレクトリをハードディスクの任意のディレクトリ配下にコピーし、`chmod` コマンドですべてのファイルの実行権限を与えてから `install/Linux/vDCAInst_SE.sh` を起動してください。

```
# mkdir -p /tmp/media
# cd /mnt/dvd
# tar cvf - ./fw/Linux | (cd /tmp/media; tar vxf -)
# tar cvf - ./install/Linux | (cd /tmp/media; tar vxf -)
# tar cvf - ./ssc | (cd /tmp/media; tar vxf -)
# cd /tmp/media
# chmod 755 -R .
# cd ./install/Linux
# ./vDCAInst_SE.sh
```

2.10.3 管理対象マシン (Linux) のインストール

管理対象マシン (Linux) のコンポーネントをインストールする手順を説明します。

1. root アカウントでシステムにログインします。
2. vDCA/NWA インストール DVD を DVD ドライブに挿入します。

3. 以下のコマンドを実行し、DVD をマウントします。

この例では、マウントポイントを「mnt/dvd」としています。

```
# mount /mnt/dvd
```

4. カレントディレクトリを変更します。

```
# cd /mnt/dvd/install/Linux
```

5. vDCAInst_SE.sh を実行します。

```
# ./vDCAInst_SE.sh
```

6. vDC Automation Standard Edition 統合インストーラが起動し、以下のような画面が表示されます。

注

インストール画面が乱れる場合、環境変数 TERM を vt100 に設定してインストーラを起動しなおしてください。また、必要に応じて端末の表示サイズを拡大してください。

```
*****
vDC Automation Standard Edition Installer
*****

Welcome to vDC Automation Standard Edition installer.

1. Typical : installs all products necessary to the function type
              of WebSAM vDC Automation you select. (Recommendation)

2. Custom : allows you to install the necessary products to the
              function type of WebSAM vDC Automation separately.

Please select the operation.
(1:Typical 2:Custom q:quit program):
```

- 1[Enter]を入力します。

```
(1:Typical 2:Custom q:quit program):1
```

7. 引き続き vDC Automation Standard Edition 統合インストーラの以下のような画面が表示されます。

```
*****
Welcome to WebSAM vDC Automation !!
*****

This program will install/uninstall products.

1. Install
```

```
Please select the operation.
(1:install q:quit program):
```

1[Enter]を入力します。

```
(1:install q:quit program):1
```

8. インストール可能なコンポーネントの一覧が表示されます。

```
-----
Products
-----

1  [ ]  WebSAM  vDC  Automation  Standard  Edition  Managed  machine
components 7.0.0.0

-----

Please select product(s) by entering numbers separated by commas.
[Example: 1, 3, 4]
(b:back q:quit program):
```

以下の通り、WebSAM vDC Automation Standard Edition Managed machine components 7.0.0.0 を選択します。

```
(b:back q:quit program):1
```

9. インストールするコンポーネントの確認画面が表示されます。

```
-----
Confirmation
-----

1  [*]  WebSAM  vDC  Automation  Standard  Edition  Managed  machine
components 7.0.0.0

-----

These product(s) will be installed, OK to continue?
(default:y y:yes n:no q:quit program):
```

y[Enter]を入力して続行します。

```
(default:y y:yes n:no q:quit program):y
```

10. インストールするコンポーネントの構成設定画面が表示されます。

```
-----
Installation settings
-----

Other
(*)1  WebSAM  vDC  Automation  Standard  Edition  Managed  machine
components 7.0.0.0
    2 New Product
```

```

-----
(*) marked products or services objects require specific settings
before
installation.
-----

Please select operation to perform from following commands.
[Example: 's1' configure settings for first service listed above.]

(r[n.n]:remove s[n]:setting v[n]:view c:clear b:back q:quit program):

```

[Agent]-[Service1]の設定を行うため、「s1」を入力します。

```

(r[n.n]:remove s[n]:setting v[n]:view c:clear b:back q:quit
program):s1

```

11. 設定項目毎に入力を促されます。以下の通り設定します。

設定項目名	設定値
Install directory path	インストール先ディレクトリをフルパスで指定します。 既定値は /opt/NEC/vDCA/Agent です。 ディレクトリパスは 123 文字以内で指定します。 *1
Template/Image	管理対象マシンのマシン種別を指定します。 既定値は [y] (Yes) です。仮想マシンテンプレートを作成する場合は Yes を指定します。
Self hostname	管理対象マシンのコンピュータ名を指定します。入力を省略すると、ホスト名（例：agent.domain.net.jp）が自動的に設定されます。 *2*3 新規インストール時に指定した文字数が 26 文字以下の場合、末尾に _UUID が自動的に設定されます。UUID の値は設定内容表示画面で確認できます。
Manager hostname	上位マネージャの IP アドレスまたはホスト名を指定します。 *2*3
Manager port	管理サーバの構成で[エージェントとの通信ポート]、VM 監視サーバの構成で[エージェントとの通信ポート]に指定したポート番号を指定します。 既定値は 12520 となります。
Port for Agent Internal Communication	エージェント内部通信用のポート番号を指定します。 既定値は 25570 となります。
Tenant ID	管理対象マシンを所属させるテナントのテナント ID を指定します *3
Start service	新規インストール時に[WebSAM SystemManager G Agent]のサービス（WebSAM UMF Operations Agent_104）を起動するかどうかを指定します。 既定値は [y] (Yes) です。 *3*4
(Optional) Install DPM Client	DeploymentManager クライアントをインストールするかどうかを指定します。 既定値は [y] (Yes) です。
(Optional) IP address of the DPM management server	DeploymentManager 管理サーバの IP アドレス（xxx.xxx.xxx.xxx 形式）を指定します。 *5*6

- *1 [Install directory path]には日本語などマルチバイト文字を入力しないでください。使用できる文字は区切り文字の / に加えて以下になります。
半角英数字 . _ - + ,
- *2 「Self hostname」と「Manager hostname」は名前解決できることを確認してください。完全修飾形 (FQDN) (例: manager.domain.net.jp)や、IP アドレスを指定することを推奨します。
- *3 「Template/Image」で[y]を指定した場合、入力画面は表示されません。
- *4 上書きインストールの際は、本設定は有効になりません。上書きインストール前のサービス状態を維持します。
- *5 入力を省略した場合、インストール完了後、自動的に管理サーバを検索します。
- *6 「(Optional) Install DPM Client」で[n]を指定した場合、入力画面は表示されません。

12. すべての設定項目の入力が完了すると設定内容が表示されます。

「Self hostname」の長さが 26 文字以内の場合、__UUID が自動的に設定されます。

```

-----
Confirmation
-----
Install directory path: /opt/NEC/vDCA/Agent
Template/Image: No
Self hostname: redhat56.localdomain__UUID
Manager hostname: <マネージャホスト名>
Manager port: 12520
Port for Agent Internal Communication: 25570
Tenant ID: <テナント ID>
Start service: Yes
(Optional) Install DPM Client: Yes
(Optional) IP address of the DPM management server:

-----

Are these settings correct?
(default:y y:yes n:no q:quit program):

```

設定内容に問題がないことを確認して、y[Enter]を入力します。

```
(default:y y:yes n:no q:quit program):y
```

13. インストールするコンポーネントの構成設定画面に戻ります。

e[Enter]を入力します。

```
(a[n]:add r[n.n]:remove s[n]:setting v[n]:view c:clear b:back
e:execute q:quit program):e
```

14. インストール確認画面が表示されます。

```

-----
Final confirmation
-----

Other
  1 WebSAM vDC Automation Standard Edition Managed machine components

```

```
7.0.0.0
```

```
-----
Is it OK to start installation?
(default:y y:yes n:no q:quit program):
```

y[Enter]を入力します。

```
(default:y y:yes n:no q:quit program):y
```

15. インストール状況が表示され、最後にインストール結果が表示されます。エラーが発生していないことを確認します。

```
WebSAM vDC Automation Standard Edition Managed machine components
7.0.0.0 Preparing for Installation (1/1)
WebSAM vDC Automation Standard Edition Managed machine components
7.0.0.0 Installation in progress (1/1)
Check rcfile
```

```
=====
Installation of WebSAM SystemManager G Agent was successful.
=====
```

```
WebSAM vDC Automation Standard Edition Managed machine components
7.0.0.0 was successfully installed (1/1)
```

```
-----
Installation result
-----
```

```
1 WebSAM vDC Automation Standard Edition Managed machine components
7.0.0.0 (Success)
```

```
-----
Success:1, Failure:0
```

注

インストールエラーが発生した場合は、インストール途中のメッセージに

"Installation of <製品名> was failure.[エラー番号]"

が表示されます。本メッセージが表示されていないことを確認してください。

16. 管理対象マシンの設定を実施します。管理対象マシンの設定は、「[2.14 管理対象マシンの設定 \(78 ページ\)](#)」を参照してください。

2.11 管理サーバの登録と設定

本節では、管理サーバのコンポーネントをインストールした後に実施するライセンス登録、および、管理サーバの設定を説明します。

2.11.1 SigmaSystemCenter 機能へのライセンス登録

WebSAM vDC Automation Standard Edition では、WebSAM SigmaSystemCenter のライセンスを別途購入する必要があります。

事前に SSC のライセンスを購入していただき、ライセンスの登録を実施してください。

なお、SigmaSystemCenter のすべての機能が利用できる評価用ライセンスがデフォルトで登録されており、60 日間有効です。

1. SystemProvisioning Web Console を起動します。

[スタート]メニューより、[SigmaSystemCenter]-[SystemProvisioning Web Console]を起動します。Web ブラウザが起動し、SigmaSystemCenter のログイン画面が表示されます。

2. ユーザ名とパスワードを入力し、[ログイン]をクリックします。

初期状態ではユーザ名「admin」、パスワード「admin」でログインすることができます。

3. [管理]をクリックします。

4. [ライセンス]をクリックします。

5. SigmaSystemCenter インストール時に登録されているライセンスキーを削除します。

6. [ライセンスキー]に購入したライセンスキーを入力します。

7. [追加]をクリックします。

8. 以下のサービスを再起動します。

- PVMService

2.11.2 SystemManager G 機能へのライセンス登録

WebSAM vDC Automation Standard Edition では、WebSAM SystemManager G のライセンスを別途購入する必要があります。

事前に SystemManager G のライセンスを購入していただき、ライセンスの登録を実施してください。

なお、管理サーバを新規インストールした場合、トライアル版ライセンスがデフォルトで登録されており、3 ヶ月間有効です。

1. 管理サーバ監視端末を起動します

デスクトップまたはスタートメニューに作成されたショートカット「WebSAM SystemManager G Console__vDCMoMSvc」を実行します。

2. 「ログイン」画面が表示されます。以下の通り初期設定されているパスワードで管理者としてログインしてください。

- ログイン名: Administrator
- パスワード: websam

3. プルダウンメニューより[設定(S)]-[定義モード(C)]をクリックして、定義モードに切り替えます。
4. プルダウンメニューより[設定(S)]-[ライセンス管理(L)]をクリックします。
5. 「ライセンス管理」画面が表示されます。[製品型番]タブで、[追加(A)]をクリックします。
6. 「ライセンスキーの登録」画面が表示されます。購入した「製品型番」と「ライセンスキー」を入力します。
7. [登録]をクリックします。
8. 「申請コード」に表示される文字列を控えて、[閉じる]をクリックします。
9. 次に、インストール時に登録されているトライアル版ライセンスを削除します。
[製品型番]タブで、「トライアル版ライセンスキー」と表示されているライセンスを指定し、[削除(D)]をクリックします。確認のダイアログが表示されますので、[はい(Y)]をクリックします。
10. [OK]をクリックします。
11. 管理サーバ監視端末を終了します。
12. 以下のサービスを再起動します。

- WebSAM UMF Operations Manager_102

以上でライセンスキーの登録は完了ですが、登録したライセンスキーは次節で説明する「コードワード」を登録しない場合、1ヶ月で有効期限が切れてしまいます。購入したSystemManager G のライセンスについて、コードワードの申請を行ってください。

2.11.3 SystemManager G 機能へのコードワード登録

SystemManager G 機能へ登録したライセンスキーのコードワードを入手後、以下の手順でコードワード登録を行います。

1. 管理サーバ監視端末を起動し、ログインします。
デスクトップまたはスタートメニューに作成されたショートカット「WebSAM SystemManager G Console__vDCMoMSvc」を実行します。
2. プルダウンメニューより[設定(S)]-[定義モード(C)]をクリックして、定義モードに切り替えます。
3. プルダウンメニューより[設定(S)]-[ライセンス管理(L)]をクリックします。
4. [製品型番]タブで、SystemManager G のライセンスを選択し、[登録(R)]をクリックします。
5. 「コードワード」に送付されてきたコードワードを入力します。
6. [登録]をクリックします。

2.11.4 vDC Automation Standard Edition ポータルの設定

『vDC Automation Standard Edition ポータル利用者マニュアル（インストール編）』の『第5章 インストール後の設定』を参照し、設定を行ってください。

2.11.5 SigmaSystemCenter との接続の設定

リソース管理機能を使用する場合、SigmaSystemCenter と接続するため、『vDC Automation Standard Edition ポータル利用者マニュアル（インストール編）』の『4.1 SigmaSystemCenter の設定』を参照し、設定を行ってください。

1. 『4.1.1 接続設定』

vDC Automation Standard Edition 統合インストーラにより以下の内容で自動設定されます。

- ホスト名 : localhost
- ポート番号 : 26105

2. 『4.1.2 IIS の証明書作成とバインド設定』

構築自動化コマンド(後処理)が正常終了している場合、本手順は不要です。

構築自動化コマンドについては、『[2.2.2 構築自動化コマンド（8 ページ）](#)』を参照してください。

3. 『4.1.3 SigmaSystemCenter API キーの取得と設定』

vDC Automation Standard Edition 統合インストーラにより自動設定されます。

自動設定された内容を確認する場合は、以下のコマンドの実行結果と、

```
> ssc apikey show CloudPortal
UserName : CloudPortal
Description : Portal for SigmaSystemCenter
AccessKeyId : [AccessKeyId]
SecretAccessKey : [SecretAccessKey]
```

実行終了 コード:0

設定ファイル (C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\MoM\FW\Tomcat\conf\NEC\webframework.properties)内の以下の key の設定値を参照してください。

- product.cloudportal.provider.ssc.access.key.id
- product.cloudportal.provider.ssc.secret.access.key

2.11.6 Service Governor WebAPI Base Option との接続の設定

監視機能を使用する場合、vDC Automation Service Governor WebAPI Base Option と接続するため、『vDC Automation Standard Edition ポータル利用者マニュアル（インストール編）』の『4.2 ServiceGovernor との接続設定』を参照し、設定を行ってください。

1. 『4.2.1 接続設定』

vDC Automation Standard Edition 統合インストーラにより以下の内容で自動設定されます。

- プロトコル：インストール時に選択した設定
ポータルとサービスガバナの接続プロトコル(http または https)
- ホスト名：localhost
- ポート番号：インストール時に設定したポート番号
アプリケーションサーバ設定 - HTTP(HTTPS)ポート(既定は 12080(12443))

2. 『4.2.2 ServiceGovernor API キーの取得と設定』

vDC Automation Standard Edition 統合インストーラにより自動設定されます。

自動設定された内容を確認する場合は、以下のコマンドの実行結果と、

```
> cd "<インストール先フォルダ>\Tools"
> WebApiTool.bat showkey cloudportal

-----
UserName : cloudportal
Description : Portal for WebAPI Base Option
AccessKeyId : [AccessKeyId]
SecretAccessKey : [SecretAccessKey]
-----

NORMAL END.

command exit code:0
COMMAND SUCCEEDED.
```

設定ファイル (C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\MoM\FW\Tomcat\conf\NEC\webframework.properties)内の以下のkeyの設定値を参照してください。

- product.cloudportal.service.monitoring.provider.webapibase.access.key.id
- product.cloudportal.service.monitoring.provider.webapibase.secret.access.key

2.11.7 JobCenter との接続の設定

カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用する場合、JobCenter と接続するため『JobCenter Web 機能利用の手引き』の『5.2. ブラウザで CL/Web サーバにアクセスする』および『5.3. ログイン・ログアウト』を参照し、JobCenter にログインしたのち、『6.4.3.2.

API アクセスキーの参照方法』および『2.5. バージョンの確認方法』を参照し、設定を行ってください。

(アプリケーションサーバのインストール先ディレクトリ) \Tomcat\conf\NEC\webframework.properties に、以下の項目を設定します。

```
product.cloudportal.generic.operation.implementation =
com.nec.jp.websam.cloudportal.workflow.jobcenter.JobCenterRequestProvider
```

```
product.cloudportal.generic.operation.jobcenter.url = <https://< CL/Web
サーバのホスト名または IP アドレス>/>
```

```
product.cloudportal.generic.operation.jobcenter.accesskey = <アクセス先の
JobCenter の API アクセスキー>
```

```
product.cloudportal.generic.operation.jobcenter.version = <アクセス先の
JobCenter のバージョン>
```

2.11.8 SystemManager G との接続の設定

監視機能を使用する場合、vDC Automation SystemManager G と接続するため、『vDC Automation Service Governor WebAPI Base Option インストレーションガイド』の『第3章 WebAPI Base Option の設定』を参照し、設定を行ってください。

1. 『3.2 マネージャの SSL/TLS 設定』
2. 『3.3 マネージャ追加時の設定』

2.11.9 Tomcat の SSL/TLS 設定

管理サーバインストール時(『2.3.8 管理サーバのインストール (32 ページ)』)に以下の設定を行った場合は、Tomcat の SSL/TLS 設定が必要となります。

- ・ ポータルとサービスガバナの接続プロトコル：https

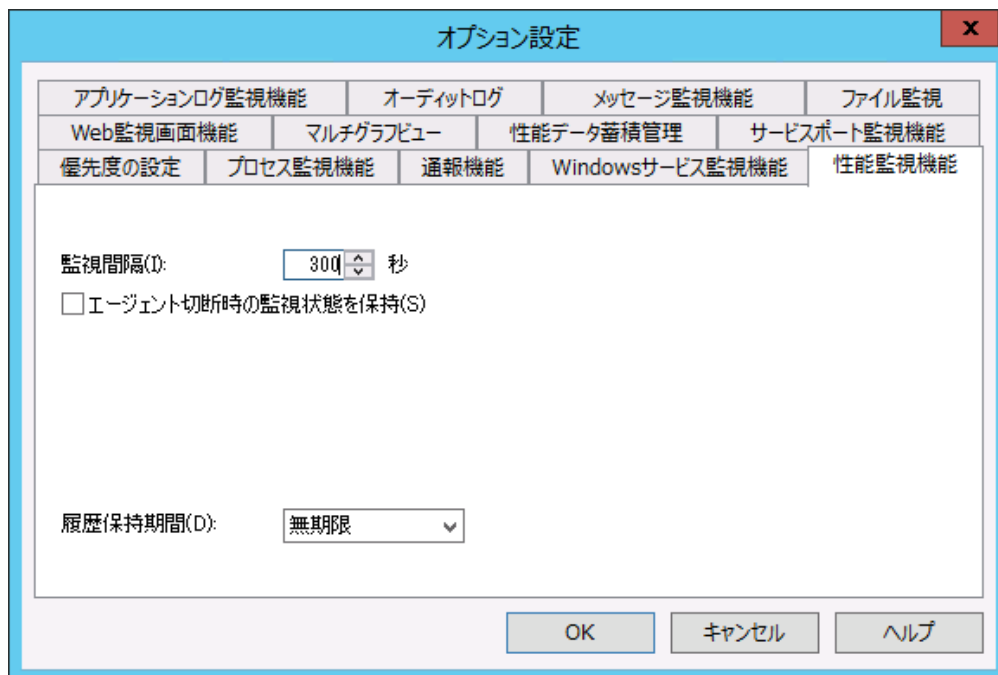
『vDC Automation Service Governor WebAPI Base Option インストレーションガイド』の『第3章 WebAPI Base Option の設定』を参照し、設定を行ってください。

1. 『3.5 Tomcat の SSL/TLS 設定』
2. 『3.5.1 証明書のインポート』
3. 『3.5.2 Tomcat の設定を変更』
4. 『3.5.3 env.bat の変更』
5. 『3.5.4 サービスの再起動』
6. 『3.6 Tomcat の設定を変更したら』

2.11.10 SystemManager G 機能の初期設定

管理対象マシンの監視を行うための初期設定として、性能監視機能の設定を行います。設定は管理サーバ監視端末上で実施します。

1. 管理サーバ監視端末を起動するため、デスクトップに作成されたショートカット「WebSAM SystemManager G Console__vDCMoMSvc」を実行します。
2. 「ログイン」画面が表示されます。以下の通り、初期設定されているパスワードで管理者としてログインしてください。
 - ログイン名: Administrator
 - パスワード: websam
3. プルダウンメニューより[設定(S)]-[定義モード(C)]をクリックして、定義モードに切り替えます。
4. プルダウンメニューの[設定(S)]-[オプション(O)]をクリックします。
5. [性能監視機能]のタブを選択します。
6. [監視間隔(I)]の値として 300 秒を指定します。



ヒント

設定値を変更する場合は『WebSAM SystemManager G マニュアル(ヘルプファイル)』の『性能監視のオプションを設定する』を参照し、監視間隔を決定してください。

7. [OK]をクリックします。

2.11.11 監視設定の事前インポート

プロビジョニングする VM に対する監視定義を事前に設定することで、プロビジョニングされたエージェントがマネージャに接続した際に自動で監視定義を適用し、監視を開始できます。設定は、SystemManager G の画面から以下の流れで行います。

1. 事前準備

初めて VM を生成する前に SystemManager G のトポロジビューに[Automation]グループを作成する必要があります。以下のマネージャの設定ファイルを編集し、マネージャを再起動することで[Automation]グループを生成することができます。

vDC Automation Standard Edition 統合インストーラにより自動設定されます。

- <インストールフォルダ>\Manager\sg\SysMonMgr.ini

以下の通り、[SelfNode]セクションに「Automation=1」の形式で記述します。

```
[SelfNode]
Automation=1
```

2. 監視定義の準備

インポートする監視定義は、任意のエージェントに設定された定義をエクスポートすることで作成できます。エージェントへ定義を設定後、SystemManager G マニュアルの[エージェント監視定義をエクスポートし定義ファイルを作成する]を参照し、定義ファイルを作成してください。監視定義の詳細については、SystemManager G マニュアルの[エージェントを監視する]を参照してください。

注

監視定義にアプリケーションログ監視、イベントログ監視、シスログ監視のフィルタ設定が含まれる場合、他のエージェントでも利用可能な定義ファイルとなるよう、表示定義のノード名をインポート先のエージェント名に変換する置換文字「\$NODE\$」に設定してからエクスポートしてください。本設定を行わない場合、メッセージのノードの値がメッセージ発生元のエージェント名とならないため、メッセージが正しく監視できません。

フィルタ項目設定

フィルタ定義 表示定義 オプション定義

重要度(S): 正常

カテゴリ(C): Application

ノード(N): \$NODE\$

アプリケーション(A): test

オブジェクト(O): ApLogMonitor

メッセージID(I): 0000

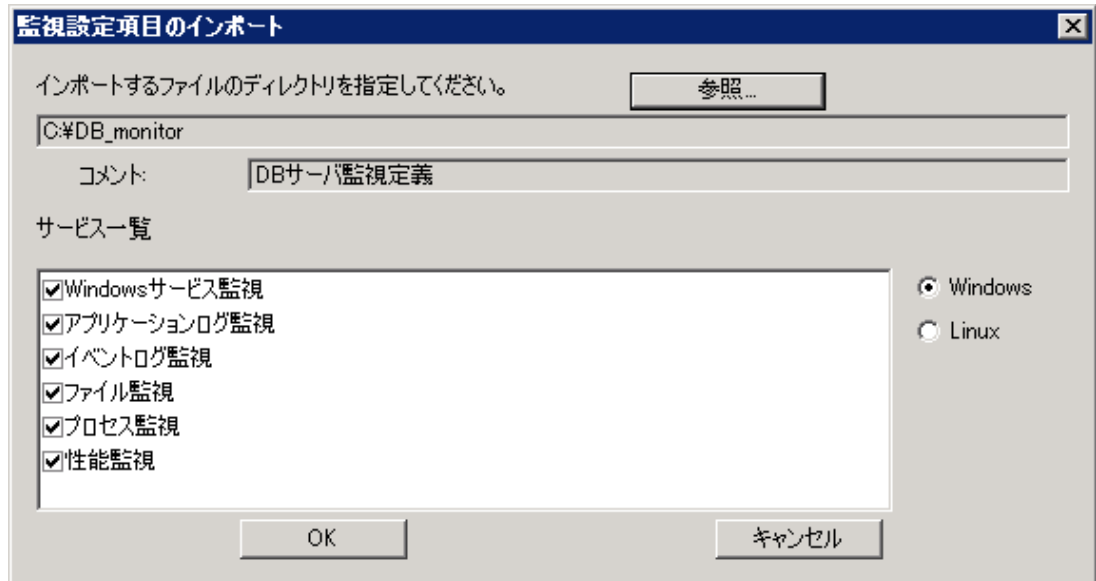
OK キャンセル

3. 監視定義のインポート

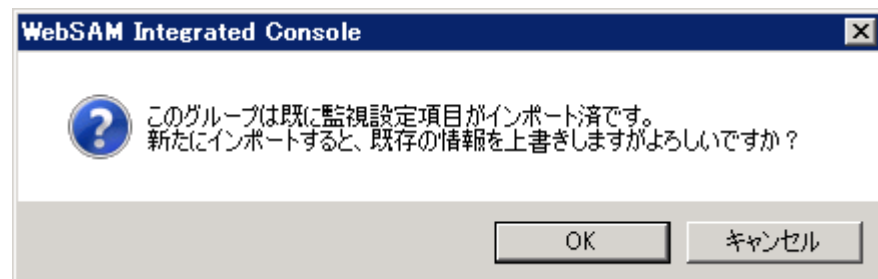
- a. SystemManager G の監視端末を起動します。

デスクトップまたはスタートメニューに作成されたショートカット「WebSAM SystemManager G Console__vDCMoMSvc」を実行します。

- b. プルダウンメニューより[設定(S)]-[定義モード(C)]をクリックして、定義モードに切り替えます。
- c. 左ペインのトポロジビューで[Automation]グループノード右クリックして表示されるショートカットメニューで[監視設定のインポート]を選択します。
- d. 「監視設定項目のインポート」画面の[参照]をクリックして表示される画面で、エクスポートした定義ファイルの存在するディレクトリを指定します。
- e. インポート可能なサービスの一覧が表示されますので、インポートするサービスにチェックを入れます。
- f. インポートファイルに合わせて OS 種別 (Windows または Linux) を選択し、[OK]をクリックします。OS 種別 (Windows または Linux) それぞれについて同様の設定をしてください。



同一の OS 種別に監視定義が既にインポートされている場合、以下のような上書き確認が表示されます。[OK]を押すと現在の定義にインポートの内容が上書きされます。[キャンセル]を押すと上書きせず、現在の定義が残ります。



各グループには、Windows エージェント用、Linux エージェント用の二種類の監視定義がインポートできます。

注

- インポートの実施後、対象グループを[Automation]グループ外へ移動するとインポートした監視定義は削除されます。
- インポート対象のグループにエージェントが配置されている場合、エージェントへ監視定義が適用されます。

4. 監視定義の適用

プロビジョニングされたエージェントは、マネージャへ接続後、[Automation]グループ配下のテナントグループに配置されます。配置先のテナントグループに監視定義がインポートされている場合、グループ内に配置されたエージェントに監視定義が適用されます。

注

- 配置先のグループに監視定義がインポートされていない場合、親グループに監視定義が存在するか探索します。[Automation]グループまで探索した結果、監視定義が存在すればその定義が適用されます。

- グループおよび親グループの両方に監視定義がインポートされている場合、子グループの監視定義が優先して適用されます。
- 監視定義のインポート時に指定した OS 種別とエージェントの OS が異なる場合、監視定義は適用されません。
- エージェントを移動した場合、移動先グループあるいは親グループの監視定義が適用されます。

2.12 VM 監視サーバの登録と設定

本節では、vDC Automation Standard Edition VM 監視サーバのコンポーネントをインストールした後に実施するライセンス登録、および、VM 監視サーバの設定を説明します。

2.12.1 SystemManager G へのライセンス登録

WebSAM vDC Automation Standard Edition では、WebSAM SystemManager G のライセンスを別途購入する必要があります。

事前に SystemManager のライセンスを購入していただき、ライセンスの登録を実施してください。

なお、VM 監視サーバを新規インストールした場合、トライアル版ライセンスがデフォルトで登録されており、3 ヶ月間有効です。

1. VM 監視サーバ監視端末を起動します

デスクトップまたはスタートメニューに作成されたショートカット「WebSAM SystemManager G Console__vDCRMSvc」を実行します。

2. 「ログイン」画面が表示されます。以下の通り初期設定されているパスワードで管理者としてログインしてください。

- ログイン名: Administrator
- パスワード: websam

3. プルダウンメニューより[設定(S)]-[定義モード(C)]をクリックして、定義モードに切り替えます。

4. プルダウンメニューより[設定(S)]-[ライセンス管理(L)]をクリックします。

5. 「ライセンス管理」画面が表示されます。[製品型番]タブで、[追加(A)]をクリックします。

6. 「ライセンスキーの登録」画面が表示されます。購入した「製品型番」と「ライセンスキー」を入力します。

7. [登録]をクリックします。

8. 「申請コード」に表示される文字列を控えて、[閉じる]をクリックします。

9. 次に、インストール時に登録されているトライアル版ライセンスを削除します。

[製品型番]タブで、「トライアル版ライセンスキー」と表示されているライセンスを指定し、[削除(D)]をクリックします。確認のダイアログが表示されますので、[はい(Y)]をクリックします。

10. [OK]をクリックします。

11. VM 監視サーバ監視端末を終了します。

12. 以下のサービスを再起動します。

- WebSAM UMF Operations Manager_103

以上でライセンスキーの登録は完了ですが、登録したライセンスキーは次節で説明する「コードワード」を登録しない場合、1 ヶ月で有効期限が切れてしまいます。購入した SystemManager G のライセンスについて、コードワードの申請を行ってください。

2.12.2 SystemManager G 機能へのコードワード登録

SystemManager G 機能へ登録したライセンスキーのコードワードを入手後、以下の手順でコードワード登録を行います。

1. 管理サーバ監視端末を起動し、ログインします。

デスクトップまたはスタートメニューに作成されたショートカット「WebSAM SystemManager G Console__vDCRMSvc」を実行します。

2. プルダウンメニューより[設定(S)]-[定義モード(C)]をクリックして、定義モードに切り替えます。

3. プルダウンメニューより[設定(S)]-[ライセンス管理(L)]をクリックします。

4. [製品型番]タブで、SystemManager G のライセンスを選択し、[登録(R)]をクリックします。

5. 「コードワード」に送付されてきたコードワードを入力します。

6. [登録]をクリックします。

2.12.3 SystemManager G 機能の初期設定

管理対象マシンの監視を行うための初期設定として、性能監視機能の設定を行います。設定は VM 監視サーバ監視端末上で実施します。

手順は、「[2.11.10 SystemManager G 機能の初期設定 \(71 ページ\)](#)」を参照してください。

2.12.4 監視設定の事前インポート

プロビジョニングする VM に対する監視定義を事前に設定することで、プロビジョニングされたエージェントがマネージャに接続した際に自動で監視定義を適用し、監視を開始できます。設定は、SystemManager G の画面から行います。

手順は、「[2.11.11 監視設定の事前インポート \(72 ページ\)](#)」を参照してください。

2.13 スタック管理サーバの登録と設定

本節では、スタック管理サーバのコンポーネントをインストールした後に実施するライセンス登録を説明します。

なお、本節の手順は vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプションを使用する構成の場合のみ必要です。

2.13.1 vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプション 機能へのライセンス登録

vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプションを使用する場合は、ライセンスを別途購入する必要があります。

事前に vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプションのライセンスを購入していただき、ライセンスの登録を実施してください。

ライセンスの登録については、『vDC Automation Standard Edition ポータル利用者マニュアル (リソース管理編) トポロジテンプレートオーケストレータオプション』の『第 11 章 vDCA SE トポロジテンプレートオーケストレータオプションの運用設定』を参照し、vDCA SE トポロジテンプレートオーケストレータオプションの有効化を行ってください。

2.13.2 SigmaSystemCenter との接続の設定

SigmaSystemCenter と接続するため、『vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプション利用ガイド』の『3.2.1 SigmaSystemCenter との接続設定』を参照し、設定を行ってください。

2.13.3 SystemManager G との接続の設定

監視機能を使用する場合、SystemManager G と接続するため、『vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプション利用ガイド』の『3.3.1 WebSAM SystemManager との接続設定』を参照し、設定を行ってください。

2.13.4 OpenStack の SSL/TLS 設定

管理サーバとスタック管理サーバ間を SSL/TLS で接続する場合は、OpenStack の SSL/TLS 設定が必要となります。『vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストラオプション利用ガイド』の『2.3 SSL 通信を行う場合の設定』を参照し、設定を行ってください。

2.14 管理対象マシンの設定

本節では、vDC Automation Standard Edition 管理対象マシンのコンポーネントをインストールした後に実施する管理対象マシンの設定を説明します。

2.14.1 管理対象マシンの VM テンプレートの作成

管理対象マシンにコンポーネントをインストールした後、必要に応じて Windows のマスタ VM および Linux のマスタ VM を VM テンプレートにします。

VM テンプレートを作成する前に以下の設定を行い、SystemManager G エージェントの自動起動設定を変更してください。

- Windows

1. Administrator アカウントでマスタ VM のシステムにログインします。
2. インストールした SystemManager G エージェントのサービスを停止します。

以下のサービスが実行中の場合は停止してください。

- WebSAM UMF Operations Agent_104

3. SytemManager G エージェントのサービスの「スタートアップの種類」が「自動」になっている場合は「手動」に変更します。

- Linux

1. root アカウントでマスタ VM のシステムにログインします。
2. インストールした SystemManager G エージェントのサービスを停止します。

以下のサービスが実行中の場合は停止してください。

- /etc/init.d/UMFOperationsAgent_104

3. SytemManager G エージェントの自動起動設定を削除します。

init によりシステム制御されている OS の場合

```
# chkconfig --del UMFOperationsAgent_104
```

Red Hat Enterprise Linux 7.1 等、systemd によりシステム制御されている OS の場合

```
# systemctl disable UMFOperationsAgent_104
```

VM テンプレート作成については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』を参照してください。

2.15 サイレントインストールコマンド(Windows)

サイレントインストールコマンドを使用すると、画面操作を行うことなく、コマンドラインから統合インストーラを実行し、各機能をインストールすることができます。

次項以降では、サイレントインストールコマンドで各機能をインストールする手順を説明します。

2.15.1 サイレントインストールコマンドの構成

サイレントインストールコマンド(Windows)の構成は以下の通りです。

インストール DVD:install\Windows

ファイル名	概要
vDCASilentInst_SE.bat	vDC Automation Standard Edition サイレントインストールコマンド

インストール DVD:script\SilentInstall\Windows\SE

ファイル名	概要
SilentInstall_MoM.ini	vDC Automation Standard Edition 管理サーバをインストールする際に使用するサイレントインストール設定ファイルのサンプル 設定項目および設定値については、「 2.3.8 管理サーバのインストール (32 ページ) 」を参照してください。
SilentInstall_MoMSVC.ini	vDC Automation Standard Edition 管理サーバ監視端末をインストールする際に使用するサイレントインストール設定ファイルのサンプル 設定項目および設定値については、「 2.4.3 管理サーバ監視端末のインストール (41 ページ) 」を参照してください。
SilentInstall_RM.ini	vDC Automation Standard Edition VM 監視サーバをインストールする際に使用するサイレントインストール設定ファイルのサンプル 設定項目および設定値については、「 2.5.4 VM 監視サーバのインストール (46 ページ) 」を参照してください。
SilentInstall_RMSVC.ini	vDC Automation Standard Edition VM 監視サーバ監視端末をインストールする際に使用するサイレントインストール設定ファイルのサンプル 設定項目および設定値については、「 2.6.3 VM 監視サーバ監視端末のインストール (50 ページ) 」を参照してください。
SilentInstall_AG_TMPIMG_Yes.ini	vDC Automation Standard Edition 管理対象マシン(Windows)をテンプレート/イメージ=Yes の設定でインストールする際に使用するサイレントインストール設定ファイルのサンプル 設定項目および設定値については、「 2.9.3 管理対象マシン(Windows) のインストール (56 ページ) 」を参照してください。

ファイル名	概要
SilentInstall_AG_TMPIMG_No.ini	vDC Automation Standard Edition 管理対象マシン(Windows)をテンプレート/イメージ=No の設定でインストールする際に使用するサイレントインストール設定ファイルのサンプル 設定項目および設定値については、「 2.9.3 管理対象マシン(Windows) のインストール (56 ページ) 」を参照してください。

注

サイレントインストール設定ファイルの文字コードは Shift-JIS、改行文字は CR+LF で指定してください。

2.15.2 サイレントインストールコマンドの使用条件

サイレントインストールコマンドを使用するには、以下の条件を満たしている必要があります。

- 各機能をインストールする前に必要となるソフトウェアをインストールしてください。
- 各機能をインストールする前に必要となる設定を実施してください。
- サイレントインストールコマンドは、Administrator 権限を持つユーザで実行してください。

注

各機能をインストールする前に必要となるソフトウェアおよび設定については、「[2.2 事前にインストールが必要なソフトウェア \(7 ページ\)](#)」および各機能の該当する節を参照してください。

2.15.3 サイレントインストール設定ファイルの編集

- 「[2.15.1 サイレントインストールコマンドの構成 \(79 ページ\)](#)」に記載したサイレントインストール設定ファイルのサンプルを任意の場所にコピーします。
- サイレントインストール設定ファイルの各項目を環境に合わせて変更します。
設定項目および設定値については、各機能の該当する項を参照してください。

2.15.4 サイレントインストールコマンドの実行

- サイレントインストール設定ファイルの内容が正しいか確認するため、-v オプションを指定して、サイレントインストールコマンドを確認モードで実行します。

```
> vDCASilentInst_SE.bat "サイレントインストール設定ファイル" -v
```

注

- サイレントインストール設定ファイルは絶対パスで指定してください。
- ファイル名に空白を含む場合、" (ダブルクォート) で囲ってください。

2. サイレントインストール設定ファイルの内容が正しい場合、インストール設定の確認画面が表示されます。

確認画面が表示されない場合、メッセージの内容に従い、サイレントインストール設定ファイルを修正してください。

例：管理サーバの場合

```

-----
インストール対象機能： 管理サーバ
・インストール先フォルダ： C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\MoM
・監視機能を利用する： Yes
・自ホスト名： MOM MANAGER
・エージェントとの通信ポート： 12520
・監視端末との通信ポート： 12521
・データ領域を別フォルダにする： No
・アプリケーションサーバ種別： Tomcat
・アプリケーションサーバ設定 - HTTP ポート： 12080
・アプリケーションサーバ設定 - HTTPS ポート： 12443
・Tomcat 設定 - 管理ポート： 12005
・Tomcat 設定 - AJP/1.3 ポート： 12009
・ポータルとサービスガバナの接続プロトコル： http
・ポータル設定 - データベース種別： SQL Server
・ポータル設定 - SQL Server のホスト名： localhost
・ポータル設定 - SQL Server のインスタンス名： FWCMDDB
・ポータル設定 - SQL Server のポート番号： 1433
・WebConsoleOption 設定 - ホスト名： localhost
・WebConsoleOption 設定 - データディレクトリ： C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\MoM\WebConsoleOption\data
・WebConsoleOption 設定 - API Gateway のホスト名： localhost
・WebConsoleOption 設定 - API Gateway のポート番号： 22522
・WebConsoleOption 設定 - データベースのホスト名： localhost
・WebConsoleOption 設定 - データベースのポート番号： 5432
・リソース管理機能を利用する： Yes
・リソース管理機能設定 - データベース種別： SQL Server
・ESMPRO/ServerManager 設定 - アドミニストレータ名： admin
・DeploymentManager 設定 - 管理サーバ IP アドレス：
-----

```

3. 内容を確認し、サイレントインストールコマンドを実行します。

```
> vDCASilentInst_SE.bat "サイレントインストール設定ファイル"
```

4. インストールが始まり、インストール実行状況画面が表示されます。インストールが完了すると、インストール結果が表示されます。

```

管理サーバの WebSAM SystemManager G Manager をインストール中です。
管理サーバの WebSAM SystemManager G Manager の後処理 1 (監視設定の事前インポート)
を実施しています。
管理サーバの WebSAM SystemManager G Manager の後処理 2 (WebConsoleOption への
接続設定) を実施しています。
管理サーバの Application Server をインストール中です。
管理サーバの WebSAM vDC Automation Service Governor WebAPI Base Option を

```

```

インストール中です。
管理サーバの WebSAM vDC Automation Portal をインストール中です。
管理サーバの WebSAM vDC Automation Portal の後処理 1 (ポータルとの接続設定) を実
施しています。
管 理 サ ー バ の WebSAM vDC Automation Portal の 後 処 理 2 ( ポ ー タ ル と
ServiceGovernor の接続設定) を実施しています。
管理サーバの WebSAM vDC Automation Portal の後処理 3 (WebAPI Base Option 認
証キー設定) を実施しています。
管理サーバの SystemManager G WebConsole Option をインストール中です。
管理サーバの WebSAM SigmaSystemCenter をインストール中です。
管理サーバの WebSAM SigmaSystemCenter の後処理 1 (ポータルと SSC の接続設定) を実
施しています。
管理サーバの WebSAM SigmaSystemCenter の後処理 2 (SSC API キーの取得と設定) を実
施しています。
管理サーバの WebSAM UMF Operations Manager_102 サービスを開始しています。
-----
-----

```

管理サーバ : インストール成功

```

WebSAM SystemManager G Manager 9.0.0.0 : インストール成功
Application Server 8.5.51.0 : インストール成功
WebSAM vDC Automation Service Governor WebAPI Base Option 3.29.0.0 :
インストール成功
WebSAM vDC Automation Portal 7.0.0.0 : インストール成功
SystemManager G WebConsole Option 9.0.0.0 : インストール成功
WebSAM SigmaSystemCenter 3.9.0.0 : インストール成功
-----
-----

```

インストールを完了するにはシステムの再起動が必要です。
インストール後の設定を完了後、システムを再起動して下さい。

- 再起動のメッセージが表示された場合、サーバを再起動します。

2.15.5 サイレントインストールコマンドの結果確認

インストールが成功した場合、サイレントインストールコマンドの戻り値は 0 です。

インストールが失敗した場合、サイレントインストールコマンドの戻り値は 0 以外です。

エラーの内容、原因、対処は以下の通りです。

戻り値	内容	原因 / 対処
1	内部エラー	「 5.2.4 障害情報を採取する (128 ページ) 」の手順で障害情報を採取し、お問い合わせ窓口までご相談ください。
2	引数不正	引数が正しくありません。正しい引数を指定しているかご確認ください。
3	二重起動エラー	インストーラが二重に起動されました。他でインストール操作が行われていないかをご確認ください。
4	サイレントインストール設定ファイル不正	サイレントインストール設定ファイルの記載内容が正しくありません。設定ファイルの内容をご確認ください。
5	機能インストール済みのためインストール不可	機能やコンポーネントがインストール済みのため、インストールすることができません。

戻り値	内容	原因 / 対処
6	インストール失敗	全コンポーネントのインストールに失敗しています。エラー原因を取り除き、再度インストールを行ってください。
7	インストール中断	一部のコンポーネントのインストールに失敗し、中断状態となっています。エラー原因を取り除き、再度インストールを行ってください。

2.16 サイレントインストールコマンド(Linux)

サイレントインストールコマンドを使用すると、画面操作を行うことなく、コマンドラインから統合インストーラを実行し、管理対象マシンをインストールすることができます。

次項以降では、サイレントインストールコマンドで管理対象マシンをインストールする手順を説明します。

2.16.1 サイレントインストールコマンドの構成

サイレントインストールコマンド(Linux)の構成は以下の通りです。

インストール DVD:install\Linux

ファイル名	概要
Setup_SE	vDC Automation Standard Edition サイレントインストールコマンド

インストール DVD:script\SilentInstall\Linux

ファイル名	概要
SilentInstall_AG_TMPIMG_Yes.ini	vDC Automation Standard Edition 管理対象マシン(Linux)をテンプレート/イメージ=Yes の設定でインストールする際に使用するサイレントインストール設定ファイルのサンプル 設定項目および設定値については、「 2.10.3 管理対象マシン (Linux) のインストール (60 ページ) 」を参照してください。
SilentInstall_AG_TMPIMG_No.ini	vDC Automation Standard Edition 管理対象マシン(Linux)をテンプレート/イメージ=No の設定でインストールする際に使用するサイレントインストール設定ファイルのサンプル 設定項目および設定値については、「 2.10.3 管理対象マシン (Linux) のインストール (60 ページ) 」を参照してください。
SilentUnInstall_AG.ini	vDC Automation Standard Edition 管理対象マシン(Linux)をアンインストールする際に使用するサイレントインストール設定ファイルのサンプル

注

サイレントインストール設定ファイルの文字コードは UTF-8、改行文字は LF で指定してください。

2.16.2 サイレントインストールコマンドの使用条件

サイレントインストールコマンドを使用するには、以下の条件を満たしている必要があります。

- ・ 各機能をインストールする前に必要となるソフトウェアをインストールしてください。
- ・ 各機能をインストールする前に必要となる設定を実施してください。
- ・ サイレントインストールコマンドは、**root** アカウントで実行してください。

注

各機能をインストールする前に必要となるソフトウェアおよび設定については、「[2.2 事前にインストールが必要なソフトウェア \(7 ページ\)](#)」、「[2.10.1 事前にインストールが必要なソフトウェア \(60 ページ\)](#)」、「[2.10.2 インストールを実行する前の注意 \(60 ページ\)](#)」を参照してください。

2.16.3 サイレントインストール設定ファイルの編集

1. 「[2.16.1 サイレントインストールコマンドの構成 \(83 ページ\)](#)」に記載したサイレントインストール設定ファイルのサンプルを任意の場所にコピーします。
2. サイレントインストール設定ファイルの各項目を環境に合わせて変更します。
設定項目および設定値については、各機能の該当する項を参照してください。

2.16.4 サイレントインストールコマンドの実行

1. サイレントインストール設定ファイルの内容が正しいか確認するため、**-v** オプションを指定して、サイレントインストールコマンドを確認モードで実行します。

```
# Setup_SE -silent -f "サイレントインストール設定ファイル" -v
```

注

- ・ サイレントインストール設定ファイルは絶対パスで指定してください。
 - ・ ファイル名に空白を含む場合、" (ダブルクォート) で囲ってください。
2. サイレントインストール設定ファイルの内容が正しい場合、インストール設定の確認画面が表示されます。

確認画面が表示されない場合、メッセージの内容に従い、サイレントインストール設定ファイルを修正してください。

```
-----
Confirmation
-----
Install directory path: /opt/NEC/vDCA/Agent
Template/Image: Yes
Self hostname:
```

```

Manager hostname:
Manager port: 12520
Port for Agent Internal Communication: 25570
Tenant ID:
Start service: No
(Optional) Install DPM Client: Yes
(Optional) IP address of the DPM management server:

```

3. 内容を確認し、サイレントインストールコマンドを実行します。

```
# Setup_SE -silent -f "サイレントインストール設定ファイル"
```

4. インストールが始まります。インストールが完了すると、インストール結果が表示されます。

```

-----
Confirmation
-----
Install directory path: /opt/NEC/vDCA/Agent
Template/Image: Yes
Self hostname:
Manager hostname:
Manager port: 12520
Port for Agent Internal Communication: 25570
Tenant ID:
Start service: No
(Optional) Install DPM Client: Yes
(Optional) IP address of the DPM management server:

WebSAM vDC Automation Standard Edition Managed machine components
7.0.0.0 Preparing for Installation (1/1)
WebSAM vDC Automation Standard Edition Managed machine components
7.0.0.0 Installation in progress (1/1)

=====
  Installation of WebSAM SystemManager G Agent was successful.
  Installation of DeploymentManager Client was successful.
=====

WebSAM vDC Automation Standard Edition Managed machine components
7.0.0.0 was successfully installed (1/1)

-----
Installation result
-----
1 WebSAM vDC Automation Standard Edition Managed machine components
7.0.0.0 (Success)
-----
Success:1, Failure:0

```

2.16.5 サイレントインストールコマンドの結果確認

インストールが成功した場合、サイレントインストールコマンドの戻り値は0です。

インストールが失敗した場合、サイレントインストールコマンドの戻り値は0以外です。
エラーの内容、原因、対処は以下の通りです。

戻り値	内容	原因 / 対処
1	警告	インストーラが使用する一時ディレクトリの削除に失敗しています。インストール自体は成功しています。
2	ユーザ権限エラー、二重起動エラー	実行ユーザの権限が正しくないか、インストーラが二重に起動されました。ユーザの権限および他でインストール操作が行われていないかをご確認ください。
3	引数不正	引数が正しくありません。正しい引数を指定しているかご確認ください。
4	サイレントインストール設定ファイル不正	サイレントインストール設定ファイルの記載内容が正しくありません。設定ファイルの内容をご確認ください。
5	機能インストール済みのためインストール不可	機能やコンポーネントがインストール済みのため、インストールすることができません。
6	インストール失敗	全コンポーネントのインストールに失敗しています。エラー原因を取り除き、再度インストールを行ってください。
7	インストール中断	一部のコンポーネントのインストールに失敗し、中断状態となっています。エラー原因を取り除き、再度インストールを行ってください。

第3章

インストール後の基本設定

本章では、vDC Automation Standard Edition をインストールした後、「リソース管理機能」および「監視機能」を利用するための基本的な設定について説明します。

目次

3.1 リソース管理機能.....	88
3.2 監視機能	102

3.1 リソース管理機能

3.1.1 SigmaSystemCenter に関連製品を登録する

vDC Automation Standard Edition と関連製品を連携するために、関連製品を SigmaSystemCenter に登録します。登録する関連製品には、次のものがあります。

- 仮想化基盤(VMware vCenter Server, Hyper-V クラスタ,KVM)
- ストレージ機器(iStorage, VNX, NetApp)

また、vDC Automation Standard Edition のコンポーネントを SigmaSystemCenter に登録します。登録するコンポーネントには、次のものがあります。

- DeploymentManager

本節の手順に従って、利用する関連製品を SigmaSystemCenter に登録してください。

ヒント

関連製品の登録に関する情報については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『4.2 サブシステムを追加する』を参照してください。

3.1.1.1 仮想化基盤を SigmaSystemCenter に登録するには

仮想化基盤製品を SigmaSystemCenter に登録します。

- VMware vCenter Server を登録する場合
 1. [管理] ビューの[管理] ツリーから [サブシステム] をクリックし、[設定] メニューから [サブシステム追加] をクリックします。
 2. [サブシステム種類] プルダウンボックスから [VMware vCenter Server] を選択します。
 3. [ホスト名]、[アカウント名]、[パスワード]を入力します。その他のテキストボックスは空欄で構いません。

注

ポート番号を省略した場合の既定値は (443) です。

ヒント

登録方法の詳細については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『4.2.1 VMware vCenter Server をサブシステムに追加するには』を参照してください。

- Hyper-V クラスタを登録する場合
 1. [管理] ビューの[管理] ツリーから [サブシステム] をクリックし、[設定] メニューから [サブシステム追加] をクリックします。
 2. [サブシステム種類] プルダウンボックスから [Hyper-V Cluster] を選択します。

3. [ホスト名]、[ドメイン名\アカウント名]、[パスワード]を入力します。

注

[ドメイン名\アカウント名] には、Hyper-V クラスタに接続するための アカウントのドメイン名とアカウント名をバックスラッシュで区切って入力します。

ヒント

登録方法の詳細については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『4.2.3 Hyper-V クラスタをサブシステムに追加するには』を参照してください。

- KVM を登録する場合
 1. [仮想] ビューの[仮想] ツリーから [仮想] をクリックし、[設定] メニューから [KVM を管理する] をクリックします。
 2. 確認メッセージが表示されたら[OK]をクリックします。

ヒント

登録方法の詳細については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『4.3 ESXi、Hyper-V、KVM を管理する』を参照してください。

3.1.1.2 ストレージ機器を SigmaSystemCenter に登録するには

下記の通りに、ストレージの事前設定を行い、続いてサブシステムの登録とディスクアレイの登録を行います。

1. ストレージの事前設定を行う

SigmaSystemCenter とストレージ機器を連携するにあたり、管理サーバ上で次の設定を行います。

- iStorage の場合

管理サーバにおいて WebSAM iStorageManager Integration Base の SG ファイルを設定します。

- a. C:\Program Files (x86)\NEC\iSMSM\conf\iSMSM.sample を、iSMSM.conf というファイル名で同じフォルダ上にコピーします。
- b. iSMSM.conf をテキストエディタで開き、iSMsvr_addr に iStorageManager の IP アドレスを設定します。

設定例：

```
[iSMSM]
iSMSM_mode=API
[server]
#iSMsvr_addr=xxx.xxx.xxx.xxx or hostname
iSMsvr_addr=192.168.1.1
#iSMsvr_port=8020
```

c. 「Integration Base」サービスを再起動します。

- VNX または CLARiX の場合

管理サーバに VNX の管理ソフトウェアである Navisphere CLI をインストールし、Navisphere CLI のパスを環境変数 PATH に追加します。

- NetApp の場合

管理サーバ上で実施する作業はありません。

ヒント

設定内容の詳細については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『3.5.1 各ストレージの事前設定を行う』を参照してください。

2. ストレージをサブシステム登録する

次の通りにストレージ管理サーバを SigmaSystemCenter にサブシステムとして登録します。

- a. [管理] ビューの[管理] ツリーから [サブシステム] をクリックし、[設定] メニューから [サブシステム追加] をクリックします。
- b. ストレージの種類に従って [iStorage Manager]、[EMC CLARiX]、[NetApp Manager]のいずれかを選択します。

ヒント

登録方法の詳細については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『4.2.9 ストレージ管理サーバをサブシステムに追加するには』を参照してください。

3. ディスクアレイを登録する

次の通りに SigmaSystemCenter にディスクアレイを登録します。

- a. [リソース] ビューの[システムリソース] ツリーから [ストレージ] をクリックし、[設定]メニューから [ディスクアレイ登録/削除] をクリックします。
- b. iStorage の場合は、[管理外ディスクアレイ一覧]から登録するディスクアレイを選択し、[OK] をクリックします。
- c. VNX、NetApp の場合は、[管理外ディスクアレイ一覧]で[新規登録]をクリックします。

ヒント

登録方法の詳細については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『4.7 ストレージを登録する』を参照してください。

3.1.1.3 vDC Automation Standard Edition のコンポーネントを SigmaSystemCenter に登録するには

vDC Automation Standard Edition のコンポーネントである DeploymentManager を SigmaSystemCenter のサブシステムとして登録します。

1. [管理] ビューの[管理] ツリーから [サブシステム] をクリックし、[設定] メニューから[サブシステム追加] をクリックします。
2. [サブシステム種類] プルダウンボックスから [DPM サーバ] を選択します。
3. [ホスト名]、[パスワード]を入力します。その他のテキストボックスは空欄で構いません。

注

[パスワード]には、DPM サーバに登録されているユーザ「deployment_user」に設定されているパスワードを入力します。パスワードの既定値は、(dpmmgr) です。

ヒント

登録方法の詳細については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『4.2.6 DPM サーバをサブシステムに追加するには』を参照してください。

3.1.2 SigmaSystemCenter の環境設定を行う

vDC Automation Standard Edition の環境設定を行います。

[管理]ビューの[管理]ツリーから[環境設定]をクリックし、続いて[環境設定]ウィンドウの[仮想リソース]タブを開き、以下の設定を行います。

- キャパシティ値とコスト値を設定する

既定では、VM サーバのキャパシティ値は 200、仮想マシンのコスト値は 10 となっているため、VM サーバあたりの稼働可能な仮想マシン数は 20 台に制限されます。リソースプールによる容量管理を行うにあたり、この台数制限が問題となりうる場合は、コスト値に対するキャパシティ値を十分に大きく設定して台数制限を事実上無効化してください。

ヒント

キャパシティ値、コスト値の指定方法の詳細については、『SigmaSystemCenter リファレンスガイド』の『4.7.1 仮想マシンサーバのキャパシティ制御』を参照してください。

- VMware は ESXi の root パスワードを設定する

ESXi の root パスワードを設定します。ここで指定されたパスワードは、すべての ESXi に対する既定値として使用されます。

注

VM サーバごとにアカウント/パスワードを設定する場合は、VM サーバごとにサブシステム編集ウィンドウから設定してください。

ヒント

環境設定の詳細については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『2.4 環境を設定する』を参照してください。

3.1.3 VM サーバのハードウェアに関する設定を行う

VM サーバのハードウェアに関する設定を行います。

「[3.1.3.1 VM サーバを SigmaSystemCenter に登録する \(92 ページ\)](#)」は必須設定です。

VM サーバを OOB Management で管理させたい場合は「[3.1.3.2 VM サーバを OOB Management で管理するための設定を行う \(92 ページ\)](#)」を行ってください。

3.1.3.1 VM サーバを SigmaSystemCenter に登録する

SigmaSystemCenter の管理対象として VM サーバを登録するための設定を行います。VM サーバを登録する際にリソースグループを指定します。以下の手順に沿って登録してください。

1. [リソース]ビューの[システムリソース]ツリーから[マシン]をクリックし、[設定]メニューからの[グループ追加]をクリックします。
2. [グループ追加]画面でリソースグループ名を入力し、[OK]をクリックします。
3. [マシン]配下に登録したい VM サーバが表示されている場合は、該当の VM サーバの[設定]メニューから[マシン移動]をクリックし、作成したグループを選択後、[OK]をクリックします。

[マシン]配下に登録したい VM サーバが表示されていない場合は、[システムリソース]ツリーから作成したグループをクリックし、[設定]メニューから[マシン登録]をクリック後、[マシン登録]画面の[管理外のマシン一覧]から登録する VM サーバにチェックを入れ、[OK]をクリックします。

ヒント

登録方法の詳細については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『4.8.3 マシンを登録するには』を参照してください。

3.1.3.2 VM サーバを OOB Management で管理するための設定を行う

VM サーバを SigmaSystemCenter の OOB Management で管理するための設定を行います。OOB Management を利用しない場合、本設定は不要です。

OOB Management の設定手順については『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『3.10 Out-of-Band (OOB) Management を利用するための事前設定を行う』を参照してください。

OOB Management の設定のポイントは次の通りです。

- OOB Management のための必須の設定

OOB Management を利用するには、BMC を接続できる状態に設定する必要があります。『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の以下の節を参照して、BMC の設定を行います。

- 『3.10.1 BMC の IP アドレスを設定するには』
- 『3.10.2 BMC に管理者権限のユーザを作成する』

- その他の機能を利用するための設定

『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の以下の節に該当する機能については、必要に応じて設定してください。

- 『3.10.3 BMC に PET の通報先と通報レベルを設定するには』
- 『3.10.4 ダンプを有効にするには』
- 『3.10.5 ACPI シャットダウンを有効にするには』
- 『3.10.6 SOL (Serial Over Lan) の設定をするには』

3.1.3.3 VM サーバのマシンプロパティを設定する

SigmaSystemCenter の[リソース]ビューから、VM サーバのマシンプロパティを設定します。(本設定はオプション設定です。)

[リソース]ビューの[システムリソース]ツリーからプロパティ設定を行う VM サーバのアイコンをクリックします。[設定]メニューから[プロパティ]をクリックし、[マシンプロパティ設定]画面から各タブの設定を行ってください。

ヒント

設定の手順や詳細については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『4.10 マシンプロパティを設定するには』を参照してください。

マシンプロパティの設定のポイントは次の通りです。

- [ネットワーク]タブ
 - VM サーバで使用する NIC に対応する MAC アドレスに対して NIC 番号を設定します。使用しない NIC については番号を設定する必要はありません。
 - NIC の番号付けは、その NIC の役割ごとに、リソースプール内で統一します。例えば、VM サーバに搭載される各 NIC が次のような役割を担っている場合は、リソースプール内の全ての VM サーバについて同様の番号付けを行います。

NIC の役割	NIC 番号
運用管理用 LAN に接続する NIC	1
事業者管理 VLAN、テナント管理 VLAN、業務 VLAN に接続する NIC	2
ライブマイグレーションに利用する NIC	3
NAS 接続に利用する NIC	4

- NIC の接続先のスイッチとポートについては設定する必要はありません。

- [ストレージ]タブ

- データストアを作成するストレージ機器に接続する HBA を追加し、HBA 番号を設定します。データストアを持たないストレージ機器に接続する HBA については追加する必要はありません。
- HBA の番号付けは、その HBA の役割ごとに、リソースプール内で統一します。例えば、VM サーバに搭載される各 HBA が次のような役割を担っている場合は、リソースプール内の全ての VM サーバについて同様の番号付けを行います。

HBA の役割	HBA 番号
iStorage に接続する HBA	1
VNX または CLARiX に接続する HBA	2

- [アカウント情報]タブ

VM サーバを OOB Management で管理するために、VM サーバに搭載される BMC の IP アドレスとアカウント情報を設定します。

3.1.4 リソースプールを作成する

SigmaSystemCenter を用いて VM サーバの運用グループを作成し、続いて VM サーバの運用グループをリソースプールとして定義します。

3.1.4.1 VM サーバのカテゴリを作成する

SigmaSystemCenter の[運用]ビューにおいて VM サーバの運用グループを階層化して管理する場合は、VM サーバの運用グループを格納するカテゴリを作成します。

[運用]ビュー[運用]ツリーから[運用]、もしくはカテゴリを追加するカテゴリのアイコンをクリックします。[設定]メニューから[カテゴリ追加]をクリックし、[名前]を入力して[OK]をクリックします。

VM サーバのカテゴリ作成のポイントは次の通りです。

- リソースプール、DPM サーバ、最適起動の設定は不要です。

ヒント

カテゴリの作成方法の詳細については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『5.2 カテゴリを追加する』を参照してください。

3.1.4.2 VM サーバの運用グループを作成する

VM サーバをリソースプールとして定義するために、SigmaSystemCenter で VM サーバの運用グループを作成します。

[運用]ビューの[運用]ツリーから、[運用]、運用グループを追加するカテゴリのアイコン、もしくはグループのアイコンをクリックします。[設定]メニューから[グループ追加]をクリックし、[名前]、[マシン種別]、[OS 種別]を設定し、[OK]をクリックします。

VM サーバの運用グループ作成のポイントは次の通りです。

- マシン種別は、「VM サーバ」を選択します。
- VM サーバの運用グループは、次の管理単位ごとに作成します。
 - VMware の場合: DataCenter またはクラスタ
 - Hyper-V の場合: Hyper-V クラスタ
 - KVM の場合: DataCenter またはクラスタ
- VM サーバの運用グループの OS 種別は次の通りに設定します。
 - VMware の場合: Linux
 - Hyper-V の場合: Windows Server
 - KVM の場合: Linux

ヒント

運用グループの作成方法の詳細については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『5.4 運用グループを追加する』を参照してください。

3.1.4.3 VM サーバの運用グループを設定する

SigmaSystemCenter を用いて VM サーバの運用グループに VM サーバのホストを追加します。

また、最適配置の設定や、データストアを VM 作成先候補から除外するための設定、死活監視や性能監視の設定を行います。

以下の手順に従って運用グループの設定を行ってください。

1. VM サーバの運用グループをクリックします。
2. [全般]タブの[ホスト一覧]グループボックスから、VM サーバの数だけホストを追加します。
 - a. [ホスト追加]をクリックします。
 - b. [ホスト名]に VM サーバのホスト名を入力します。

注

以降はオプション設定であり、必須設定ではありません。

3. 各 VM サーバの IP アドレスの情報を設定します。
 - a. [ホスト一覧]グループボックスを参照し、ホストの[プロパティ]をクリックします。
 - b. [ネットワーク]タブを選択します。
 - c. 運用管理用 LAN に接続する NIC を追加するために[追加]をクリックします。
 - i. [NIC 番号]で、運用管理用 LAN に接続する NIC の NIC 番号を選択します。
 - ii. [追加]をクリックし、VM サーバの管理用 IP アドレスの情報を入力します。
 - iii. [管理用 IP アドレス]で VM サーバの管理用 IP アドレスを選択します。
 - d. NAS を利用する場合は、NAS 用 LAN に接続する NIC を追加するために[追加]をクリックします。
 - i. [NIC 番号]で、NAS 用 LAN に接続する NIC の NIC 番号を選択します。
 - ii. [追加]をクリックし、NAS の接続に用いる NIC の IP アドレスを入力します。

ヒント

NIC 番号については、「[3.1.3.3 VM サーバのマシンプロパティを設定する \(93 ページ\)](#)」を参照してください。

4. VM 最適配置の機能を利用する場合は、最適配置の設定を行います。
 - a. [設定]メニューの[プロパティ]をクリックします。
 - b. [VM 最適配置]タブから、[高負荷境界]、[稼動目標域]、[低負荷境界]を設定します。
 - c. [性能監視]タブから、CPU 負荷を監視するように監視プロファイルを設定します。
 - d. [適用]をクリックします。

ヒント

[性能監視]タブの設定は、以降の手順を参照してください。

5. [死活監視]タブで、VM サーバを ESMPRO/ServerManager に登録するかどうかを設定します。
 - VM サーバに ESMPRO/ServerAgent をインストールしている場合は、[ESMPRO/SM に登録する]をチェックします。
 - VM サーバに ESMPRO/ServerAgent をインストールしていない場合は、[ESMPRO/SM に登録する]のチェックを外します。

ヒント

通常では、ESX と Hyper-V には ESMPRO/ServerAgent をインストールします。一方、ESXi には ESMPRO/ServerAgent はインストールできません。

6. VM 最適配置を利用する場合や、VM サーバの性能監視を行う場合は、[性能監視]タブを設定します。
 - a. [性能データ収集設定]をチェックします。
 - b. [プロファイル名]で[Standard Monitoring Profile (x min)] か [Physical Machine Monitoring Profile (x min)]を選択します。

ヒント

性能データの監視プロファイルの詳細については『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『付録 A 監視プロファイル』を参照してください。

- c. SystemMonitor 性能監視の IP アドレスとポート番号を設定します。
- d. 性能データの取得に用いる VM サーバのアカウントを設定します。

ヒント

運用グループの設定の詳細については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『5.5 グループプロパティを設定する』を参照してください。

3.1.4.4 リソースプールを定義する

VM サーバの運用グループに対してリソースプールを定義します。

リソースプールを追加するには、まず[運用]ビューの[運用]ツリーから、リソースプールを追加したい VM サーバの運用グループをクリックします。次に[設定]メニューより[リソースプール]の[作成]をクリックします。そして[名前]、[種別]、[vCPU の単位]を設定して[OK]をクリックします。

リソースプールを定義する際のポイントは次の通りです。

- リソースプールの種別は"共有"とし、リソースプールをカテゴリに直接割り当てない構成とします。リソースプールを直接割り当てる代わりに、サブリソースプールを切り出して割り当てます。
- vCPU の単位は”周波数”による設定を推奨します。仮想 CPU の単位を周波数で指定することで、VM サーバの物理 CPU のスペックに依存せずに一定のスペックの仮想 CPU をテナントに払い出すことができます。

ヒント

リソースプールを定義する詳細については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『5.11.1 リソースプールを追加するには』を参照してください。

3.1.4.5 サブリソースプールを定義する

VM サーバの運用グループに対してサブリソースプールを定義します。

サブリソースプール作成のポイントは次の通りです。

- [運用]ビューの[運用]ツリーで VM サーバの運用グループをクリックし、[リソースプール]タブを開いて[切り出し]をクリックします。
- [テナントへの割り当てを行う]に割り当て先のカテゴリを設定します。
- 「最大値を超えた割り当てを許容する」をチェックし、オーバーコミットを有効にします。これにより、サブリソースプールとして切り出す CPU、メモリ、ストレージリソースは、リソースプールの物理的なリソース残量と関係なく、必要とされるリソースサイズを切り出すことができます。

ヒント

サブリソースプールを定義する詳細については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『5.11.2 サブリソースプールを切り出すには』を参照してください。

3.1.5 VM サーバリソースを登録する

SigmaSystemCenter の VM サーバの運用グループに各 VM サーバを追加することで、リソースプールに CPU リソースとメモリリソースを追加します。

運用グループに VM サーバを追加する方法は次の通りです。

1. VM サーバの運用グループの[全般]タブを参照します。
2. 運用グループに追加する VM サーバの数だけ、以下を実施します。
 - a. [ホスト一覧]で VM サーバの割り当てを実行するホストを1つチェックします。
 - b. [マスタ登録]をクリックします。
 - c. [共通プールから選択]を選択します。
 - d. ホストに割り当てる VM サーバを選択します。
 - e. 確認画面が表示されるので[完了]をクリックします。
3. [データストア設定]タブで、仮想マシンを配置しないディスク（システムディスク等）が利用されないように設定します。
 - a. VM サーバの運用グループの[設定]メニューから[プロパティ]をクリックします。
 - b. [データストア設定]タブをクリックします。
 - c. [データストア一覧]グループボックスを参照し、VM の作成先ではないが [VM 作成先]のチェックが付いているデータストアについて[編集]をクリックします。
 - d. [VM 作成先候補に含める]のチェックを外します。

ヒント

詳細については、『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『8.2.1 マスタマシンを登録するには』を参照してください。

3.1.6 論理ネットワークの登録について

SigmaSystemCenter にて、ネットワークを仮想的に扱うための論理ネットワークを登録します。必要に応じて以下の種類の論理ネットワークの登録を行ってください。

- 特定のテナントが所有する仮想マシンを管理する目的で使用する(接続が強制される)専有論理ネットワーク
- 特定のテナントが所有する仮想マシンが任意の目的で利用できる(接続の行否が選択可能な)専有論理ネットワーク
- 特定のテナント問わず全仮想マシンが任意の目的で利用できる(接続の行否が選択可能な)共有論理ネットワーク

登録方法については『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『4.5. 論理ネットワークを追加する』を参照してください。

特定のテナントが所有する仮想マシンが任意の目的で利用できる(接続の行否が選択可能な)専有論理ネットワークについては、vDC Automation Standard Edition ポータルからテナントユーザが任意のタイミングで作成および削除することができます。

ユーザに論理ネットワークの作成を行わせる場合には、『vDC Automation Standard Edition ポータル 利用者マニュアル (リソース管理編)』の『第 10 章 ネットワークサービスカタログの設定』を参照し、設定を行ってください。

vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプションを使用する構成においても同様に作成および削除することが可能です。

ユーザに論理ネットワークの作成を行わせる場合には、『vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプション利用ガイド』の『3.2.3 ネットワークの設定方法』を参照し、設定を行ってください

また、ネットワークを含むトポロジテンプレートの作成方法については、『vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプション 利用ガイド』の『付録 B. トポロジテンプレートの書式』を参照してください。

3.1.7 ストレージリソースを登録する

SigmaSystemCenter を用いてディスクボリュームをリソースプールに追加します。また、タグの設定を行います。

注

- Hyper-V は NAS 環境に対応していません。

3.1.7.1 ディスクボリュームを割り当てる

以下の手順に従い、SAN や NAS のディスクボリュームを作成し、リソースプールに追加します。

注

SigmaSystemCenter の Web コンソールで作業中にメンテナンスモードを促すダイアログが表示された場合は、以下の手順でメンテナンスモードをオンにして作業を続行し、作業完了後には忘れずにメンテナンスモードをオフに戻してください。

1. [運用]ビューの[運用]ツリーから、メンテナンスモードをオンにするマシンのグループのアイコンをクリックします。
2. [ホスト一覧]グループボックス、もしくは[グループプール]グループボックスからメンテナンスモードをオンにするマシンのチェックボックスをオンにします。
3. [アクション]メニューから[メンテナンスオン]をクリックします。
4. メンテナンスモードをオフにする場合は、[アクション]メニューから[メンテナンスオフ]をクリックします。

メンテナンスモードの詳細については『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『10.1.3 メンテナンスモードをオン/オフするには』を参照してください。

1. ディスクボリュームの作成と登録を行う

既存のディスクボリュームを用いずにディスクボリュームを新規に作成する場合は、ストレージ機器の製品マニュアルを参照して、ディスクボリュームを作成します。

続いて、SigmaSystemCenter の Web コンソールを用いて、[リソース]ビューからディスクアレイを選択し、[ディスクボリューム登録]をクリックしてディスクボリュームを管理対象として登録します。詳細は『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『4.7.8 ディスクボリュームを登録するには』を参照してください。

注

- 新規作成したディスクボリュームを SigmaSystemCenter に認識させるには、[管理]ビューの[サブシステム]に登録されたストレージを選択後、[収集]をクリックします。

2. ディスクボリュームの割り当てのための設定を行う

- a. SigmaSystemCenter の Web コンソールを用いて、タイトルバーの[運用] をクリックし、[運用] ビューに切り替えます。
- b. Web コンソールの[運用] ツリーから対象の運用グループのアイコンをクリックし、メインウィンドウに運用グループの詳細情報を表示します。
- c. [ホスト一覧] グループボックスから、ディスクボリュームを割り当てる各ホストに対して、以下を実行します。
 - i. ディスクボリュームを追加するホストの[プロパティ] をクリックし、続いて[ストレージ] タブを選択後、[追加]をクリックします。
 - ii. [ストレージ情報]の[ディスクアレイ]で SAN のディスクアレイを選択した場合は、以下の通りに設定します。
 - A. 必要に応じて[LUN 番号]に LUN を入力します。
 - B. [配布後に接続する]のチェックは不要です。

- C. [ストレージ一覧]から VM サーバに割り当てるディスクボリュームにチェックを入れます。
- D. [HBA]情報では、[接続する HBA を指定する]を選択し、HBA 番号を入力します。

ヒント

HBA 番号については「[3.1.3.3 VM サーバのマシンプロパティを設定する \(93 ページ\)](#)」を参照してください。

- iii. [ストレージ情報]の[ディスクアレイ]で NAS のディスクアレイを選択した場合は、以下の通りに設定します。
 - A. [ストレージ一覧]から VM サーバに割り当てるディスクボリュームにチェックを入れます。
 - B. [公開先ホストの IP アドレスを指定する]において、NAS 接続用の NIC に割り当てた IP アドレスを選択します。

ヒント

手順の詳細については『SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド』の『5.8.2 [ストレージ] タブを設定するには (モデル種別 [物理]、[VM サーバ] の場合のみ)』を参照してください。

- 3. ディスクボリュームの割り当てを実行する
 - a. SigmaSystemCenter の Web コンソールを用いて、[運用] ツリーから対象の運用グループのアイコンをクリックし、メインウィンドウに運用グループの詳細情報を表示します。対象の VM サーバのチェックボックスを全てオンにし、[マシン個別操作...] メニューから[構成変更]をクリックします。
 - b. [構成変更時に行う処理を選択してください]配下に構成変更を実施する処理の一覧が表示されます。[ストレージ制御]のチェックボックスのみをオンにし、[OK]をクリックしてください。
- 4. ディスクボリュームを仮想化基盤に認識させる
 - VMware vCenter Server 管理環境の場合
vCenter Server を使用して、データストア用のディスクボリュームを VMFS でフォーマットします。
 - Hyper-V クラスタ環境の場合
フェールオーバー クラスタ マネージャーを使用して、"記憶域" にデータストア用ディスクボリュームを追加し、続いて"記憶域" に追加したデータストア用ディスクボリュームを "クラスタの共有ボリューム" に追加します。
- 5. ディスクボリュームを SigmaSystemCenter に認識させる

SigmaSystemCenter の Web コンソールを用いて、[管理]ビューの[サブシステム]に登録された[VMware vCenter Server]もしくは[Hyper-V Cluster]を選択後、[収集]をクリックします。

3.1.7.2 ストレージのタグを設定する

SigmaSystemCenter の Web コンソールを用いて、データストア用ディスクボリュームに対してタグを設定します。

例えば、"Gold"、"Silver"、"Bronze"といったストレージ機器の サービスレベルに応じたタグ各ディスクボリュームに対して設定することで、異なるサービスレベルのストレージリソースを用意できます。

1. VM サーバの運用グループの[リソースプール]タブを開きます。
2. [データストア一覧]において、タグを設定するデータストアの[編集]をクリックし、タグを入力します。

3.1.8 リソース管理機能の利用について

vDC Automation Standard Edition ポータルのリソース管理機能利用方法については、以下のマニュアルを参照してください。

- 『vDC Automation Standard Edition ポータル 利用者マニュアル (リソース管理編)』

vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプションを使用する構成の場合は、以下のマニュアルを参照してください。

- 『vDC Automation Standard Edition ポータル利用者マニュアル (リソース管理編) トポロジテンプレートオーケストレータオプション』

3.2 監視機能

3.2.1 監視マネージャーの設定

vDC Automation Standard Edition ポータルを使用してテナントを作成した後に、そのテナントが使用する監視マネージャーを設定する必要があります。

設定方法は、『vDC Automation Standard Edition ポータル 利用者マニュアル (監視編)』の以下の章を参照してください。

- 『第3章 運用の流れ』
- 『3.2 テナントを登録する』
- 『3.3 テナントに監視エージェントを割り当てる』

注

「監視マネージャ名」、「監視マネージャポート番号」にはそれぞれ、インストール時に指定した「自ホスト名」、「エージェントとの通信ポート」を指定してください。

3.2.2 DeploymentManager の設定

VM プロビジョニング時に監視エージェントの初期設定をするために、SigmaSystemCenter(および DeploymentManager)に、初期設定用スクリプトを配布・実行するシナリオを登録します。

初期設定用スクリプトは、(アプリケーションサーバのインストール先ディレクトリ) \Tomcat\portal\bin 配下に格納されています。

OS のタイプごとに、以下のファイルを使用します。

- Windows 系 OS : SetupMonitoring.bat
- Linux 系 OS : SetupMonitoring.sh

注

初期設定用スクリプトの改行コードは、WindowsOS の場合は CRLF、Linux 系 OS の場合は LF としてください。

1. DeploymentManager(DPM)へのアプリケーションの登録

OS タイプごとの初期設定用スクリプトを DPM のイメージビルダを使用してアプリケーションとして登録します。イメージビルダによるアプリケーションの登録方法については DPM のマニュアルを参照してください。

登録時に指定する設定値は以下の通りです。以下に記載が無い項目は既定値のまま登録してください。

設定項目	Windows 系 OS での設定	Linux 系 OS での設定
パッケージ ID	WindowsSetupMonitoring	LinuxSetupMonitoring
タイプ	アプリケーション	
実行設定タブ - 実行ファイル	SetupMonitoring.bat	SetupMonitoring.sh
実行設定タブ - 対応 OS	ALL OS	
実行設定タブ - 対応言語	ALL Language	

2. DPM のシナリオグループ作成

DPM のシナリオグループを任意の名前で作成します。

シナリオグループの作成方法については、DPM のマニュアルを参照してください。

3. シナリオグループへのシナリオ追加

作成したシナリオグループに、シナリオを追加します。

シナリオの追加方法については、DPM のマニュアルを参照してください。

追加時に指定する値は以下のとおりです。

設定項目	Windows 系 OS での設定	Linux 系 OS での設定
シナリオ名	WindowsSetupMonitoring	LinuxSetupMonitoring
パッケージタブ - パッケージ	Local-WindowsSetupMonitoring を追加	Local-LinuxSetupMonitoring を追 加
パッケージタブ - 実行タイミン グ設定	配信後すぐにパッケージを実行」にチェック	

4. SigmaSystemCenter のソフトウェア登録

DPM に作成したシナリオを SigmaSystemCenter に登録するために、SigmaSystemCenter の Web コンソールを使用してソフトウェアの収集を行います。

ソフトウェアの収集の方法については、SigmaSystemCenter のマニュアルを参照してください。

5. SigmaSystemCenter の運用グループへの DPM サーバの設定

DPM によるソフトウェア配布を有効にするため、vDC Automation Standard Edition ポータルが使用する SigmaSystemCenter の運用グループそれぞれに DPM サーバを設定します。

設定方法については、SigmaSystemCenter のマニュアルを参照してください。

SigmaSystemCenter が使用する SigmaSystemCenter の運用グループは、VM のプロビジョニングに使用するリソースプールがテナント専有か共有かにより異なります。

テナント専有のリソースプールを使用する場合、当該テナントに対応する運用グループ（グループ名はテナント ID）に対して DPM サーバを設定してください。当該運用グループは、vDC Automation Standard Edition ポータルを使用してテナントを作成すると自動的に SigmaSystemCenter に作成されます（グループ種別はテナント）。

共有のリソースプールを使用して VM をプロビジョニングする場合、共有リソースプール名の運用グループ（グループ種別はカテゴリ）を作成し、DPM サーバを設定してください。

3.2.3 vDC Automation Standard Edition ポータルの設定

vDC Automation Standard Edition で VM を払い出す前に、監視エージェントの実行ファイルが格納されているパスをテンプレートごとに設定ファイルで指定する必要があります。

（アプリケーションサーバのインストール先ディレクトリ）\Tomcat\conf\NEC\webframework.properties に、以下の項目を設定をします。

```
product.cloudportal.template.monitoring.agent.setup.path.<テンプレート名>
= <エージェントの実行ファイルパス>
```

エージェントの実行ファイルは、エージェントのインストールパス配下の **bin** に格納されています。以下に、Windows 系 OS に既定のインストール先を使用してインストールした場合の設定例を示します。

```
product.cloudportal.template.monitoring.agent.setup.path.TemplateA = C:\  
\Program Files (x86)\NEC\vDCA\Agent\FW\Agent\bin
```

3.2.4 監視機能の利用について

vDC Automation Standard Edition ポータルの監視機能利用方法については、以下のマニュアルを参照してください。

- ・『vDC Automation Standard Edition ポータル 利用者マニュアル (監視編)』

vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプションを使用する構成の場合は、以下のマニュアルを参照してください。

- ・『vDC Automation Standard Edition ポータル利用者マニュアル (監視編) トポロジテンプレートオーケストレータオプション』

第4章 アンインストールを実行する

本章では、vDC Automation Standard Edition の各コンポーネントのアンインストール手順について説明します。

目次

4.1 アンインストール実行前の注意	107
4.2 管理サーバをアンインストールする	107
4.3 管理サーバのカスタムオペレーション機能をアンインストールする	112
4.4 管理サーバ監視端末をアンインストールする	112
4.5 管理サーバ監視端末のカスタムオペレーション機能をアンインストールする	114
4.6 VM 監視サーバをアンインストールする	115
4.7 VM 監視サーバ監視端末をアンインストールする	115
4.8 スタック管理サーバをアンインストールする	118
4.9 管理対象マシンをアンインストールする(Windows).....	118
4.10 管理対象マシンのアンインストール(Linux).....	119

4.1 アンインストール実行前の注意

- アンインストールを始める前に、必ず使用しているアプリケーションおよび Web ブラウザをすべて終了してください。
- アンインストールを行うと、設定ファイルが削除されます。必要に応じてバックアップしてください。

4.2 管理サーバをアンインストールする

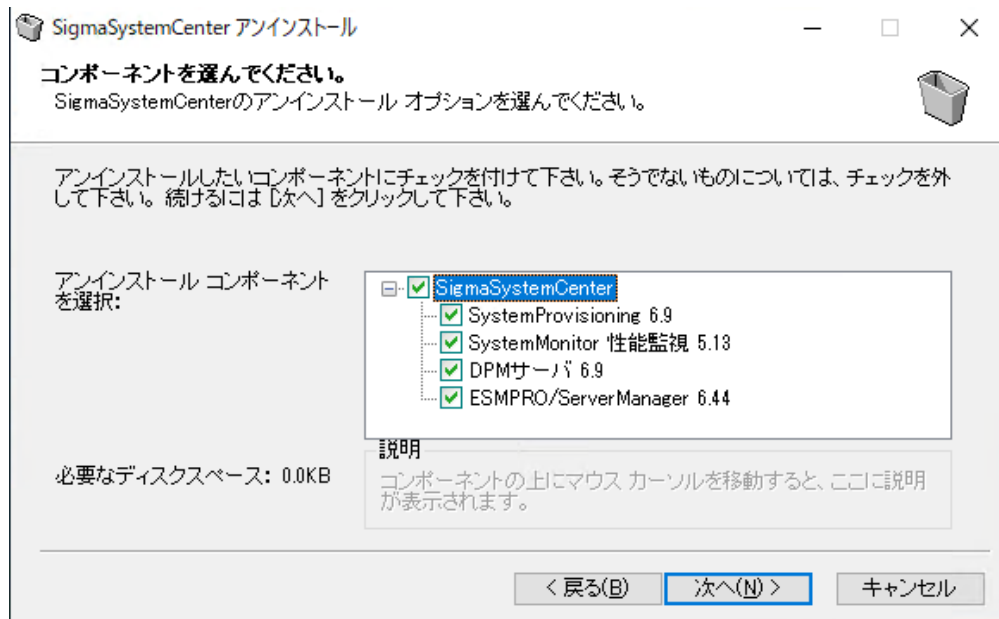
1. DeploymentManager のすべてのサービスを停止します。
2. コントロールパネルの[プログラムと機能]で [SigmaSystemCenter]を選択し、[アンインストールと変更]をクリックします。

「SigmaSystemCenter アンインストールウィザードへようこそ」画面が表示されます。



3. [次へ(N)>]をクリックします。

アンインストールするコンポーネントを選択する画面が表示されます。



4. アンインストールするコンポーネントとして以下の全てにチェックを入れ、[次へ(N) >] をクリックします。

- SigmaSystemCenter
- SystemProvisioning 6.9
- SystemMonitor 性能監視 5.13
- DPM サーバ 6.9
- ESMPRO/ServerManager 6.44

「SystemProvisioning の設定」画面が表示されます。



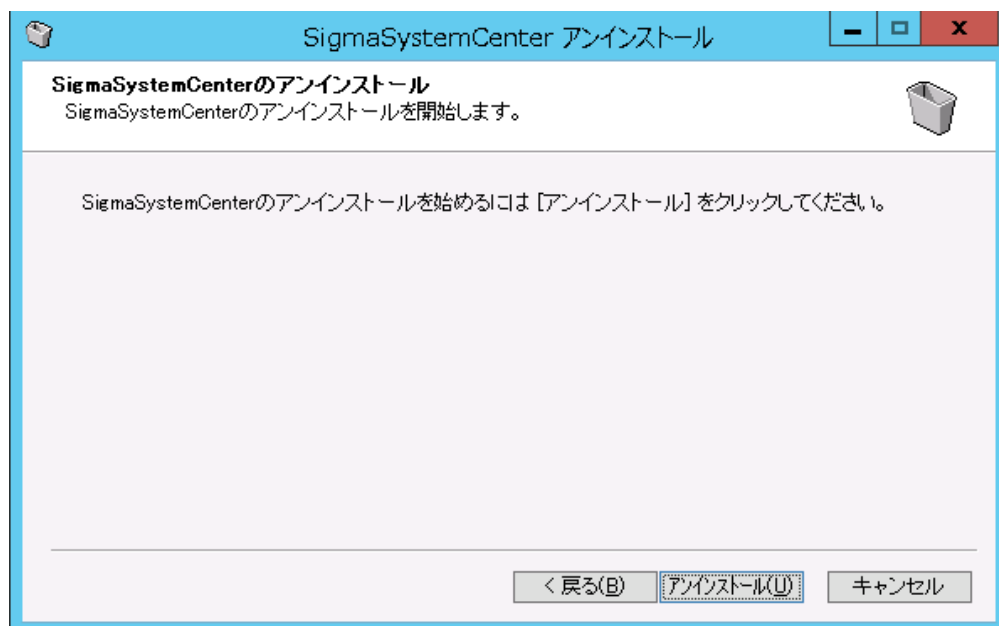
5. Windows ファイアウォールの例外リストからのポート削除について、どちらかのラジオボタンを選択し、[次へ(N) >]をクリックします。

「ESMPRO/ServerManager の設定」画面が表示されます。



6. 更新パッケージ保存フォルダの削除について、どちらかのラジオボタンを選択し、[次へ(N)]をクリックします。

「SigmaSystemCenter のアンインストール」画面が表示されます。



7. [アンインストール(U)]をクリックします。

すべてのコンポーネントのアンインストール後、「完了」画面が表示されます。

注

ESMPRO/ServerManager のアンインストール完了後、環境によっては「このプログラムは正しくアンインストールされなかった可能性があります」というメッセージが表示される場合があります。アンインストールは正常に完了していますので、[このプログラムは正しくアンインストールされました]、または[キャンセル]をクリックして終了してください。

8. システムの再起動を促すダイアログボックスが表示された場合は、システムを再起動します。
9. 以下のサービスを停止します。
 - WebSAM UMF Operations Manager_102
 - Apache Tomcat 8.5 ServiceGovernor
10. SQLServer の場合、以下のコマンドを実行し、データベースを削除します。

```
> sqlcmd -E -S ".\<ポータル設定 - SQL Server のインスタンス名>"
1> drop database cloudportal
2> go
1> drop login cpuser
2> go
1> exit
```

ヒント

インストール時に指定する<ポータル設定 - SQL Server のインスタンス名>の既定値は "FWCMDB"です。

PostgreSQL の場合、以下のコマンドを実行し、データベースを削除します。

```
>psql -h <ポータル設定 - PostgreSQL のホスト名> -p <ポータル設定 - PostgreSQL のポート> -U <ポータル設定 - PostgreSQL の管理者ユーザ>
<ポータル設定 - PostgreSQL の管理者ユーザ> のパスワード:<ポータル設定 - PostgreSQL の管理者パスワード>
postgres=# drop database cloudportal;
postgres=# drop login cpuser
postgres=# \q
```

ヒント

インストール時に指定する<ポータル設定 - PostgreSQL のホスト名>の既定値は "localhost"、<ポータル設定 - PostgreSQL のポート>の規定値は "5432"、<ポータル設定 - PostgreSQL の管理者ユーザ>の規定値は "postgres"です。

11. インストール DVD を DVD ドライブに挿入します。
12. コマンドプロンプト、またはエクスプローラから以下のコマンドを実行し、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラを起動します。

```
> <インストール DVD>:\install\Windows\vDCAInst_SE.exe
```

13. インストーラが起動します。
14. [カスタム(C)]を選択し、[次へ(N)]をクリックします。
15. [WebSAM メディア]を選択して、[実行(R)]をクリックします。
WebSAM フレームワークメディアインストーラが起動します。
16. [アンインストール]ラジオボタンを選択し、[次へ(N)>]をクリックします。

「アンインストールする製品の選択」画面が表示されます。

17. 以下のコンポーネントのチェックボックスにチェックを入れます。

- [Manager]-[サービス 102]配下の以下のコンポーネント
 - WebSAM SystemManager G

18. [次へ(N)>]をクリックすると、「アンインストール確認」画面が表示されます。

19. [対象製品:]を確認し、[開始(S)]をクリックします。

選択したコンポーネントのアンインストールが実行されます。アンインストールが完了すると、「完了」画面が表示されます。

20. [完了(F)]をクリックします。

21. コントロールパネルの[プログラムと機能]で [SystemManager G]を選択し、[アンインストール]をクリックします。

22. アンインストールの確認ダイアログが表示されますので、[はい]を選択します。

23. アプリケーションサーバ (Tomcat) のサービスを削除します。

以下のコマンドを実行して、アプリケーションサーバ (Tomcat) のサービスを削除します。

```
> set "CATALINA_HOME=<インストールフォルダ>\FW\Tomcat"
> "<インストールフォルダ>\FW\Tomcat\bin\service.bat" remove
ServiceGovernor
```

サービスの削除完了後に下記のフォルダも削除してください。

- C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\GM\FW\Tools
- C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\GM\FW\Tomcat

注

インストールした Java は、アンインストールされません。その他プログラムが使用していない場合は、アンインストールしてください。

24. 以下のレジストリを削除してください。

- HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\NEC\vDCAInst\APServer
- HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\NEC\vDCAInst\MOM
- HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\NEC\vDCAInst\Portal
- HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\NEC\vDCAInst\WebAPIBase
- HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\NEC\vDCAInst\
 - \WebConsoleOption
- HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\NEC\vDCAInst\WebConsoleOption

25. インストール時に設定した「インストール先フォルダ」が残っている場合があります。不要であれば削除して下さい。

4.3 管理サーバのカスタムオペレーション機能をアンインストールする

カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用している場合、管理サーバから JobCenter をアンインストールします。

JobCenter のアンインストール手順については、以下のマニュアルを参照してください。

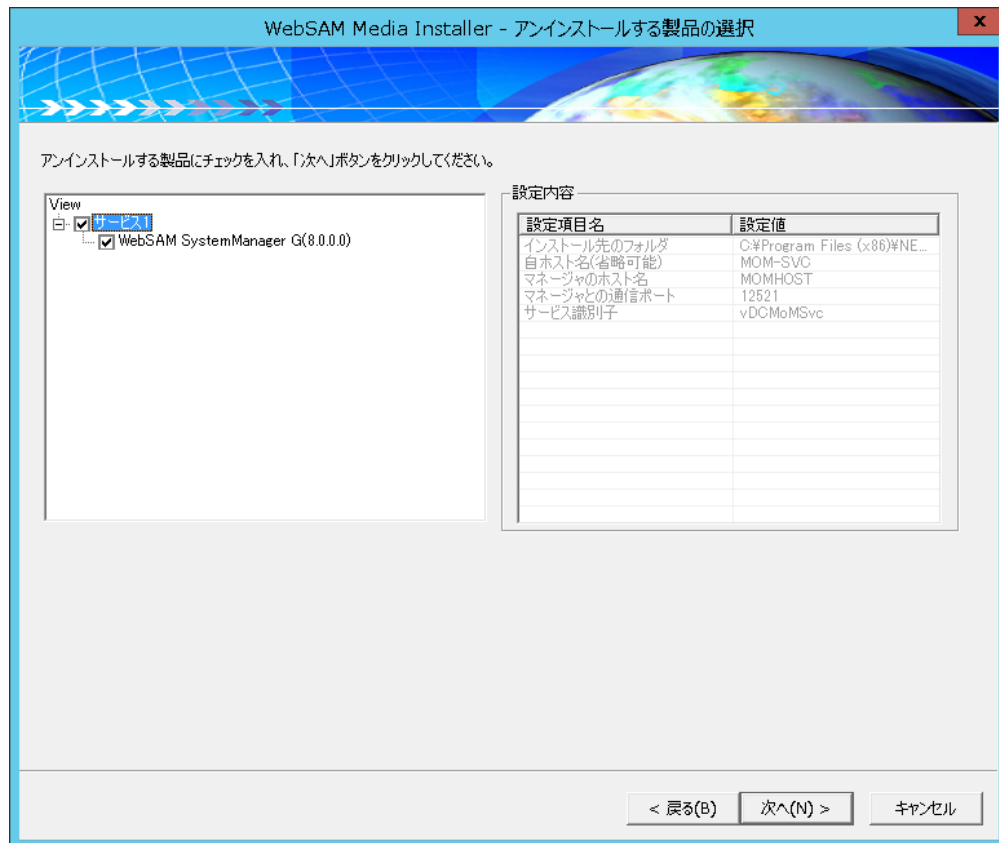
- 『JobCenter インストールガイド』の『4.1. LicenseManager をアンインストールする』
- 『JobCenter インストールガイド』の『4.2. JobCenter MG, JobCenter SV をアンインストールする』
- 『JobCenter Web 機能利用の手引き』の『2.2. アンインストール』

4.4 管理サーバ監視端末をアンインストールする

1. インストール DVD を DVD ドライブに挿入します。
2. コマンドプロンプト、またはエクスプローラから以下のコマンドを実行し、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラを起動します。

```
> <インストール DVD>:\install\Windows\vDCAInst_SE.exe
```

3. インストーラが起動します。
4. [カスタム(C)]を選択し、[次へ(N)]をクリックします。
5. [WebSAM メディア]を選択して、[実行(R)]をクリックします。
WebSAM フレームワークメディアインストーラが起動します。
6. [アンインストール]ラジオボタンを選択し、[次へ(N)>]をクリックします。
「アンインストールする製品の選択」画面が表示されます。



7. 管理サーバ監視端末のインストール時に指定したサービス識別子のサービス配下にある以下コンポーネントのチェックボックスにチェックを入れます。
- WebSAM SystemManager G

注

- 管理サーバ監視端末のサービス識別子の既定値は[vDCMoMSvc]です。 サービス識別子は、左ツリーの[View]配下の[サービス n]をクリックし、設定内容に表示されるサービス識別子の設定値です。
- インストール時にサービス識別子を変更した場合、もしくは管理サーバ監視端末を複数インストールした場合のサービス識別子は、 以下のように vDC Automation Standard Edition 統合インストーラの「管理サーバ監視端末設定」画面で確認できます。



8. [次へ(N)]をクリックすると、「アンインストール確認」画面が表示されます。

9. [対象製品:]を確認し、[開始(S)]をクリックします。

選択したコンポーネントのアンインストールが実行されます。アンインストールが完了すると、「完了」画面が表示されます。

10. [完了(F)]をクリックします。

11. 以下のレジストリを削除してください。

- HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\NEC\vDCAInst\MOM_SVC_<サービス識別子>

注

管理サーバ監視端末のサービス識別子の既定値は[vDCMoMSvc]です。インストール時にサービス識別子を変更した場合、もしくは管理サーバ監視端末を複数インストールした場合は、上記の手順で確認したサービス識別子を指定してください。

12. インストール時に設定した「インストール先フォルダ」が残っている場合があります。不要であれば削除して下さい。

4.5 管理サーバ監視端末のカスタムオペレーション機能をアンインストールする

カスタムオペレーション機能の JobCenter 連携を利用している場合、管理サーバ監視端末から JobCenter をアンインストールします。

JobCenter のアンインストール手順については、以下のマニュアルを参照してください。

- 『JobCenter インストールガイド』の『4.3. JobCenter CL/Win をアンインストールする』

4.6 VM 監視サーバをアンインストールする

1. 以下のサービスを停止します。

- WebSAM UMF Operations Manager_103

2. インストール DVD を DVD ドライブに挿入します。
3. コマンドプロンプト、またはエクスプローラから以下のコマンドを実行し、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラを起動します。

```
> <インストール DVD>:\install\Windows\vDCAInst_SE.exe
```

4. インストーラが起動します。
5. [カスタム(C)]を選択し、[次へ(N)]をクリックします。
6. [WebSAM メディア]を選択して、[実行(R)]をクリックします。

WebSAM フレームワークメディアインストーラが起動します。

7. [アンインストール]ラジオボタンを選択し、[次へ(N)>]をクリックします。

「アンインストールする製品の選択」画面が表示されます。

8. 以下のコンポーネントのチェックボックスにチェックを入れます。

- [Manager]-[サービス 103]配下の以下のコンポーネント
 - WebSAM SystemManager G

9. [次へ(N)>]をクリックすると、「アンインストール確認」画面が表示されます。

10. [対象製品:]を確認し、[開始(S)]をクリックします。

選択したコンポーネントのアンインストールが実行されます。アンインストールが完了すると、「完了」画面が表示されます。

11. [完了(F)]をクリックします。

12. 以下のレジストリを削除してください。

- HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\NEC\vDCAInst\RM

13. インストール時に設定した「インストール先フォルダ」が残っている場合があります。不要であれば削除して下さい。

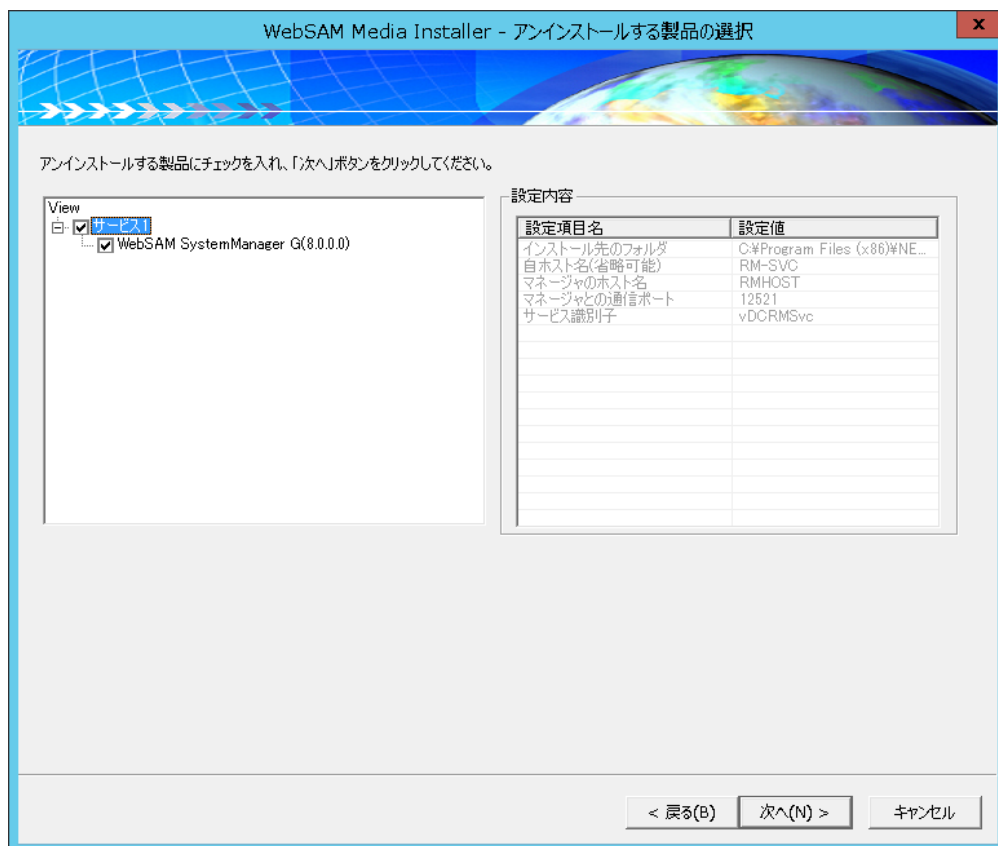
4.7 VM 監視サーバ監視端末をアンインストールする

1. インストール DVD を DVD ドライブに挿入します。

2. コマンドプロンプト、またはエクスプローラから以下のコマンドを実行し、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラを起動します。

```
> <インストール DVD>:\install\Windows\vDCAInst_SE.exe
```

3. インストーラが起動します。
4. [カスタム(C)]を選択し、[次へ(N)]をクリックします。
5. [WebSAM メディア]を選択して、[実行(R)]をクリックします。
WebSAM フレームワークメディアインストーラが起動します。
6. [アンインストール]ラジオボタンを選択し、[次へ(N)>]をクリックします。
「アンインストールする製品の選択」画面が表示されます。



7. VM 監視サーバ監視端末のインストール時に指定したサービス識別子のサービス配下にある以下コンポーネントのチェックボックスにチェックを入れます。

- WebSAM SystemManager G

「アンインストール確認」画面が表示されます。

注

- VM 監視サーバ監視端末のサービス識別子の既定値は[vDCRMSvc]です。サービス識別子は、左ツリーの[View]配下の[サービス n]をクリックし、設定内容に表示されるサービス識別子の設定値です。

- インストール時にサービス識別子を変更した場合、もしくは VM 監視サーバ監視端末を複数インストールした場合のサービス識別子は、以下のように vDC Automation Standard Edition 統合インストーラの「VM 監視サーバ監視端末設定」画面で確認できます。



- [次へ(N)>]をクリックすると、「アンインストール確認」画面が表示されます。
- [対象製品:]を確認し、[開始(S)]をクリックします。
選択したコンポーネントのアンインストールが実行されます。アンインストールが完了すると、「完了」画面が表示されます。
- [完了(F)]をクリックします。
- 以下のレジストリを削除してください。
 - HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\NEC\vDCAInst\RM_SVC_<サービス識別子>

注

VM 監視サーバ監視端末のサービス識別子の既定値は[vDCRMSvc]です。インストール時にサービス識別子を変更した場合、もしくは VM 監視サーバ監視端末を複数インストールした場合は、上記の手順で確認したサービス識別子を指定してください。

- インストール時に設定した「インストール先フォルダ」が残っている場合があります。不要であれば削除して下さい。

4.8 スタック管理サーバをアンインストールする

スタック管理サーバのアンインストール手順については、以下のマニュアルを参照してください。

- 『vDC Automation Standard Edition トポロジテンプレートオーケストレータオプション 利用ガイド』の『第5章 アンインストール』

4.9 管理対象マシンをアンインストールする (Windows)

注

DeploymentManager クライアントをインストールしている場合は手順1から、インストールしていない場合は手順5から始めてください。

- コントロールパネルの[プログラムの追加と削除]で [DeploymentManager]を選択し、アンインストール操作を開始します。
- [DeploymentManager セットアップタイプ]画面が表示されますので、[アンインストール]を選択して[次へ(N)>]をクリックします。
- 確認ダイアログが表示されるので[OK]をクリックし、アンインストールを開始します。
- 完了メッセージが表示されるとアンインストールは完了です。
- インストール DVD を DVD ドライブに挿入します。
- コマンドプロンプト、またはエクスプローラから以下のコマンドを実行し、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラを起動します。

```
> <インストール DVD>:\install\Windows\vDCAInst_SE.exe
```

- インストーラが起動します。
- [カスタム(C)]を選択し、[次へ(N)]をクリックします。
- [WebSAM メディア]を選択して、[実行(R)]をクリックします。
WebSAM フレームワークメディアインストーラが起動します。
- [アンインストール]ラジオボタンを選択し、[次へ(N)>]をクリックします。
「アンインストールする製品の選択」画面が表示されます。
- 以下のコンポーネントのチェックボックスにチェックを入れます。
 - [Agent]-[サービス 104]配下の以下のコンポーネント
 - WebSAM SystemManager G
- [次へ(N)>]をクリックすると、「アンインストール確認」画面が表示されます。

13. [対象製品:]を確認し、[開始(S)]をクリックします。
選択したコンポーネントのアンインストールが実行されます。アンインストールが完了すると、「完了」画面が表示されます。
14. [完了(F)]をクリックします。
15. 以下のレジストリを削除してください。
 - HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\NEC\vDCAInst\AG
16. インストール時に設定した「インストール先フォルダ」が残っている場合があります。不要であれば削除して下さい。

4.10 管理対象マシンのアンインストール(Linux)

1. root アカウントでシステムにログインします。
2. インストール DVD を DVD ドライブに挿入します。
3. 以下のコマンドを実行し、DVD をマウントします。
この例では、マウントポイントを「mnt/dvd」としています。

```
# mount /mnt/dvd
```

4. カレントディレクトリを変更します。

```
# cd /mnt/dvd/install/Linux
```

5. vDCAInst.sh を実行します。

```
# ./vDCAInst_SE.sh
```

注

実行する環境によっては、インストール DVD 上のファイルに実行権限がないため、実行できない場合があります。このような場合、任意のディレクトリ配下にコピーし、**chmod** コマンドですべてのファイルの実行権限を与えてから起動してください。

6. インストーラが起動し、以下の画面が表示されます。

注

インストール画面が乱れる場合、環境変数 **TERM** を **vt100** に設定してインストーラを起動しておしてください。

```
*****
vDC Automation Standard Edition Installer
*****

Welcome to vDC Automation Standard Edition installer.
```



```

1. Typical : installs all products necessary to the function type
              of WebSAM vDC Automation you select. (Recommendation)

2. Custom : allows you to install the necessary products to the
              function type of WebSAM vDC Automation separately.

Please select the operation.
(1:Typical 2:Custom q:quit program):

```

1[Enter]を入力します。

```
(1:Typical 2:Custom q:quit program):1
```

7. 以下のような画面が表示されます。

```

*****
Welcome to WebSAM vDC Automation !!
*****

This program will install/uninstall products.

2. Uninstall

Please select the operation.
(2:uninstall q:quit program):

```

2[Enter]を入力します。

```
(2:uninstall q:quit program):2
```

8. インストールされているコンポーネントの一覧が表示されます。

```

-----
Installed products
-----
    Agent
      1 Service104
      1.1 WebSAM SystemManager G Agent 9.0.0.0
    Other
      2 WebSAM vDC Automation Standard Edition Managed machine
components
-----
Please select product(s) by entering numbers separated by commas.
[Example: 1.1, 2.1]
(v[n]:view b:back q:quit program):

```

以下の通り、WebSAM vDC Automation Standard Edition Managed machine components を選択します。

```
(v[n]:view b:back q:quit program):2
```

9. アンインストールするコンポーネントの確認画面が表示されます。

```
-----  
Final confirmation  
-----  
      Other  
          2 WebSAM vDC Automation Standard Edition Managed machine  
components  
-----  
Is it OK to start uninstallation?  
(y:yes n:no q:quit program):
```

y[Enter]を入力します。

```
(y:yes n:no q:quit program):
```

選択したコンポーネントがアンインストールされます。

第 5 章

トラブルシューティング

本章では、vDC Automation Standard Edition のインストール、アップグレードインストール、およびアンインストール中に問題が起こった際の対処方法について説明します。

目次

5.1 SigmaSystemCenter のトラブルシューティング	123
5.2 インストーラのトラブルシューティング	123
5.3 SystemManager G 機能のトラブルシューティング	129

5.1 SigmaSystemCenter のトラブルシューティング

5.1.1 ESMPRO/ServerManager アンインストール後のメッセージについて

- [現象]

ESMPRO/ServerManager のアンインストール後、初回再起動時に以下のエラーメッセージが表示される場合があります。

- [メッセージ]

'setup.exe' が見つかりません。名前を正しく入力したかどうかを確認してから、やり直してください。 ファイルを検索するには、[スタート] をクリックしてから、[検索] をクリックしてください。

- [原因]

InstallShield 2008 の不具合により発生します。

- [対処方法]

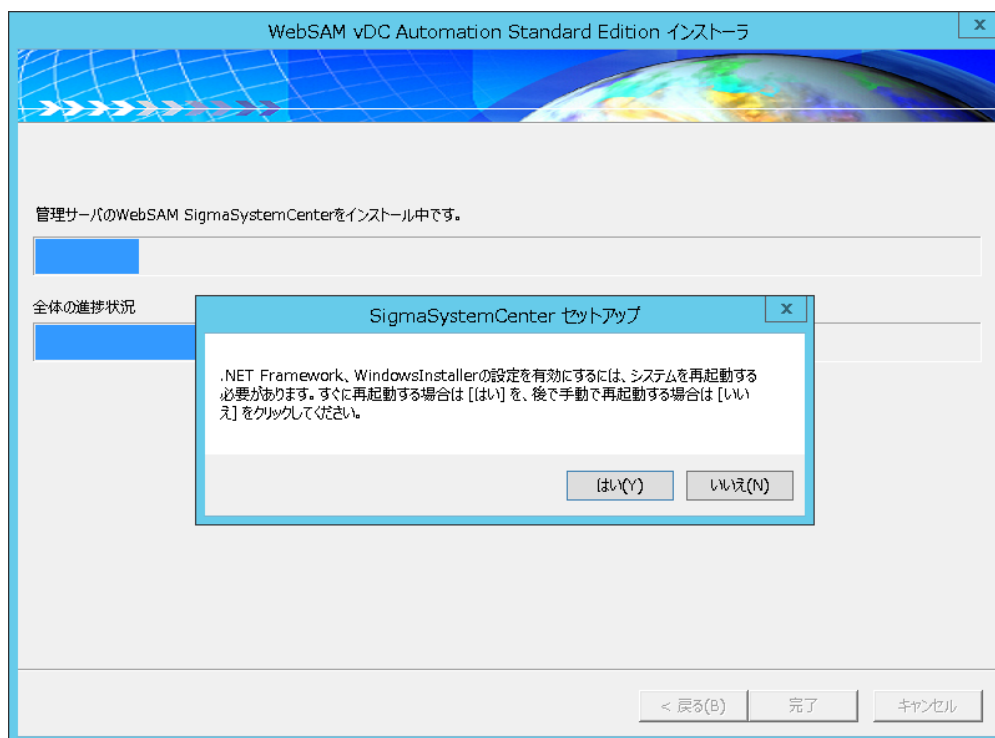
対処は必要ありません。アンインストールは正常に完了しており、システムに影響はありません。

5.2 インストーラのトラブルシューティング

5.2.1 管理サーバのインストールで再起動を要求される

- [現象]

管理サーバのインストール中にシステム再起動を要求される。



- [原因]

管理サーバの **SigmaSystemCenter** コンポーネントのインストールにおいては、再起動が必要なケースがあるため。

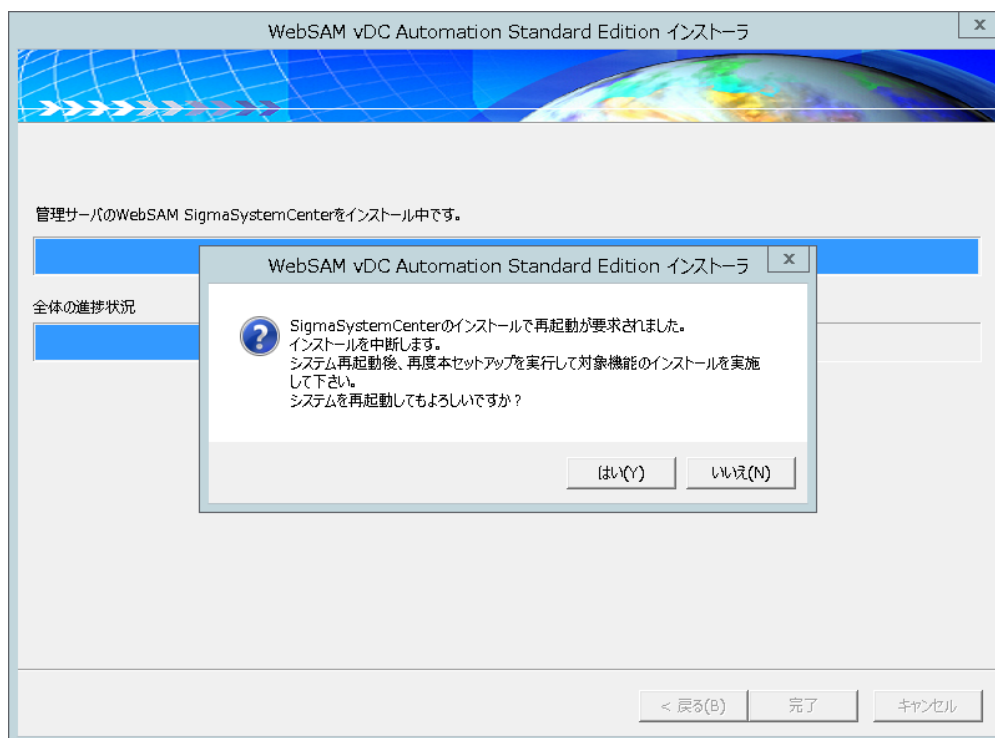
- [対処方法]

.Net Framework 4.7.2 がインストールできているか確認してください。 .Net Framework 4.7.2 のインストールについては「[2.2.5 .NET Framework 4.7.2 をインストールする \(18 ページ\)](#)」を参照してください。

.Net Framework 4.7.2 のインストールを行った後に、再度、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラを起動して、管理サーバのインストールを行ってください。

- [現象]

管理サーバのインストール中にシステム再起動を要求される。



- [原因]

管理サーバの **SigmaSystemCenter** コンポーネントのインストールにおいては、再起動が必要なケースがあるため。

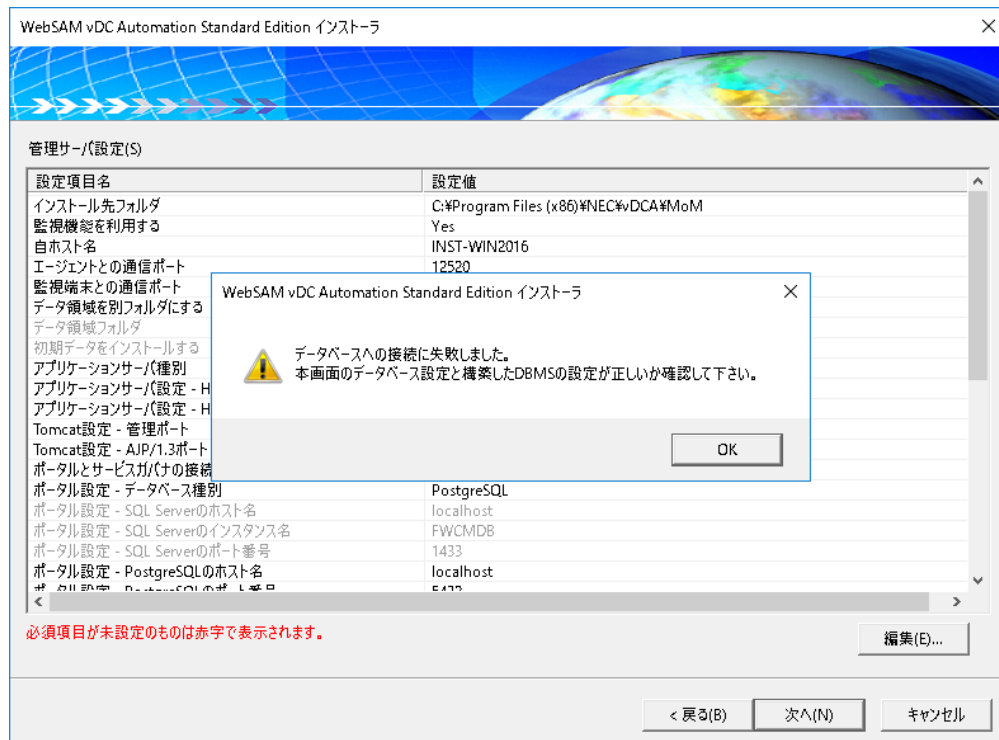
- [対処方法]

システム再起動を行った後に、再度、vDC Automation Standard Edition 統合インストーラを起動して、管理サーバのインストールを行ってください。

5.2.2 管理サーバのインストールでデータベースへの接続に失敗する

- [現象]

管理サーバのインストールでデータベースへの接続に失敗する。



- [原因]

管理サーバのポータルまたは SigmaSystemCenter が PostgreSQL を使用する場合、『管理サーバ設定』画面の PostgreSQL に関する設定値に誤りがある。または、PostgreSQL のインストール時の設定に誤りがある。

- [対処方法]

PostgreSQL がインストールされ、システム環境変数 PATH に PostgreSQL のインストールパスが設定できているか確認してください。PostgreSQL のインストールについては、「[2.2.10 PostgreSQL をインストールする \(25 ページ\)](#)」を参照してください。

データベースに接続確認します。以下のコマンドを実行し、「0」が表示されることを確認してください。「0」が表示されない場合、指定した値が正しいか確認してください。

- ポータルで PostgreSQL を使用する場合

```
>psql -h <ポータル設定 - PostgreSQL のホスト名> -p <ポータル設定 - PostgreSQL のポート> -U <ポータル設定 - PostgreSQL の管理者ユーザ> -d postgres -c ""
ユーザ <ポータル設定 - PostgreSQL の管理者ユーザ> のパスワード:<ポータル設定 - PostgreSQL の管理者パスワード>
>echo %ERRORLEVEL%
```

- SigmaSystemCenter で PostgreSQL を使用する場合

```
>psql -h <リソース管理機能設定 - PostgreSQL サーバの IP アドレス> -p <リソース管理機能設定 - PostgreSQL のポート番号> -U <リソース管理機能設定 - PostgreSQL のユーザ名> -d postgres -c ""
ユーザ <リソース管理機能設定 - PostgreSQL のユーザ名> のパスワード:<リソース
```

```
管理機能設定 - PostgreSQL のパスワード>
>echo %ERRORLEVEL%
```

例

```
>psql -h 127.0.0.1 -p 5432 -U username -d postgres -c ""
ユーザ username のパスワード:
>echo %ERRORLEVEL%
```

5.2.3 インストール時にエラーが発生する

インストールが失敗した場合、インストール終了画面にエラーコードを表示(err=xxx)します。

エラーの内容、原因、対処は以下の通りです。

SigmaSystemCenter と DeploymentManager クライアントのエラーについては、『SigmaSystemCenter インストレーションガイド』を参照してください。

エラーコード	内容	原因 / 対処
51	管理者権限なし	実行ユーザに管理者権限がありません。管理者権限のあるユーザで実行してください。
52	二重起動エラー	インストーラが二重に起動されました。他でインストール操作が行われていないかをご確認ください。
54	起動時リカバリ失敗	起動時の復旧処理に失敗しました。お問い合わせ窓口までご相談ください。
55	テンポラリフォルダのアクセスエラー	テンポラリフォルダ（環境変数%TMP%または%TEMP%）にアクセスできません。テンポラリフォルダが存在し、書き込み可能であることをご確認ください。
56	インストール先フォルダへのアクセスエラー	インストール先フォルダにアクセスできません。インストール先フォルダが書き込み可能であることをご確認ください。
57	ファイルの展開失敗	ファイルの展開処理に失敗しました。テンポラリフォルダに空き容量が十分あるか確認してください。
59	インストール先パスが不正	インストール先のパスが不正です。正しいドライブおよびフォルダを指定していることをご確認ください。
61	バージョンダウンエラー	より新しいバージョンの製品がインストールされています。製品のインストール状況をご確認ください。
63	サービス停止エラー	サービスの停止に失敗しました。一定時間お休み、対象のサービスを停止して再試行してください。
65	インストール先へのファイルコピー失敗（ファイルビジー）	インストール先フォルダのファイルがビジー状態です。一定時間お休み、サービスを停止して再試行してください。
66	テンポラリへのファイルコピー失敗（ディスクフル）	テンポラリフォルダの容量が不足しています。空き容量を確認してください。
67	インストール先へのファイルコピー失敗（ディスクフル）	インストール先フォルダの容量が不足しています。空き容量を確認してください。

エラーコード	内容	原因 / 対処
68	テンポラリへのファイルコピー失敗	テンポラリフォルダの空き容量が不足しているか、またはアクセスできません。テンポラリフォルダが存在し、書き込み可能であることを確認してください。
69	インストール先へのファイルコピー失敗	インストール先フォルダの空き容量が不足しているか、またはアクセスできません。インストール先フォルダが書き込み可能であることを確認してください。
他	—	「5.2.4 障害情報を採取する (128 ページ)」の手順で障害情報を採取し、お問い合わせ窓口までご相談ください。

5.2.4 障害情報を採取する

インストール実施時に、本書に記載のないエラーが発生した場合は、以下の手順で障害情報を採取し、お問い合わせ窓口までご連絡ください。

なお、Windows にてリモートデスクトップ接続を利用してインストールを実施している場合は、エラーが発生したセッションを切らずに本手順を実施してください。

セッションを切断した場合は、障害情報が削除される場合がありますのでご注意ください。

- [Windows での手順]

- 標準モードの場合

1. エクスプローラで以下のパスを開きます。

インストール先フォルダの一階層上のフォルダ

例：C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA\MoM の場合、C:\Program Files (x86)\NEC\vDCA となります。

複数機能を同時インストールした場合、最初にインストールが行われた機能のインストール先フォルダとなります。

2. 開いたフォルダ配下に存在する、inst_log フォルダを右クリックし、[送る(N)]-[圧縮 (zip 形式) フォルダ]を選択します。
3. 作成された inst_log.zip を採取します。
4. 採取したファイルをお問い合わせ時に送付してください。

- カスタムモードの場合

1. エクスプローラで以下のパスを開きます。

%TEMP%

2. 開いたフォルダ配下に存在する、vDCAInstall.log と WEBSAM_FW_LOG フォルダを右クリックし、[送る(N)]-[圧縮 (zip 形式) フォルダ]を選択します。
3. 作成された WEBSAM_FW_LOG.zip を採取します。
4. 採取したファイルをお問い合わせ時に送付してください。

- [Linux での手順]

1. システムに **root** でログインします。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
# cd /tmp  
# tar czvf WEBSAM_FW_LOG.tar.gz WEBSAM_FW_LOG
```

3. 作成された/tmp/WEBSAM_FW_LOG.tar.gz を採取します。
4. 採取したファイルをお問い合わせ時に送付してください。

5.3 SystemManager G 機能のトラブルシューティング

5.3.1 監視端末が起動できない

- [現象]

SystemManager G 機能の監視端末起動時に下図のようなダイアログが表示され、監視端末が起動できない。ログイン画面が表示されない。



- [原因]

以下の原因が考えられます。

- 監視端末のインストール時に指定した「マネージャのホスト名」または「マネージャとの通信ポート」が誤っている。
- Windows ファイアウォールにより通信が遮断されている。
- マネージャサービスが起動していない。

5.3.2 障害情報を採取する

SystemManager G 機能に関して、本書に記載のないエラーが発生した場合は、インストール DVD に 同梱されている情報採取ツールを利用し、障害情報を採取してください。

情報を採取する際、共有ディスクを指定してください。

- [Windows 用情報採取ツール]

<インストール DVD>:\fw\tools\dawebsaminfo\Windows\

- [Linux 用情報採取ツール]

<インストール DVD>:\fw\tools\dawebsaminfo\UNIX\

使用方法については同梱されている relmemo_sjis.txt（または relmemo_euc.txt）を参照してください。

付録 A 改版履歴

- 第 1 版 (2020.4): 新規作成

WebSAM vDC Automation v7.0

Standard Edition セットアップガイド

2020 年 4 月 第 1 版 発行

日本電気株式会社

©NEC Corporation 2012-2020